

『俚言集覽』大槻文彦(言海) 物集高見(日本大辭林) 落合直文(ことばの泉)等、いづれも辛抱の字を記し、**バウ**の假名遣とせり。但し『言海』には、「心法を守る意かと云」と附記せり。

### すあひ(牙僧)

#### 一 スアイ

喜多村信節

スアヒは衣などの古たるを買いあり

き、藏まはりは何にまれ、調度どもを賣まはるものとみゆ。これは……**駟**僧の字音スアイなるべし。されどもアヒのかなに書ならへど、スアイは駟僧の字音に近し。

『玉篇』云「駟、駿馬也」「會、兩家之買賣如今之度市」『呂氏春秋』「段干木、晉之大駟」『字彙』「牙僧、會合市

人者」牙字は誤れるよし『群碎錄』に「牙郎本作互郎。取互市之義。今訛爲牙郎誤」と見えたり。おもふに、駟は快走するを貨物の流通するに譬る歟。漢土の義はかくあれ共、こゝにてはさのみにもあらず。『尤草子』いつはる物の内、もの賣に、スアヒといふ物ども見えたり。

(嬉遊笑覽存探叢書本第二〇の四丁)

山岡俊明も『類聚名物考』第三冊の二一三頁に「今京都の方言に牙人をスアヒと云ふは駟僧の轉訛なるべし。中次の事にて、取賣買の商人を云ふなり。……劉貢父中山詩話「牙人古稱駟僧」今謂牙非也。劉道源云本稱互。即主互市。唐人書互爲牙。同訛爲牙。理或信然。今言萬爲万。千爲椒非訛也。若隱語爾牙人」といへり。

#### 二 スアヒ

大槻文彦 すあひ 爲間の義か。賣買の間に媒するを生業とする者。

(言海)

『俚言集覽』落合直文の『ことばの泉』等、いづれもアヒの假名遣とせり。

以上の外、谷川士清(倭訓栞)はスアヒとし、物集高見の『日本大辭林』には、スアヒスアヒの兩條にあげ、寺島良安は『和漢三才圖會』活版本三四頁に須和比と注せり。

### ずい(ぎ) (耿)

#### 一 ズキキ

ずい(耿)

小山田與清 ずゐき 『夢窓國師御詠草』に俳諧「芋の葉におくしら露のたまらぬはこれやずゐきの涙なるらん」云々。芋莖をズキキといへるもやゝふるさくこと也。いふ、頭書に、「多門院日記一の卷天文十三三二の條に「**蛭**唐芋ノ隨喜ヲ黒燒ニシテカケタルハ水ノ如クニ消マルト云云」と注せり。(松屋筆記圖書刊行會本第一の七三頁)

横山由清も『歌林襍考』に夢窓國師の歌をひき、「此詞の意は知がたけれど隨喜にかけてよれたればズキキの假字と定むべし」といひ、

物集高見(日本大辭林) 落合直文(ことばの泉) またキの假名遣とせり。

二 ズイキ

伴信友 ずい(耿) 『夢窓國師集』「いもの葉におくしら露のたまらぬはこれやずい(耿)のなみだなるらん」

(動植名彙全集第五の三六七頁)



谷川士清も『倭訓栞』いもじの條にズイキと書し、狩谷望之も『箋注倭名類聚抄』卷九の芋の條に「紫芋今俗呼唐乃伊毛其莖謂之受伊岐」といへり。

三 未定

一 『俚言集覽』ズイキ 假名未考。『續無名抄』世話字盡 「土芋莖 ズイキ 蕈」

二 大槻文彦 すゐき 芋苗。假名遣さだかならず。隨喜に寄せていへる文ありといへば此に收めぬ。或は窠引ズイキの義にて、窠ありて引乾すべき意なりともいふはいかゞ。

(言 海)

すおう(素襖)

とさへり。また、

田沼善一は『筆廼靈』前篇の三七條に『細流抄』の説をあげ、「其説ひが事もまじり、又取るべき事もあれば委く論べし。まづ古く武官の人の表に着る衣を襖と云る事あり。……武官の人の着るは鬨腋の袍なり。然れば惣て襖と云衣は鬨腋の袍かと思ふに然らず。字書に「襖ハシ」とあれば、寒を防ぐ衣なる事知るべし。……然れば何故に襖字を鬨腋には借用ひたると云に、漢土にて武官の者の襖を着るよしなど有しを、直に此方の衣に引當て、その状實をもよく正さず、鬨腋の袍に借て、襖子とは別に阿乎之と出せり。されば襖と云物、打まかせては袍の類を云にあらざると知るべし。又『和名抄』に布衣を加利岐沼としてあげたれば、狩衣とも殊

すおう(素襖)

一 スアヲ

一 西三條公條 『細流抄』國文注釋全書本、二三〇頁色々をあをの法に「狩襖也。面布にて裏絹也。昔はぬひ物などをもする也。又くくりぞめしたるもあり。當時スアヲとて着するは、此アヲのうらをのけたる物也」といへり。

『春湊浪話』存探叢書本上の一九丁に土肥經平はく「素襖といふは、今の布衣といふものの名なり。稱名院ちとゞの『細流抄』に「當時すあをとて着するは狩襖の裏をのけたるものなり」と注し給ふにてしるべし。狩衣を布衣とも狩襖ともいひて皆一物なる事は諸記に明かなり。素といふ字は染ざる縮の名なれば、是をとりて飾を加へざるものを素といふこと多し。銚子の柄を裏み飾らざるを素銚子といひ、襪をはかざるを素足といふ、皆是なり。素襖といふも、狩衣に裏も文もなく飾なければ其名をよぶ。是を布衣といふは後代の誤なり」

なるはもとよりなり。さて後考るに、古き書に、何とも名付がたき衣一種ありて、後世の素襖の本とも云べき。状に見えたり。袖の本をば惣て縫はて、腰より下は袴にて着こめたり。其物後世の衣にあつれば、素襖の體に類へり。それぞあをには有ける。……其を古くはた衣とて着けるなり。『允恭天皇紀』に「甲服チキテコロヒ襖中」ニ後にはから名などに當て、こまかにさだする事になりて、襖子とも呼、猶その昔のまゝにきぬとのみも云りけん。……いと古き石づくりの人形などが着たる衣の状を察ふに必此衣の舊キムの状なるべく覺えたり。天皇もうちの御よそひには、此きぬをめせる事にて、それいはゆる小袖なり。……『春日驗記』にかゝる状あり。木匠の状なり。已に出せるこたくみが状とも同じ。是等の如きは古き状の多くかはらざりし方なり。……『雜令』に奴婢の衣の事を云て、「春布ハルヌ衫袴云々冬



布襖袴云々」と云へる事あるなども、襖着たる書に思合せて見るべし。『時代不知職人盡歌合』にある蒔繪師の書は次に引が如し。其も襖に袴さたるにて衣の袖は小さかり。同物にても此段の始の書なるなどの如き類は、襖など呼れて、形もやうく古には違來りけん。袖などの大なるも、袍狩衣などの狀に引れ移れるなり。賤者が着たる方は同じ物にして、古に違ふ事少かるべし。小袖といふも、其襖の中より出たる名にて、世下り行まゝに、襖の袖大になれるから、古のまゝの製なりしをば、早く呼わけて小袖といへりしなり。……『和名抄』に襦衫と襖子と並べ舉たり。其をうけばりたる衣の部と思へば、心得られず。今の世ならば、小袖着る所に着る衣なりしなり。……さて狩衣の事を指て、狩襖とも云れど、其は同物ならず。常の衣をあをと云より轉りて、狩の時のきものなれば、狩あをと云出せるなり。

り。……襖と狩襖とは別にて、狩襖は狩衣の異名なり。その襖を後に素襖と呼て用る事となるは、京都將軍よりこなたの書にのみ見えたり。大方よき人の素襖を着る事となるまでは、大方の人直垂を着たるにて、職人盡の書なるは、職人も多く胸紐付たる直垂を着たり。其比は素袍と近き狀の衣も有しかど、素襖と云名もなく、又胸紐もなく、腋をも明ざりしを、直垂にならひて、其衣に胸紐をも付、又腋をもあけ、新に素襖と云名を付たるなり。そは彼美しく作る事も有し襖の裏をも去て、惣ても質素くしたるより素襖とは付しなり。そは元うけばりたる禮の服にはあらぬが、後には禮の服ともなれる也」といへり。

二 喜多村信節

古へ賤の男といへども、みな烏帽子に素襖を着たり。アアといふは字音なり。『玉篇』「襖、烏老切。襖袍也」とありて、うへの衣なり。……本居翁云『和

名抄』襖子を阿乎之とあるは、ウの音をアに轉じて、御國言

の如くいひなせる例にて、芭蕉をハセヲバといひ、『拾遺抄』

物名に、紅梅を隠してコヲバイと讀るなどの如しと有り。編

いふ、字音假字用格(全集第四の九八九頁)に見えたり。

『衣服令』を案するに、武官の袍を闕腋といひ、文官の袍を縫腋といふ。闕腋の袍には襦なし。是を位襖キアテと記したり。

位によりて色の定めある故なり。いづれも綾をもて製るな

り。素襖は布にて製る故、その形少異なれ共、みな上に著る

ものなれば准へて名づくとす。編者いふ、なほ春湊浪語・細流抄の説を次に引きたれど、これを略

せり。

(嬉遊笑覽存探叢書本三の六丁)

岡本保孝も『松屋筆記』國書刊行會本第三の一八九頁に「素襖スアウ素袍スベウ

素襖を素袍と書くは音便より誤れる也。『庭訓往來扶

翼』十月返事の條にくはし」といへり。

二 スアウ

谷川士清

すあう 素襖の音也といへり。『源氏』にすあをと見えたり。編者いふ、闕屋の卷に、あ布を用ゐて唐綾をとおるを誤れるならむ。

の襖に對したる名也といへり。『大雙紙』にすあは越後ぬのを染たるをいふと見えたり。又射手すあう丸すあう見えたり。

(倭訓 栞)

物集高見の『日本大辭林』に「すあう 素襖。あさぬのにてこしらへたる襖にて武官または無位無官のひとなどのさるもの貞丈雜記」とあり。近藤真琴も「ことばのその」にスアウとせり。

三 スアウ・スアウ・スハウ

大槻文彦 『言海』すあをすあうの各條に、「素襖。素袍の條を見よ」と注し。



すはうの條に、「すはう 素袍。古くスアヲとあり。素襖の音にて布の襖の意なりともいふ。或は布の袍と見ても通ぜむか」といへり。

落合直文の『詞の泉』また同じ説なり。

●参考

一 伊勢貞丈の『貞丈雜記』五の二に「素襖の事。襖之字は『玉篇』と云書に「袍襖」と注したり。袍も襖も一類なるゆへ、『玉篇』に袍襖と續て云ひたる也。袍襖は上に着る装束にて、禮服也。此禮服は官位ある人は綾などを以て縫ふ也。無位無官の者は麻布を以て縫ふゆへ素襖と云也。素とはかざりもなく鹿相なるを云也。襖字の音はアフ也アフの音轉じてアフとよみて和訓のごとくなれり。公家の朝服に袍と云服あり。襖と云服あり。『衣服令』と云古書に文官の服を袍と云。是は縫腋の衣也。武官の服を襖と云。是は關腋の衣也。此襖の事を後代は關腋の袍と云。

へのきぬとは上着と云ふ言なり。

素襖は關腋なれば襖の字用ふるも近からんか。是れは形に依りて云ふなり。形にかはらずうへのきぬの義に依りて云はば袍の字用ふるも又違はず。素とは織物を用ひず麻布を以て質素なるを云ふなり。花美ならぬ事なり。

又云はく素襖(素袍に同じ)古記に見えず。京都將軍以來の書に見えたり。古代無位無官の庶人の服は直垂なり。水干の直垂あり。長絹の直垂あり。將軍義滿公武家の制度を立てられし頃、布の直垂に大紋を付けて大紋の直垂と稱し、無紋の布直垂は其の已前よりこれあり。其の大紋の直垂の紋の付く所、うしろ腰の組紐・菊綴等の違へを大紋の直垂より一等下の服を定めて素襖と付けて武士の階級を分けられしならんか」といへるは疑はし。

二 塙 保己一の『武家名目抄』故實叢書本卷一 七の一八八〇頁に「素襖に素袍・蘇芳又巡方等の字を用るは、皆字音を假りたる也。此者の裁縫たりくびとくびかみの替れるのみにて、かの襖にやや

すじる(振)

本名は襖なり。「編者いふ、なほ安齋隨筆(故實叢書本卷五の一六一頁)にれば、鷹狩のときに着る襖と云ふ事にて狩襖と云ふなり」「素襖 是れは武官の襖にも狩衣にも拘りたる事には非ず。玉篇襖の字の註に、袍襖と云へる意にて素襖の襖はたゞ表の義なり。賤人の表衣を麻布にて製し、文飾もなき故、素の字を付けて云ふ也」ともいへり。

素襖とも書き又素袍とも書く。襖の字をよしとすべし古書に皆襖の字を用たり。又かなに書くにスハウ又スワウなど、書くは悪し。スアフと書べし。スアフと書てスアヲとよむ事本也。アフヒと書てアヲヒとよむと同じ例也。素袍と書たるもあしきにはあらざれども古書には多く素襖と書なればそれに隨ふべし。○編者いふ、頭書に「素袍と云名目の古書に見えしは寛正・應仁・文明の比の書に見ゆ。上下と云名目は、應永の比より見ゆ。其以前の書に素袍・上下と云こと見えず」とあり。といへり。然るに『安齋隨筆』故實叢書本卷三の一〇〇頁に、更に、「素袍、スハウ。素襖、スアウ。兩様に書き來れり。何れも詞にはスヲウと唱ふ。其の服の形袍にも似ず、襖にも似ず。然れども袍襖と連ねて字書にも見えて上に着する禮服の總名なれば兩様に書くも宜しきなり。我朝にては、文官のうへのきぬを袍と云ふ縫腋なり。武官のうへのきぬを襖と云ふ關腋なり。う

相似てひとへなるが故素襖といふ。又の名を單襖とも單物ともいふをもて其然るを知るべし。舊説に其製質素なる故、素襖といふは今取らず」といへり。

すじる(振)

スチル

谷川士清 すちる 『徒然草』にみゆ。筋より出でてたる俗語なるべし。喙斜をスチリュガムとよめり。○すぢりもぢりといふ語は『宇治拾遺』に見えたり。

(倭訓 栞)

契沖の『和字正濫鈔』五の二に「眞名未考すぢる」『同書』五の二に「眞名未考よぢり」『宇治拾遺』によぢり不動といへる事あり。俗にもいふ事なり。すぢるといふに



近く聞ゆ』といへり。

『俚言集覽』愚按に『假字姑く『正濫鈔』スヂルに从ふ』とあり。

すず(錫)

スズ

一 松永貞徳 『和句解』六の一に「錫 すず。酒を入、水を入れてみるに、新さはすずしきもの也」

二 高橋殘夢 『國字定源』に「すずは金色の清涼なるなり」

大槻文彦(言海)が「清鉛スズナマリの意か」といへるも同意なるべし。

三 貝原篤信 『日本釋名』三の二に、「錫 すずは、うす

ずみ色なり。上下を畧す」

四 谷川士清 『倭訓栞』に「酒器にスヂといふは、味酒鈴鹿國など見えて、もとは鈴の口のさけたるものなれば、眞拆の義なるを轉じて、味酒といひしよりの事成べし。○錫を訓するも酒器に作るより名とせるなるべし。『續日本紀』に白鑽も訓せり」

伴 信友も『倭姫命世記考』全集第五の四二頁に「味酒鈴鹿國とは、味酒ウツサケを入るる酒器スズと云かけたるなり。今スズと云ふ金ありて、錫の字を釋アテ填たれど、錫は『和名抄』に「唐韻云鉛錫。爾雅云錫謂之錫。白錫也。兼名苑云錫一名白鑽。和名之路奈麻利」と見え、本草和名には錫・銅をあげて、和名奈末利とみゆ。和名抄には「説文云、鉛。和名奈末利、青金也」とありて錫と分てり。たり。此錫もて酒器をもはら製ることなれるより、錫シロメをスズといふこととはなれる也。なほ今も此錫もて作れる口細き壺をスズといひ、神に奉るを「神酒スズ」ともいへり。

田舎人などの陶の口細き壺をスズといへるがあり。中々に古言の遺れる也』といへり。

すず(篠)

スズ

一 谷川士清 『すず』小竹の類をすずといふは、涼しき意にや。「吉野の嶽にすず分けて」とも「大たけのすず吹く風に」とも「すずの下道」ともよめる是也。

(倭訓栞)

二 屋代弘賢 『すず』新古今集 風雅集 『冠辭考』に「古事記の須々鈎スヂを神代紀に、跟踰鈎スヂチと書たるは、すゞろく意也。『同紀』に「美人驚而立走伊須々岐伎」伊は發語、下の伎は、氣利反にて辭なり。といふも、立走すゞろきたる也。此外祝詞などにも多し」とみえたり。

すず(篠) すずしろ(春の七種の一)

さればすずは此竹、風吹時は、大葉細竿の故を以て、常竹よりは、すゞろきぬるを以て名付しなるべし。

(古今要覽稿國書刊行會本第五の一三頁)

三 岡村尚謙

『すずはささ』と同意にて、物の細小なるをいへる古語なれば、鶴鶴をささき、雀をすずめといへる類なるべし。又『風雅集』に「すずか竹か」といへるによれば、すずはもと筍の名にて、此筍の細小なるをさしていひしなるべし。編者いふ、風雅集卷二〇、賀部に「たかむなのほそきを奉られて、是はすずか竹か、いづれ見わきてと……」とあり。

(古今要覽稿國書刊行會本第五の一三頁)

四 大石千引

篠スズ 小竹ササ

(言元梯)

すずしろ(春の七種の一)



スズシロ

一 谷川士清 すずしろ 七種の菜にいふものは、蘿蔔也といへり。さればすずは涼しき義。しろは白の義成べし。

一説に、本草に「薊其花如髻也」といへば、あざみなるべしといへり。されば髻スズシロの義によれる也。編者いふ、新井白三の三九三頁に「ス、シロとはアザミを云ひぬらん。倭名鈔に「小兒剪髮所餘」をス、シロといふと見えたり。本草衍義に據るに、薊は猶髻といふが如し。其花髻の如くなれば、此名ありと見えたり。アザミの花の小兒のスマシロの如くなりければ、俗に又かく名づけしなるべし」といへり。

(倭訓栞)

曾 永年の『春の七くさ』一九に「酒々代 あるひは鈴白と作り。スズは涼しき義。シロは白の義なりといへり。又スズナにかはるといふ義なりともいへり。

『公事根源』の旁注に、菜菔。和名ツチオホネ『順抄』に、菑、和名、オホネ。俗大根二字をもちうとみえたり。『仁徳紀』に「ツチオホネ根生山城女の木コノハもち打しおほね根

は、その説いかゞあらん。

(古今要覽稿國書刊行會本、第六の九五二頁)

すずな(春の七種の二)

スズナ

一 谷川士清 すずな 七種の若菜に入り、『拾芥抄』に菁をよめり。燕菁をいふ。されば菘也といへり。又スズは小をいへば、今いふヨメナなるべし。薩摩にていふは、常に其國に食ふ豆の芽なり。

(倭訓栞)

二 曾 永年 菁 『河海抄』にすなとみえたり。スとは狭々の義にして、小なるをいふなり。これは雪解比につむ若菜なれば、ススといひしも義なり。今の俗に、小な

すずな(春の七種の二)

白シロの白手ダなふき……」又元永六年、等院御幸の御膳生物の内にいへる白根は、カブラに並べれば大根なるべしとぞ」といへり。

大槻文彦の『言海』に「すずしろ 清白スズシロの義かと云」といへるも、士清の説をさせるなるべし。

二 屋代弘賢

すずしろ 河海抄拾芥抄公事根源年中行事 ○按に『延喜式』

に「蔓根須保利六石」「菁根の須々保利一石」とみえ、又『新撰字鏡』に「薤菹同、側魚反、須々保利」とみえたり。これによるに、皇朝にて、スズホリを作るに、蔓根菁根の二種を用ゆるは古よりのならはし也。『河海抄』以來このおほねをさして、すずしろといひしは、即すずほりしろの中略にて、そのおほねを以て、蔓根菁根の代とせしによりて、此名は出来しなり。然るを『春の七種考』に「酒々代あるひは鈴白に作る。すずは涼しき義。しろは白の義なり」といひ、又「すずなにかはるといふ義なり」ともいへる

るを菁菜とも、亦なべてアヲナともいへり。『埤雅』に「菘は冬をしのぎて松の操のごとし。故に名とす。北に在ては蔓菁となりて根あり。燕菁、一名蔓菁。今いふカブラナのことなり。順抄に蔓菁をアヲナとよみ、蔓菁根をカブラとよめり。さればいにしへ、カブラの葉をさして、アヲナといへり。凡ナといひしは、菜菔の總名なり。南に在ては菘となり、菁となりて根なし」といへり。是菁をススナとせしは、

この文にやよるなるべし。『汝南圃史』に「冬を蹋菜トウナといひ、春を春菜といひ、又白菜といふ。夏を菘菜スウサイといひ、秋を葵菜キサイといひ、又秋菜といふ」といへり。通雅に、「いにしへ菜を以來は菘と云。今是を菜といふ」といへり。いひて、葵となす。晋

あるひはいふ、「ススは小なるをいへば嫁菜なるべし」といへり。又「かぶらの根、鈴に似たれば、かぶらのことなり」ともいへり。

(春の七くさ一五丁)

大槻文彦の『言海』に「すずな 菘。スズは小き義と云。トウナに同じ」といへり。



三 岡村尚謙

すずな 『新撰字鏡』に菹字を須々保利

(倭 訓 栞)

とよみ、『延喜式』に「蔓根須々保利六石」「菁根須々保利一石」など見えたり。されば蔓根も菁根も、ともに須々保利に造るものなれば、スズナは即ちススホリナの中略なるべし。

(古今要覧稿國書刊行會本、第六の九〇二頁)

ずだずだに(寸々)

一 ズダズダニ

谷川士清

ずだく 『神代紀』に寸々をよめり。寸

斷の音をもて訓とするにや。西土の書に寸々斷之といふ語あり。又『晋書』に「截、蛟數段とす」と見えれば數段の音にや。

二 ヅダヅダニ

横島昭武の『合類大節用集』卷八の四九丁 ツの部に段々分々寸々等をヅダく<sup>ツ</sup>と訓せり。

三 ズダズダニ・ヅダヅダニ

大槻文彦

『言海』ずたずたにの條に「ずたずたに

寸寸。古言スタスタニの轉

つたつたにの條に「つたつたに 寸斷。細かく切れ切れに。づたづたに、又すたすたに」 次なるづたづたにの

條に「づたづたに 前條の語に同じ、又ずたずたに」とあり。

落合直文が『ことばの泉』 説ほど同じく、物集高

見は『日本大辭林』に「すたすたに 寸斷。されぎ

れに。『遊仙窟』寸斷<sup>スダズダニ</sup>「つたつたに 寸斷。され

く<sup>ツ</sup>に。『夫木』<sup>三</sup>「朝日さすかたの村霧はれやらで

山つた<sup>ツ</sup>く<sup>ツ</sup>にみゆる秋かな」と注せり。されど、ずた

ずたにづたづたにの語は記載なし。

● 参考

鈴木重胤の『日本書紀傳』第四の五に九〇頁に「寸斬<sup>ツダクニキル</sup>。此二字の

訓を都陀々々爾伎流と有るは甚く後の事ならむと思ひつるに、『靈異記』に「衣欄捕粉條然」と有る下に、「條然<sup>ニ合</sup>都太<sup>都太</sup>々々」と訓を註し、又『名義抄』に寸字を伎陀々々又都陀々々と有る。其言義を未得ずと雖も、其古言なる事此を以て

すなわち(即則乃)

二 日尾 瑜

『訓點復古』上の二に、三丁に、「スナホと云こと、

知らるれば、猶本の任に訓みて有りぬ可くなむ所思ゆる。但伎陀々々と同言なりと聞ゆるなり」といへり。

飯田武郷の『日本書紀通釋』第一の五三頁 この説によれ

り。

すなわち(即則乃)

スナハチ

一 貝原篤信

『日本釋名』三の五〇丁に「則 スナハはス

ナヲ也。すぐなる意。チはミチ也。すなはちはスグミチ也。

何の滯もなく、すぐみちに其まゝと云意也」

谷川士清(倭訓栞)の説また同じく、「すなほ路也。

たゞちといふが如し」といへり。



チは助語にて、直の字の意也。スナホはマスグなることなれば、曲らず、傍へよらず、此がやはり此者ぢやと云處に、置字也」

三 山岡俊明

『類聚名物考』第六冊の七二〇頁に「すなはちはソノハテの轉語歟。則を「云々ノトキハ」と訓むも、時の意に用ゐて、物のをはりに用ゆる詞なり。然らば其果の意成べし。素乃婆底を吳音に訓めば、スナハチなり。漢音に訓めばソノハテなり。音の相通ふ事しるべし」

四 香川景樹

『東塙亭塾中間書』桂園遺稿下巻の三六〇頁に、「スナハチは爲ノ後と云意の轉にして、一つの詞となりしなり。されば、句尾におきて、いにしへは句頭におかず。然るを、後人ひたすら句頭につけてよむは謬なり。『古今集』の詞書に、「男まかりてすなはちみまかりにければ云々」『貫之集』に「はるたしんすなはちごととに君がためちとせつむべさわかなくりけり」又『古今集』の序に「近き世に其

名聞をたる人はすなはち僧正遍正は云々」是ら皆句尾につ

くにて、同人のつかはれたるスナハチにて慥なる證也」

また『桂園語釋』下巻の六九丁に「スナハチの意は爲之後にて、是をなすやがてをいふ也。スノノチとは唱へがたきより、スノをスナといふより、下のノもハといはるゝは調の自然也。是も古はスルノチ・ナセルノチなどいひて、定れる言にてはなかりけん。いひならすまにく、遂にかくひとつ

五 大槻文彦

『言海』に「すなはち 其程の轉と云ふ。當れり。「春立たむすなはち毎に」「生れ給ひしすなはちよ

り」など見るべし」此の他、松永貞徳の『和句解』に「即 すなはち。沙は土か。スナと云ものは土がなる也。別のものにあらぬと云心也」といへり。

また、大石千引は『言元梯』に直間所の義とせり。

すも う(相撲)

むこう(向)やも  
う(病)の條参照

一 スマフ

一 黒川眞頼 動詞四階轉成名詞。すまふ・うるふ・たける・むかふ。これら、いづれも動詞なれど、云ひすうれば名詞となるなり。その例を示さむに、「負けず劣らずしてすまふ」と云へばすまふは動詞なれど、すまふとりといへば、云ひすわりて名詞となるなり。またすまふとのみ云ふとも名詞なり。……

その外うるふ・たける・むかふなども、「雨降りて木草うるふ」と云ひ、「怒りたける」と云ひ、「立ち向ふ」と云へば、動詞なること勿論なれど、うるふ・月・やそたける・むかふ鳥といへばうるふ・たける・むかふは云すわりて名詞なり。

二 落合直澄

截斷詞の物名。截斷にて物名となれるもあり。これは居體言と名づくるも害なし。

すまふ(角力。古へすまひ) かげろふ(陽炎。古へかぎろひ) うるふと潤。古へうるひ) みたまのふゆ(恩頼。御賜の殖の義) ほたる(螢。火垂の義) ふ(芝生蓬生の類) いつみ(泉。いでみの音轉なり。温泉をいでゆといへるに同じ。然ればこれは異例なり)

『古今集』「我衣手のひづをからなむ」ひづを物名として、をいふ、古今集夏の部、讀人しらすの歌にして、「聲はして涙は見えぬ時鳥我衣手のひづをからなむ」とあり。この外、神名人名等には此例少からず。

三 佐藤誠實

すまふ 争。あらそふなり。相撲をスマフと云も是なり。辭退することにも用ゐる。

(語學指南三の三丁)

(皇典講究所講演二五號。詞考筆録)



四段には又第三の音連體言を以て、體言としたるあり。ウルヒ月といふべきをウルフ月、ムスビノ神と云ふべきをムスブノ神といへるが如し。

(語學指南一の三二丁)

落合直澄『皇典講究所講演』二五號。續體詞の物名の

詞考筆録

條に「よすが(因處) ゆくへ(行方) しるべ(知方)

の類は、續體詞より體言に續きて、一の物名となれり」

とて、なほ つるべ(釣桶) なるかみ(鳴神) ゆくさ

き(行先) よぶこどり(喚子鳥) ふすま(襖) はふむ

し(昆虫) とぶとり(飛鳥) たるひ(垂氷) たるさ

(糠) 等の語を擧げたり。參考の爲に抄出せり。

この他、伊勢貞丈(安齋隨筆故實叢書本卷三の八四頁) 市岡猛彦(雅

言假字格) 加茂季鷹(正誤かなつかひ) 狩谷望之(箋

注倭名類聚抄二の三丁) 藤の舎千尋(玉の小琴) 等いづ

れもスマフと記せり。また、

小栗百萬の『屠龍工隨筆』存探叢書に「すまひは體、

すまふは用の詞なり。物の名をいふ時は、都て體を用

るなれば、すまひといふべきを、すまふといふは、是

にかぎりて、常にことたがひたるようなり」といひ、

大島正健も『國語假名遣新法』二二頁に「相撲・向は體言

となるときは、スマヒ・ムカヒと書き、其音便をスマウ・

ムカウとなすべきを、常にスマフ・ムカフと書くは例外

と見るべし」といへり。

契沖は『和字正濫鈔』卷三の四一丁に「相撲 すまひ……

世にすまふとるといふは誤なり。 すまふといふ時は、

うたふまふといふごとく用なり」といひ、

大槻文彦は『言海』に「すまふ 相撲・角力 すま

ひの訛」と注せり。

## 二 スマウ

谷川士清の『倭訓栞』すまひの條に「搦力をスマヒとい

ふも右の義也。編者いふ、動詞のすまふといふ語をさせり。今はスマウといふなり。

よて願撲の音を呼ぶといふは非也」といひ、

物集高見も『日本大辭林』にスマウと記し、落合直文(こ

とばの泉)はすまひの音便スマウなりといへり。

## 三 スマフ・スマウ

行阿の『假名文字遣』二五丁に「すまひ。 すまふ共、す

まら共。相撲」

## ずわえ(楚)

### 一 ズハエ

一 契沖 『和字正濫鈔』四の一丁に、「楚 すはえ『和名』。

ずわえ(楚)

スハは俗に細く長さにいふ詞。エは枝なり」

『和字正濫要略』六二丁に「楚 すはえ 『和名抄』に魚條

の下に、「魚條讀須波夜利『本朝式』云楚割」此和訓の意、須

波和利なるを、スハワリとはいひにくさ故に、和と夜と同韻

にて通ずれば、いひよきにつきてスハヤリといふ。魚をス

ハエのごとくさく故に、魚條の訓をさはいへるなり」とい

へり。

新井白石の『東雅』活版本第三の三五三頁 臚ホシイヲの條に「倭

名鈔』には『禮記』の註に據りて汎く乾魚とは云け

り。又『遊仙窟』を引て、魚條讀てスハヤリと云ひ、

『本朝式』は楚割といふと註せり。古語に細さを云ひ

てサといひ、またサといふ詞を開き呼びては、スハとい

ふ。木の細枝をスハエといふが如き是也。古語には、細枝をばサエダと

云ひ。さればスハといふは細也。ヤリとはワリといふ

語の轉ぜしなり。ワリとは割也。魚肉を細く割きて條



の如くなしぬるを、スハヤリとは云ひし也。楚の字を讀む事、スハの如くなるは、字の音をもて呼ぶなり。

後の俗に、スハエシリガヒといふものに、楚鞞の字を用ひし如きは、楚の字よむて、スハエとせしなり。楚の字の音を轉じて、スハとは呼ぶべし。スハエといふ如きは、いかにやあるべき。又は捶楚の楚をもスハエと讀むなりなどいふなり。これは細枝の義によれりと見えたり」といへるもほど同意の説なるが如し。

二 谷川士清

『倭訓栞』ずはえの條に「氣條をいふ。唐詩に見ゆ。直生の義成べし」といひ、

すはやりの條に『本朝式』に楚割と書り。スハエワリの義也。エワ反ヤ也。『倭名抄』には魚條をよめり。細枝をいへば、楚と同じ。今ソワリとよむは文字によりて誤れるなり」といへり。

伊勢貞丈の『安齋隨筆』故實叢書本、卷二〇の六九四頁にも「楚割

スハヤリとよむ。木の楚スハエの如く、魚肉を細長く割きて乾したるなり。スハエワリを略して、スハヤリと云ふなり。ソワリとよむは、讀様を知らぬなり」といへり。『庭訓往來諸抄大成扶翼』故實叢書本安齋雜考下の二〇五頁にも同意の説を注せり。

また狩谷望之は『箋注和名類聚抄』卷四の五九丁魚條須波夜利の注に「按條小枝也。魚條者割魚肉乾之。其條如條枝。故謂之條。蓋轉注也。……按楚訓須波夜利之轉。非楚字音讀也」といひ、

喜多村信節も『嬉遊笑覽』存探叢書本第一八の八丁に、貞丈の説をあげ「スハヤリは正しくはスハエワリなるを、エワの反ヤとなれば、スハヤリといへるなり」とて、其の證に『東鑑』卷の十、文治六年十月十三日の條なる頼朝の歌「まちえたる人のなさけもすはやりのわりなく見ゆるこゝろざしか

な」を引き、「すはやりのわりなく」とあるは、「すは

えわりのわりなく」といふ意なり」といへり。

三 大石千引

楚スハエ 進生スハエ (言 元 梯)

岡本保孝の『難波江未定稿』七一に、『本居氏は末枝の意也といひて、スワエとかいれ、友人前田夏繁は進生の義也といひて、スハエとかく。『和名抄』に須波夜利と波の假字かけるによる時は、前田氏の説よろしくおぼゆ」といへり。

夏繁が進生の考は、『同書』附録一條によるに『古事記傳』全集第一の五〇五頁 榎の語釋に、「須岐は進木なり。此木かたはらははびこらず、たゞ上へすゝみ上る木なればなり。直木とするはわろし。直ナホをスグと云こと古にあらざ」とあるに據れるが如し。千引の説と暗合といふべし。

敷田年治の『音韻啓蒙』下の四にも、「すはえ楷『字鏡集』『名義類聚抄』『色葉字類抄』『難字記』『和玉篇』『古玉篇』等に此訓あり。進生スハエの義なるべし。スハエと云は俗也」といへり。

四 寺田長興

すはえ 楚を訓り。素生の義也。『正濫鈔』にスハは細長さ詞と有は、ひと向也。

(太津可豆衛)

五 大槻文彦

すはえ すすくと生えたるものゝ意。

(言 海)

此の他、行阿(假名文字遣一四) 橘 成員(倭字古今通例全書) 山岡俊明(類聚名物考) 市岡猛彦(雅言假字格) 石川雅望(雅言集覽) 萩原廣道(心の種) 近藤眞琴(ことばのその)等いづれもスハエの假名遣とせり。

二 スワエ



貝原篤信

楚スハエ スハは末也。末枝也

(日本釋名三の一七丁)

傍訓にスハエとあれど語源説によればワの假名遣説なりといふべし。

本居宣長の『玉勝間』全集第四の二四四頁に「楚スハエは末枝なり。

末スエをスワといふは聲をコワヅクリなどいふと同じ」と

あるは、全く同説にして、物集高見(日本大辭林)この説に従ひ、大島正健(國語假名遣新法)林 甕臣(日本語原の研究二九)等また末枝の義とせり。

落合直文の『ことばの泉』には、ズハエ・ズワエの兩

條にあげ、ズハエの條に、「古來ズハエと書けるが

ほけれど、末枝の義ならむといふ」と注せり。

同氏の新編假名遣には、宜長の末枝の説をよくあたれりといへり。

### 三 ズワエ

菅原種文

『雅語纂解』卷一、しに「楛スワエは木の若枝

延立て長さ也。スワエと云も此事なるべし。……『大嘗會

式』編者いふ、延喜式卷七の一三丁「椎枝古語所謂志比乃和惠」と見ゆるは、楛スワエの楛

なるべし。……今世、神郡俗、若木の細きを阿惠と云、これも和延の轉

き枝の薪をアエといへり。さて種文の説を考ふるに、「楛スワエ」(和延の轉

なり)などいへるを見れば、エの假名遣説の如くなれど、延喜式なる和惠は

エの假名なること勿論なれば、スワエの假名遣説としてあげたり。

### 四 ツワエ

鈴木重胤

『日本書紀傳』二の一五五頁杖の解釋に「都は

『古事記』に「於<sub>二</sub>投棄御杖<sub>一</sub>所成神名衝立船戸神」とあれ

ば、衝ツツなり。惠は常に枝を延陀と訓める外に、『大嘗祭儀』

に「椎枝者古語所謂志比乃和惠」とある。此を又『大嘗

祭式』にも古語として、殊更に同じく其訓を註されたるを

見るに、當昔已く言意分け難かりけらし。然れども和惠は

枝の字に當る古語なれば、杖は都和惠の略なるべし。今も

梅の豆和惠、桃の豆和惠などいふは、短くも長くも杖の如く伐りたるを云ふなり。其を今迄、予も末枝と云ふ事ならむと思ひしは、心の至り淺かりけり

## ずんぎり(寸切)

### 一 ズンギリ

谷川士清

ずんぎり 直截スズギリの轉訛なりといへり。

(倭訓栞)

### 二 ズンギリ

横島昭武

「頭切。頭又作筒○茶器。其象似截

棗頭一故名。蓋後醍醐帝於吉野所製者」「十切」

(合類大節用集卷七の一七丁)

ずんぎり(寸切)

### 二 『俚言集覽』愚案

づん截 ズンドギリとも云。樹木

を中より截て、庭木にするを云。『カナ、ホシ』『茶具にズンギリといふは、頭切の文字なり。棗のかしらをさりたるやうの形なれば、頭切と書か』編者いふ、此説、大田 覃の一話一言(全集四の二二〇頁)にも引けり。愚按、頭字をズンとよめるは圓の義なるべし。

### 三 ズンギリ・ズンギリ

大槻文彦の『言海』ずんぎりの條に「ずんぎり 寸切。

直切の音便轉かと云。眞直マズダツに立ち切ること。つつぎり。(勾

配もなく面オモも取らず)」

づんぎりの條に「づんぎり 頭切。ずんぎりの條を見

よ」といへり。

落合直文も『ことばの泉』づんぎりの條に「づん

ぎり 太きものを短く切ること。つつぎり」ずんぎ

りの條に「ずんぎり 直切。眞直に斷ち切ること。つ



つざり」と注せり。

● 参考

小山田與清の『松屋筆記』國書刊行會本に第三の九〇頁に「ツンドウ切、津筒ドウヂ知ン筒。俗にツンドウともツンドウ切ともいふは、太鼓の筒にたとへていへる詞也。『體源抄』七卷一丁大鼓の條に、「大海之波音ヲ聞テ、黃帝臣岐伯寫ニ其聲。津筒ハ女浪男浪ノ音也。云々」また四丁「樂詞ノ唱歌に、太鼓ノ雌雄ノ圖筒ノ二文字ヲ歌次也。云々」また八丁「口傳云 亂序囀又囀序荒序破ノ終リ、俱ニ舞人以、桴打ニ拂腰ニナリ。其太鼓ヲ津筒ト打合ガ目出也。不知ニ笛吹、大鼓打、舞人ヲマホリテ打ベキナリ。荒序大鼓ハ、津筒ト打ツレバ、ヤガテコメザマニ、不願ニ笛之未ニ吹出、大鼓ヲバ早ク捨也。打様有二說。付ニ四方八方ノ様相違ナリ。有譜。胡飲酒序ニハ、大鼓ノ雌雄之槌ノ津筒ニ、舞人ノ面ヲ振仰也。云々」又十八丁

「樂詞ノ唱歌ニ、太鼓ノ雌雄ノ圖筒ノ二文字ヲ歌次也。云々」又廿丁「胡飲酒ハ、大鼓ノ雌雄、兩槌ノ津筒爾舞人乃面ヲ振リ仰也。云々」又五十五丁「津筒ハ、女波男波ノ音也。云々」又六十五丁「樂ノ詞ノ唱歌ニ、大鼓之雌雄ノ圖筒ノ二文字ヲ歌次也。云々」『同』十本卷廿九丁に「大鼓ハ、津筒ト雌雄ノ槌ヲアテ、フラデハ小マナコヘハ打入ガタキ物ナリ。云々」など見えて、ツンドウは太鼓の音なるを、やがて太鼓の事にもいひ、その體に似たる物をツンドウとはいへるなり。○『續教訓抄』四卷丁左「壹越調曲條に「蘇合三帖知ン止宇乃太鼓ハ、皇帝三帖ノ智ノ筒ノ太鼓ニ相當也。云々」また『同書』第一の三八頁に「寸切 『宗長手記』上卷に「神の代よりもすぎのずんざり」と有り。是は茶の寸切にて今俗に青切といふがごとし。青切は筒茶碗の口に青き筋ある所をいふ也」といへり。

ずんばい(飄石)

ツンバイ

一 『俚言集覽』 つんばい ツンはツムにて圓也。編者いふ、同書つむの條に、「つむ ツムはツブと同じ。圓をツアラと訓も同じ。線駝をツムと云も、圓轉の形なればなり。蝸牛をカタツムリと云も同じ。天窓をツムリと云も、旋風をツムジと云も一言なり、カタツムリ、名マイ／＼ツプロといふも卷々圓の義なり」といへり。バイは貝の名。圓貝を磔打に用ゐる故に、ツムバイといふ。

二 喜多村信節 『瓦礫雜考』七一に「いんぢは石打の譌イシウチ音なるべし。ツブテをツンバイといふがごとし。飄石をツム

をツブテと、異なることとおもふは非なり。ツブテは粒打なり。ツブをバイともいふ故、ツブテをツムバイといふなり。印地とかくは假字なり。されば印地も飄石も同事なれど、押して考ふるに、印地は大勢にて、石抛つことなるべし」

ずんばい(飄石) せがい(櫃)

せがい(櫃)

セガイ

一 『狭衣物語下紐』 國文注釋全書本二八頁に、「硯を舟のせがい 背涯也」とあり。

二 谷川士清 せがい 背槇の義。又『萬葉集』に「粟島をそがいに見つゝともしき小舟」とよめり。ソガイに背と書り。セソ通音也。編者いふ、萬葉集卷三に見えたり。但し此の歌と並べあげたる歌には背向とあり。又卷十四には曾我比爾宿之欠ともありて、此の假名なり。かつ櫃とは本より別の語なり。金澤兼光が和漢船用集(卷一〇の二丁)に「セカイ。カノ字濁音。船の兩脇の惣名也」として萬葉集なる背を例にあげ「背の字用べし」といへるも士清の説によれるなるべし。『盛衰記』にも見えたり。ふなだなともいふめり。舟の左右のそばに、えんのやうに板をうちつけたる也といへり。

岡 吉胤の『假字遣提要』に「背槇」落合直文の(倭訓 棗)



『ことばの泉』に「背櫃」と注し、大槻文彦の『言海』にも「脊櫃の義と云」とあり。

此の他、山岡俊明の『類聚名物考』第五冊の石川雅望の三四二頁『雅言集覽』清水濱臣の『語林類葉』狩谷望之の『箋注倭名類聚抄』卷三の六三丁近藤真琴(ことばのその)物集高見(日本大辭林)また『俚言集覽』等もイの假名遣とせり。

なほ清水濱臣の『語林類葉』せがいの條に諸書を引きたれば参考のため左に抄録すべし。

せがい 狭衣四十「視を舟のせかいにとり出て」  
○『同』三上三十三「沖のかたのせかいに人のみえ侍りしかば」  
○『船用集』云「物茂卿曰、水主の居處をセカイと云。セカイヤグラと云は、二階のこと也。舟の左右の脇落間の處、セカイと云。ヤグラの出し椽の下、則セカイ也。軍船はセカイの上に載アセリを明ると

云。是は上の櫓の出し椽に、弓の上管つかへて不射故、管の入るほどづゝ穴を明る也。されば左右の板椽をセカイと云。ロカイを押所也」  
○『花鳥餘情』玉か「早船は櫓を多くたつるを云。船の兩方のせかいに、入ても十てもむかての手の如くたて、おせばとくはしる也」  
○『盛衰記』「新中納言知盛舟のせかいより馬を放ちたまふ。鞆の六郎はせかいに立て舟の下知をなす」と見ゆ四十  
○『同』八「船には馬立べき所なかりければ、舟のせかいより馬の頭を磯へ引向て」  
○『藻鹽草』「セカイなどなき舟と注せるは、上棚のこと、心得たるあやまり也。舟の臺間アヒ左右の惣名としるべし」  
……○『船法規矩』云「舟の肩に背の巾を増減して、櫓の長を定むる法あり。近頃ロカイと稱す。櫓をあつかふ所故也。今セカイといへば不知ものあり。古はセカイといへり。今北國西國にてはセカイと

云」  
○『船用集』云「カカの字濁べし。船の兩方の惣名也」  
○『宇都保』菊宴なにはにみそぎにおはしたる段「みわたしに源宰相など、御かたゝのせかいにゐて、かたゝに物さこえなどし給ふを、源宰相うらやみて」

### ぜんまい(薇・螺旋)

#### 一 ゼンマイ

一 喜多村信節 ぜんまいからくりと云は糸また鐵の細きを巻てある、其形 薇の芽に似たれば云にや。此ゼンマイと云名いと後の俗稱ながら何の義にか解し難し。古くは『和名抄』にも薇蕨ともにワラビと訓す。後世薇にゼンマイの名あるは蕨と分たんが爲也。いんぢ館の中心ナカゴの先巻返して目釘穴としたる處を俗にゼンマイと云などは薇より名

づけたるべけれど、彼からくりのゼンマイは薇よりさきの名にやあらん。

押て思ふにゼンマイは細きもの、巻たるなれば、織卷にや。織羅葡など思ふべし。又かのからくりは緩やかに巻たる物、少しづつ巻しむれば漸卷歟。いづれとも定め難くなん。其名トケイ出來てよりの後なるべし。トケイは『采覽異言』に慶長十五年秋新伊西把爾亞の舟漂着す。資糧を給ひ舟を繕ひて歸らしむ。十七年其禮として來聘す。獻上の物の内に自鳴鐘一口あり。此製是より有といへり。

(嬉遊笑覽 存探叢書本一二の九九頁)

#### 二 大槻文彦

ぜんまい 『新撰字鏡』に薇を万可古と訓せり。其芽錢の大きに巻けば錢卷の音便ならむ。或云錢の形に廻轉すれば錢舞の音便かと。  
(一)草の名。ゼンマイワラビといふべきの略。……(二)薇の芽の如く渦の形に巻ける銅線の稱。



(言 海)

貝原好古の『和爾雅』<sup>七</sup>に「紫蕨」平野必大の『本朝食鑑』<sup>三〇丁</sup>に「狗脊。俗稱<sup>ニ</sup>世牟麻伊」狩谷望之の『箋注倭名類聚抄』<sup>九の五</sup>に「薇蕨の注に、『今俗呼<sup>ニ</sup>世无末以<sup>ニ</sup>者是也』と見え、落合直文(ことばの泉)も薇螺旋ともにゼンマイの假名遣とせり。

### 二 ゼンマヒ

谷川士清 <sup>ぜんまひ</sup> 薇をいふ。錢舞の義。嫩芽の錢の形して廻轉せるをいふなるべし。古書にゼンマヒの名なし。『倭名抄』にも「爾雅」を引て薇蕨をあはせてワラビと訓ぜり。○細工にゼンマヒといふも薇より出たる名也。ワラビデの名あるが如し。

(倭 訓 栞)

貝原篤信の『大和本草』<sup>卷五の</sup>に「紫蕨」と見え、物

和語のならひ此類おほし。

(源註拾遺國文注釋全書本一三頁。和字正流鈔(四の五四)にも)

賀茂真淵の『源氏物語新釋』<sup>全集第五の</sup> 本居宣長の『玉の小櫛』<sup>全集第五の</sup> 石川雅望の『雅言集覽』萩原廣道の『源氏物語々釋』<sup>九丁</sup> 大槻文彦の『言海』等いづれも契沖の説によれり。

### 三 伊勢貞丈

凡そ古き物語の草紙かな本に、さびしき事をサウ<sup>ハ</sup>シといへる詞あり。抄物等にも文字をうめず。サウ<sup>ハ</sup>シは蕭條の字音を轉じたるなり又は蕭々<sup>ハ</sup>の字音なるべし。蕭條亦蕭々蓋しさびしきなり。

(安齋隨筆故實叢書本一五の五〇五頁)

### 四 『俚言集覽』愚案

「古へ蕭宵の韻の字は、吳音セウヤウ次音サウタウ也。吳原音シユウチュウ也。然ればサウ<sup>ハ</sup>は蕭條の字にあらず」とて、貞丈の説を駁し、更に案

そうぞうし(騷)

集高見も『日本大辭林』に狗春螺旋の假名をゼンマヒとせり。

### そうぞうし(寂寥)

#### サウザウシ

一 『塵袋』 『本書』卷一〇の三一丁に「サウサウシと云ふは冷然の心歟。本躰はサハ<sup>ハ</sup>シと云ふべきにや。冷然をつねにサウサウシと云ふは、これをあしくとりなす歟。サハ<sup>ハ</sup>シと云ふは、儉約なる心なり。物をつゞまやかにして、省略をささとする義なれば、冷然もそれにつきてはありぬべければ、かよふ心もある歟。『文選』に「不如<sup>カシ</sup>顔駟<sup>原憲之</sup> 約<sup>ニ</sup> 其身<sup>ニ</sup>」と云へり。

二 契沖 サウ<sup>ハ</sup>シといふべきをサウ<sup>ハ</sup>シといふ。

を附して、

「因て思ふに、寂々の吳原音ジャク、次音ザク。此次音サクの轉聲にて、サウ<sup>ハ</sup>なるべし。入聲の韻のクをウに轉じ呼ぶ事は往々あるなり」といへり。

はやく山岡俊明の『類聚名物考』<sup>第四冊の</sup> にも「寂々の音語歟。さびしき事を云ふ」といへり。

### 五 仲舒

サウ<sup>ハ</sup>シを字音とせん事は如何也。真淵が説に「サミシクと云をサミ<sup>ハ</sup>シクとかさね、そのサミサミをサウ<sup>ハ</sup>と延て平語にいふ也」<sup>上</sup> 此説ことわりよろしきに似たれども、サミとサウと韻字の違へるに嫌ひあれば、サウ<sup>ハ</sup>シキの平語といふべきにや。

(俚言集覽)

### そうぞうし(騷)



サウザウシ

一 伊勢貞丈 今の俗語にさわがしき事をサウ／＼シと云ふは躁々又騒々なり。二字共にサワガシとよむ。  
(安齋隨筆故實叢書本、一五の五〇五頁)

物集高見の『日本大辭林』にも騒々の音假名とせり。

二 仲舒 俚言のサウ／＼シキも字音にあらず。サワサワガシキの平語に成たるにて、ワ行のウとすべきにや。  
(俚言集覽)

大槻文彦も『言海』に「さうさうし 騒騒。サワサワの音便轉ならむ。字音にはあらじ」といへり。

三 落合直文 さうさうし 寂寥。(一)ものさびし。俗にさうさうしい。(二)誤りてさわがし。うるさし。又さうさうし。

(ことばの泉)

そうどく(騒)

サウドク

一 四辻善成 『河海抄』國文注釋全書本、五一頁に「さうとけば 早速。いそがはしく物さわがしき躰也」

二 賀茂眞淵 『源氏物語新釋』全集第五の四、四四八頁に「さうどけば さわ／＼めくをのべたる語か。又騒動の字音にも侍るべし。ヶは氣にてその様を云」

三 鈴木 臈 『雅語譯解』に「さうどく いそぐさま也。サウは騒也。ドクはドカの活らさたるなり。ドカはラカの類也。大らかを大どかともいひ、夫を活らかして、大どくともいふにてしるべし」  
萩原廣道『源氏物語々釋』一の二、五丁に此の説を引用せ

り。

四 石川雅望

『源注餘滴』國書刊行會本、八一頁に「さわげばをのべて、いひたるなり」といへり。

そえに(故)

ソヘニ

一 一條兼良

『花鳥餘情』國文注釋全書本、一七頁「とあればかかり

あふささるさにて」の解釋に「古今の「あふささるさの」歌。編者いふ、古今集俳諧の部に、「そへにとてとすればかゝりかくすればあないひしらずあふささるさ」とあり。そへにと

は本の荷にことつけてそへたる荷をいふ。世俗に「おもにこつげ」と云事なり。人のあつらへ物などあづかりて、あなたこなたへとするは、をのが身のわづらひになる心也』といへり。  
古今集童蒙抄(經濟雜誌社本羣書類從第一〇輯の五八七頁)にも同意に解せり。

そえに(故)

此の説を契沖は駁して、「或説に添荷といふ。重荷に小付といふこゝろなりといへり。されどそれを添荷といへる事もなく、またあひしらへる詞もなければ用べからず。おぼつかなし」と『古今和歌集餘材抄』  
國文注釋全書本、四六九頁にいへり。

賀茂眞淵は、『續萬葉論』全集第一の五、五五九頁に、禪閣の説を贊して、「一禪御説に添荷なりと有は、吾聞所も同じ。下にかげ合の語もはべらねども、下の語に、皆そのごとくなり。いかにとなれば、馬につり合のよき荷なるに、又かた方に添荷すれば、とかくかたぶきて、左にそふればあまり、右に付れば左かるさをたとへたる、よく叶へり。かゝることは諺にて侍れば、縁語なくとも、古き歌にも有事にも侍るなり。其上、今案に、上の歌に楞アツゴをよみ、おも荷とあるより、そへ荷の事なれば、篇集せるなり。契沖よく篇集をいふに、こゝにいたりて思ひよ

四〇七



らざるはいかにぞや。『萬葉』五、「伊等能伎提痛伎瘡爾波鹹鹽遠灌知布何其等益々母重馬荷爾表荷打等伊布許等能其等」是は重荷の上に又荷を置の諺なり。今のは脇に添るよりかたぐをいへり」といへり。『源氏物語新釋』全集第五の四四八九頁に説く所また同じ。

山岡俊明(類聚名物考第四冊の四三五頁)も『萬葉集』卷五の歌によりて「添荷といはん事もことわりなきにはあらざるべし」といへり。

二 賀茂眞淵 眞淵の説は前にあげたるが如し。然るに、『古今和歌集打聽』全集第一の一八〇頁を見れば、「其方にとて左すればあしく、右すれば又其方にもあしく、行ちがひのみして思ふさまならぬを云ふなり」とあり。一説なるべし。

伴 蒿蹊の『閑田耕筆』百家説林續編下の一の六頁に曰く「おなかにて……又そへにといふ言を用う。たとへば、ささのことはいよゝゝ違はずやといふ時、ソヘニと答ふ。「い

ふにや及ぶ」とのこゝろなり。『古今集』に、「そへにとてとすればかゝりかくすれば」といふ歌の詞、其もとか。『古今』は「其方に」といふ意と聞ゆ。『古今著聞集』に、文覺と壇光兩法師強力なるが、不意に行あひてすまひとりける所に、「おのれは聞ゆる文覺かなといへば、そへにといらへて、おのれは聞ゆる壇光かなといふ。又そへにと答ふ」といふ詞あり。是は、イカモといふ詞と聞ゆるを、近江の俗言にあはせて、互に聞及たることなれば、「いふにや及ぶ」と解すれば、勢ひ有てさも有べくも覺ゆ。もとのことばの轉じたる成べし」といへり。

中村秋香また『古今集詳解』五六二頁に「そへには其方にて即ちそれといふこと」といへり。

三 谷川士清 そへに『古今集』初の五文字に「そへにとて」とみゆ。『壬子集』にも用られたり。編者いふ、巻下に「そへに」と

### そばえる(戲)

#### 一 ソバユ

清水光房 エの假字也。そばれと云ふ詞にてしらす。ワスラレ、ワスラエ・イトハレ、イトハエの例也。『萬代集』冬「嵐ふく時雨の雨のそばえには」『山家集』上「初花のひらけはじむる梢よりそばえて風のわたるなる哉」下二段の活也。

(言 靈九の二九丁)

#### 二 大槻文彦

そばゆ 側を活用せる語か。(言 海)  
佐藤誠實の『語學指南』三の九丁にも、ヤ行下二段活用の語とせり。  
此の他、橘 成員の『倭字古今通例全書』加茂季鷹

て、たのめしくればとにかくに幾夜過行月日なるらん」とあり。今それよといふ詞なるべし。へ

とれと通へり。『後撰集』に、「けふそへに」などいふは副の字也。編者いふ、戀部四に「けふそへにくれざらめやはと思へどもたへぬは人の心なりけり」とあり。契沖も此ソヘは、萬葉に副の字をサへとよみたれば、「けふさへに」といふ心にて、古今集なるとは同じからずと餘材抄にいへり。小山田與清の松屋筆記(卷九三の二丁)にも、後撰集なるを、辨内侍日記下巻に「年つもる雪とききは今日そへに心とけてもいかい見ゆべき」とある。そへにとは、さへにの意にて、別義なりといへり。『著聞集』に、「そへにとこたふ」といへるも、今それよといふが如し。

(倭 訓 栞)

#### 四 井上文雄

『後撰集』なる「けふそへに」の語を解して、「けふさへに也。サのソに轉じたる也。こをとかく論じいふは中々にひがごと也。『古今』のそへにとても同語なり。此事おのれくはしき説あれど、ことながければ別にさふべし」

(増補雅言集覽)



の『正誤かなつかひ』またソバエの假名とせり。

### 二 ソバフ

#### 一 契沖

『萬葉集』卷一三なる伊蘇婆比座與イソバヒサユの解釋に、『イは發語の詞にて、そばへをるとよめる歟。婆の字、多分濁て讀べき所にかけり。又争イソひをるよとよめる歟。鶺鴒イカルカシメ・鶺鴒イカルカシメふたつの鳥、其形能似て打つれありければ、鶺鴒イカルカシメにて父鳥母鳥を取も知らず、其子ども、何心なく打むれて遊びをるを、はかなき事と憐れびてよめるなるべし』

(萬葉集代匠記活版本、七輯の一九頁)

石塚龍麻呂も『假字遣與山路』に『いそばひそばへと注し、

石川雅望も『雅言集覽』そばへの條に、『枕草子』なる『そばへたる小舎人童』の例と共に『萬葉集』なる『伊蘇婆比座與』の例をあげ、

鹿持雅澄も『萬葉集古義』卷一三の『伊蘇婆比座與』の解に、伊はそへ言コトバにて、そばへ居るよといふ心なりと云ふ説に従ひ、『枕草子』なると同じかるべし。といへり。

また、物集高見(日本大辭林)も『萬葉集』『山家集』などの例をあげて波行下二段活用の語とし、『地方トコロによりては、ソバヘルと下一段にいふ』と注せり。

#### 二 『俚言集覽』愚案

そばへる 愚案、『萬葉集』の『五月蠅成さわぐ舎人』も『五月蠅奈周さわぐ兒等』も、俱に『枕草紙』の『そばえたる小舎人童』と同じかるべし。然らばソバヘルのハへの文字は蠅の假字と同じく、波閉ハヒなり。

此の他、山岡俊明(類聚名物考第四册) 伊勢貞丈(安齋隨筆故實叢書本、卷一〇の三三〇頁) 清水濱臣(語林類葉) 近藤眞琴(ことばのその)等またハ行の假名遣とせり。

は發語、ソバヒはソバヘル也』といへり。

### 三 ソバユ・ソバフ

落合直文の『詞の泉』にソバフ・ソバユの兩條にあげて、いづれも下二段活用の語とせり。

### そわ(唄)

#### ソハ

一 貝原篤信 『日本釋名』一の二に『唄ウタそばなり。山のかたはらそばだてる處なり』

楫取魚彦も『古言梯』に『そばソバ側也。唄』と注せり。

#### 二 契沖

『萬葉代匠記』活版本七輯の四三頁「伊香保呂能蘇比乃波里ソハ波良」の解に、『蘇比は川そひ柳などよめるソヒなり。傍の字の意なり。唄ウタと云も同じ詞歟』といへり。但し、『和字正濫鈔』には、『唄ウタそば。眞字假名未考。』和名』に出さず。もし俗語歟』と注せり。

#### ● 参考

谷川士清の『倭訓栞』前編に、『そばえる』『枕草紙』に『そばえたる小舎人童などに引取られ』とみゆ。『春曙抄』に『ざればこりたる意也』といへり。『源氏』にも、『そばつぎざればみ』とみゆ。「小兒などの人そばえする」『猫などのそばえかゝる』といふ是なり。俗に佐字誘字などをよめるは心得がたし。お傍ソバを得がほなる義にや』とあり。さては、ア行下二段活用の語なり。

但し『同書』後編、いそはひの條を見れば、『いそはひ』『萬葉集』に見ゆ。いかるがとしめと群り戯るをいへば、い



鹿持雅澄も『萬葉集古義』活版本卷一 四の二三丁に『代匠記』の説を引用し、

賀茂真淵も『萬葉考』全集第三の二四〇六頁に蘇比を岨の意とし、

「此山の様を國人に問に、三方は山、一方は片岨にて斜なる野なりといへり」と注せり。

三 谷川士清

『倭訓栞』に「そは 嶮岨をいふ。背端

の義成べし。『郢曲』蓬萊山に「いはほがそは」と見え、

『源氏』に「いはのかたそは」など見えたり。或は岨を

よめり。……○「指貫のそは」といひ、工匠の材木の稜角

を削去を「そはをとる」といふも義通へり。『世俗淺深秘

抄』に「指貫の傍」と書り

また『同書』そばの條に、「そば 傍側をいふ。嶮岨と

意通へり。○蕎麥を訓するも、實の三稜なるより名とせる

にや」といへり。

大槻文彦は、『言海』に「そは 岨。背端の義か

云」と注し、次なるそばの條に、「そば 稜。前條の語の轉」といへり。

そんじよう

一 ソンデフ

谷川士清

そんでふその『平家物語』に見ゆ。ソレ

トイフソノの義なるべし。何てふといふが如し。ソんチャ

ウと書はあし。

(倭 訓 栞)

二 ソンジヨウ

岡本保孝

ソレゾと云をソンジヨウと云なり。レを

省さむの音便を加へ、下のソを拗音にシヨと云ひ、又下に音

便のウを添へたるなり。これをつかねていへば、ソンジョウとなるなり。ナニガシと云ふ意なり。ソンジョウソレと云は、ナニガシクレガシと重ねいふにおなじ心ばへなり。

○『平家』卷十頸渡の條に「其外はそんぢやう其御頸其御頸と申ければ」チャはシヨとかくべし。上に音便あれば、濁りてジヨと云ふこと勿論なり。

○ソレと云をソとのみ云は、ソヲダニオモへなど云詞のソ也。下にそへたるウはヤと云ふ詞をヤウヤウとウの音便を添へたると同例なり。拗音を用ひしは、消をケともキエとも云ふにおなじ格なり。ソンジョウソレは『源氏』夕顔のナニガシクレガシとあると同格なり。

(言靈 九の三三丁)

● 参考

『俚言集覽』愚案の説に、「そんじようその 真字假字未

たいだいし

考。『義殘後覺』玄妙院人衆途中より逃崩條、「やがて若大衆談合してソんジャウ其百姓幾人、ソんジャウ誰の百姓、何十人など組合せて」又『敦盛草紙』『大友興廢記』『地藏舞狂言』カサノシタともいふ。

愚案、ソンジョソレとも云。ソンジョソコとも云。某所其所歟。『節用集』某丈某とあり。丈なればチャウの假字、所なればシヨウの假字なり。『醒睡笑』ソンデウソレとあり。皆證としがたし。『小町踊』上「梅みねど香にしるやソんジャウ園の梅」素嘲」といへり。

たいだいし

一 タイダイシ

藤原伊行・源 光行

『河海抄』國文注釋全 書本一九頁に「退々



水原、  
奥入、』と注せり。

藤原公條の『細流抄』國文注釋全書 本二八四頁 賀茂真淵の『源氏物語新釋』全集第五の 四四五頁 等いづれも、退々の義とせり。

契沖(源註拾遺本一六三頁)は「退々の字心得がたし」といひ、村田春海(假字拾要)も「退々と云語有べき事ともおぼえず」といへり。

二 四辻善成 退々水原、奥入、此字不審也。たえくしき意歟。あいうえおの五字通ずる也。

(河海抄 國文注釋全書本、一九頁)

牡丹花宵柏が『弄花抄』卷一の 一三丁の説また同じ。宗頌の『藻鹽草』卷二〇の 九丁にも「たいくしき たえくしき」と云心也」とあり。

三 契沖 たいくしきわざかな 此物語の中に、此詞おほし。いづこに有をみるにも、大事といふにかよひて聞ゆれば、大々しきにて濁りてよむべきにや。

(源註拾遺 國文注釋全書本、一六三頁)

五井純禎の『源語梯』中の 六丁にも、「大の字にて、大事と云ことをゆるやかにいへるなるべし」といへり。

四 橘 千蔭 『狭衣』に「たゆく」といへるも、編者いふ、七丁にこのたいくと同語にて音語にはあらじ。

(源氏物語新釋 全集本、四五八〇頁)

村田春海この説を賛し、『假字拾要』に、「此語たゆくしきを云意となしては、いづこも能叶へり」といひ、清水濱臣の『語林類葉』また「タユくし」の轉とせり。

五 本居宣長 たいくしき こはもと、たみくしといひけむを、音便にて、ミをイといひなせる詞なり。たみたみしとは、「舌たみて」・「詞たみて」などいふタミにて、直からず横さまにゆがめるやうの意なり。『萬葉』に「回轉タミタミなど書て、まがれる道を、たみたる道などよめり。

(玉の小櫛 全集第五の 二二五七頁)

六 石川雅望 たいくしきなり。怠りたゆむこゝろなり。

(雅語譯解)

七 中島廣足 たいくしき 此語をおほくとりならへみるに、いづれもことのおこたりなほざりなる意にて、さてあるまじき事にもうつりいへるやうなれば、怠々しの字音なるべし。

(増補雅言集覽)

井上文雄の『冠注大和物語』下の 九に「宣長のたみくしきにて物のゆがみたるやうの意也といへるは、いみじくわろし。此語をおほくとりならべみるに、いづれもことのおこたりなほざりなる意にて、さてあるまじき事にもうつりいへるやうなれば、怠々しの字音なるべし」とあり。『増補雅言集覽』には、「宣長の：

「いみじくわろし」までを「文雄云」として記し、「此語を……」より以下を「廣足云」として記したり。兩者を對照するに一言半句の相違なく眞字假名また一致せり。

此の語を怠惰の意とせるは、早く中院通勝の『岷江入楚』國文注釋全書 本上の 五六頁に、「或抄聞書」「退なり又云惰の心也」私云退・怠の心何も可然歟」と見ゆ。

また田中大秀の『竹取物語解』卷の 四の 三四丁に多くの例をあげて、物を粗略にする意なりと解せるも同意なるべし。

萩原廣道(源氏物語評釋 夕顔の 卷 三五丁) 近藤真琴(ことはの 卷 一) 物集高見(日本大辭林) 落合直文(ことばの 泉) 等また怠々の説にしたがへり。

此の他、大槻文彦は、『言海』に「たいくし 怠々の音かなど云。訛訛タミタミしの轉にて、横さまにゆがめる意



といふは「かが」と注せり。

## 二 タヒダヒシ

谷川士清の『倭訓栞』に、「たひくし」『竹取物語』  
『大和語』に見えたり」といへり。

### ● 参考

山岡俊明の『類聚名物考』第四冊の四五二頁に、「たいくし」  
この詞、その意はあざやかにして、そのことわりさだかなら  
ず。文字のあつべきなし。退々タタタ大々ダイダイみな音語なり。ことに  
あたりりともちもはれず。ことに斷々タタタ敷は、五音通ふなど  
いへども、それまたあたりりとも定めがたし。これは『源  
氏物語』の比の方言なるべければ、今さらその解釋はなし  
がたし。清て唱ふべし濁るべからず」

## たいまつ(松明)

### 一 タイマツ

一 『塵袋』 『本書』八の三に「松明をタイマツとよむ。  
その心如何」『まざしくは、續松とかきたり。訓にはツギ  
マツとよむべきを、ツイマツと云へり。ツイマツの文いひ  
ゆがめてタイマツになりたり。假名のキの字をばいと云ふ  
つねの事也。ワキタテをワイタテと云ふが如し。タとツと  
は通音なれば、ツキマツをタイマツと云等也」

### 二 貝原篤信

タイマツ 松明 タキマツ也。いとキと通ず。又ツ  
イマツ共云。ツギマツなり。ツイはツクなり。故に續松と  
もかく。又手火タビなり。手にもちてとす火なり。『日本紀』  
神代卷に、乗炬タビをタビとよめり。手火なり。今も邊鄙の人  
はタビと云。

(日本釋名 三の三九丁)

山岡俊明(類聚名物考 第五冊の六二八頁) 狩谷望之(箋注

和名類聚抄 卷四の一) 高橋殘夢(國字定源 上の一) 寺田

長興(太津可豆衛) 田沼善一(筆廼靈 前篇の二) 大槻文彦

(言海) 落合直文(詞の泉) 等みなタキマツ(燒松)の

音便假名にして、イの假名遣なりとせり。

此の他、行阿の『假名文字遣』橋成員の『倭字古今  
通例全書』市岡猛彦の『雅言假字格』加茂季鷹の『正  
誤かなつかひ』石川雅望の『雅言集覽』春登の『假字  
音便撮要』萩原廣道の『心の種』近藤眞琴の「ことは  
のその」物集高見の『日本大辭林』いづれもイの假名  
遣なり。

## 二 タヒマツ

寺島良安

炬音 和名抄云、「炬。太天  
阿加之」今云太比末豆 案『日本紀』神

代取ニテ湯津ツマクシテ瓜ヒキカキテ牽ホトリハテ折其雄柱ニ以爲タビト而見レ之。訓ニ太今

多用レ松故名ニ太比末豆ト

(和漢三才圖會活版本八三九頁)

新井白石(東雅 活版本二の二) 谷川士清(倭訓栞) 大石

千引(言元梯)の説また同じ。

村田春海は『増補古言梯標註』に「手火と燒松は

別語也。手火松と云語はあるべからず」といへり。

### ○

以上諸説の他に、楫取魚彦は『古言梯』に「たいまつ 燒タビ  
松也。續松も同じ。松明」と注し、更に頭書に「日本紀、  
乗炬タビ。万葉集、手火之光云々。これによれば手火松か」  
といへり。



たけなわ(酣)

タケナハ

一 谷川士清

たけなは 関字をよめり。タケは長也。

日のたけてなどいへり。『萬葉集』に「夜はたけにつ、」  
とよめるに關と書り。ナハはナホと通ず。猶の義也。

(倭訓 栞)

寺田長興は『太津可豆衛』に士清の説をあげて、

「理りいと明らけし」といへり。

二 本居宣長

酣字は「酒樂也」とも「樂酒也」とも、

「飲治也」とも注せり。かくて是を多宜那波と云は、宇多

宜那加波の略かりたるにて 初ノ字を略く例は常に多し。又那加を略きて那と云は、級長津彦神を、志那都比古とも云、天武天皇の大御名の淳中を、書紀の訓注に云「農難」とある類なり。さて終の波は濁るべきなれども、上の宜濁音にて、近く濁の重なる故に、おのづから清て云なれしなるべし。宜は必濁るべし。然るを常に此をも清て云は正しからず。…又タケナハを「日のたけたる」「草などのたけたる」と

思ふべし。傳の釋に宇多宜那加波の略りたるなりと云て、多宜那波と宜を濁りたるもひが事なり。然か多言を略くべきにあらず。又さあかしなりかし。○編者いふ、鐘の響(下の九九丁)にも同意の説あり。

(稜威言別 四の五二丁)

楫取魚彦が『古言梯』に「たけなは タケは高也。

ナハは辭」と註し、飯田武郷が『日本書紀通釋』第二の

頁に「多氣は長なり。那波は長けゆくそのさまを云

辭にて、「日のたくる」「月のたけゆく」「夜のたけな

は」などみな殆半に及ぶさまを云なり」と解き、大槻

文彦の『言海』に「タケは長くる意。ナハは形状の語」

といへる、いづれも守部の説と同じきが如し。

四 『俚言集覽』

酒タケナハとは酒の深たるにて長たる

義也。俗に長じたりと云。ナハとは中間の義也。即長中間の義也。

云タケの義と心得るは非ず。日又草などのタケは、高くなる意にて別言なり。さて「日のたけたる」と云は、古は朝日の高くなれるを云るに、今は誤りて、日の西に傾けるを然云に因て、酣をも酒宴の盛過て、やゝしめりたるほどの如く心得るはひがことなり。然るに此に又いと紛らはしきことあり。史記高祖本紀に、「酒闌」とありて、文類注に、「闌言希也。謂飲酒者半罷半在。謂之闌」と云る此闌をも、タケナハと訓るは、酣と同意と心得誤れる訓なるべし。關は然訓べき由なければ、酣語もて云ば酒宴の最中此字によりてタケナハの意を誤ること勿れ。

(古事記傳全集第二の一六〇六頁)

三 橘 守部

酣は、日代宮段に、「盛 樂 故臨 其 酣

時」また、甕栗宮段に「盛 樂 酒 酣」など見ゆ。多氣と

は、「朝日の高くなる」又「藝術に長る」又山の登る極を

「嵩」など云と同くて、凡て物の盛に至盡るを云が本義な

るを、「年のたくる」「秋たくる」「夜のたくる」「草のたく

る」などやうに、盛過てやゝ末に成ゆくをも、云こととなり

つるは轉用にて、「進む」と「荒む」との類也。故此酣字

を、常に多氣那波と訓も、長ナハルにて、遅くなるを於會那波流など云類なり。盛に

至るよしなり。字書にも「酣 飲治也」と註したるをも

たじろく(辟易)

一 タヂロク

一行阿 たぢろき といりさ同事歟。五音通ずる故也。展々轟動。

(原中最秘抄 經濟雜誌社本 羣書類 從第一一輯の 三九二頁)

二 賀茂眞淵 たぢろき たちしりぞく義なるを、轉用

してすゝむにもしりぞくにも身うごかしといふ事にいへ

り。今俗にいふソブリなり。動きさわぐなり。

(源氏物語新釋全集第五の四四九八頁)

山岡俊明も『宇津保物語二阿鈔』國文注釋全書に 本、四八六頁に「たぢろく 立退の略語にて、足もとの定まらでうごくを」と注せり。

三 大石千引

避退 立除。



(言 元 梯)

橋 成員の『倭字古今通例全書』鈴木 脰の『雅語  
譯解』萩原廣道の『心の種』等またチの假名遣とせり。

### 二 タジロク

#### 一 谷川士清

たじろく 『源氏』『うつぼ』に見えたり。  
常もいへり。立退の義成べし。リソ反ロ也。辟易の字をよ  
むべし。

(倭 訓 栞)

寺田長興(太津可豆衛) 物集高見(かなづかひ教科

書)此の説によれり。

#### 二 村田春海

たじろき 『堀川百首』に「朝夕につた  
ふいたゞの橋なればけたさへたえてたじろきにけり」此  
語、ミジロキのシロキと同じ意にて動く事を云。『萬葉』に  
目の動く事を万志呂久と有。  
編者いふ、萬葉集に見あたらず。刊行  
本新撰字鏡(上の一三丁)に「暄

なり。

#### 四 大槻文彦

たじろく タは發語。シロクは退く意。  
身ジロク目ジロクなど同じ。

(言 海)

此の他、佐藤誠實も『語學指南』に「たじろく 退  
轉。退きて其所を去るなり」といひ、本居宣長(御國詞  
活用抄第一) 石川雅望(雅言集覽) 近藤眞琴(ことはの  
その) 物集高見(日本大辭林) 落合直文(ことばの泉)  
小田清雄(國語かなづかひ早學) 笹村良昌(假字の栞)  
等またジの假名遣とせり。

## たわし(器物を洗ふもの)

### 一 タワシ

たわし(器物を洗ふもの)

志呂久、又目太々久」とシロクの詞皆此例にて知べし。タはタ  
あるを誤れるなるべし。  
チの略にて、たちうごくの意也。

(假字拾要)

はやく契沖も、『和字正濫鈔』五の二に「たじろく  
假名もいまだ考がへねど、ミジロクといふ言もあれば、  
タヂロクにはあらしと思ひてこゝに出す」といへり。  
また清水濱臣も「タヂロクの假字とするは誤か。  
『新撰字鏡』に「暄 万志呂久」とあるをおもふべし。  
タは上にそへし助辭にてシロクは動の字なり。ミジロ  
グは身動、マジログは目動也」といへるよし『増補雅  
言集覽』に見えたり。

### 三 『俚言集覽』愚案

たじろく 愚按、タジ／＼といふ  
言もあり。タジロクは手退歟。シロクは引を訓す。シログ  
の條通看すべし。  
編者いふ、しるぐの條に、「しるぐ 遊仙篇、頼引〇  
引字をマシロク、又眼引をマシロクとあれば、シログ  
は引意にて即シジロクなるべし。リソの反ロ、故にシログ  
といふ。マシログは眼の動き轉じて引く事なり」とあり。チの假字極非

#### 一 大石千引

タワシ 搦 藥搦 櫻搦の類。

(言 元 梯)

#### 二 内田儀八

たわし 束藁子。三語をひとつのことば  
のやうに呼べるもの。  
(かなづかひ集成)

### 二 タハシ

高橋五郎の『いろは辭典』に「たはし 把稿。刈茅棕  
櫛等にて作りて物を磨き洗ふに用ふる者」 物集高見の  
『日本大辭林』にも「たはし 把稿。わらなどのみじかく  
きりてつかねたるもの」と注し、落合直文の『ことばの泉』  
またハの假名遣とせり。

### 三 未定

『俚言集覽』に「藁をたばねて結ひ物洗ふ器をタハシと



云。ハの字未詳』といへり。

### たわやすし(容易)

#### タハヤスシ

一 賀茂眞淵 　　たはやすき 　　手觸易にて、本は手をふれやすき物をいふ。……布良の反波なるを、良と禮と通へば、不禮易き意となるなり。只ハを助辭なりといふ説は、ハを略してタヤスキと云を覺えて、不意に思へる物なり。かゝる所にハを助辭に置たる例を見ず。みだりに添べからぬ事なり。

(源氏物語新釋全集第五の四六三六頁)

村田春海の『假字拾要』師の説によれるが如し。

#### 二 谷川士清

たはやすく 『源氏』にみゆ。『日本紀』

に輒をよめり。「毎事即然也」と注せり。ハは助語。タヤスク也。

(倭訓栞)

はやく四辻善成の『河海抄』國文注釋全書本八五頁に「たはやすき たやすきといふ詞に、文字をそへていへるなり。定家卿説也」とあり。

田中大秀も『竹取翁物語解』六一のに「容易と云に多を發語におき、波を助辭とせるなり。故波字なくとも云り」といへり。

### たわら(俵)

#### 一 タワラ

#### 一 貝原篤信

俵タワラ也。ツとタと通ず。ツム

を略す。米をつゝむわら也。

(日本釋名三の四〇丁)

#### 二 寺島良安

俵標音 俗云太和良 菘菜也 豆止二字通太字

(和漢三才圖會活版本五五六頁)

#### 三 谷川士清

俵をよめり。田藁の義にや。今俵子ともいへり。……○藤原秀郷を俵藤太といふは不經の俗説也。本居、大和の田原也といへり。

(倭訓栞)

物集高見(日本大辭林) 落合直文(詞の泉)ともに此

の説によれり。

#### 四 小山田與清

俵の字『延喜式』をはじめ、古書に多く見えてタワラと訓り。タワラは東藁の略語にて藁を束て物を裏納るゆゑの名也。されどタワラは古語ともあもはれねば古くは俵の字をツト・ニへなどゝや訓たりけん。可考。

たわら(俵)

(松屋筆記國書刊行會本第一の二九四頁)

『成形圖説』卷一四にも「俵は和字なり。蓋把稗の畧歟。一説に田程也」といひ、

大島正健の『國語假名遣新法』林 甕臣の『日本語原の研究』五〇頁等また東藁の義にてワの假名なりとせり。

#### 二 タハラ

一 『俚言集覽』 たはら 俵を訓り。此假字未詳。……

『定家假字遣』タハラ。『前太平記』「將門は米かみよりぞ射られける田原藤太がはかりごとにて」今姑く此假字に従ふ。

#### 二 敷田年治

たはら俵 『字鏡集』『色葉字類抄』等に、「俵タハラ」と注し、藤原秀郷を『尊卑分脈』に、「俵藤太」とあるを、『帝王編年記』に「田原藤太」に作れり。



即大和國の地名也。倭を龍神より賜るの俗説は信がたけれど、田原倭相通し書けるを以て、假名を知。しかるに倭を草包に當るの非なることを、『和爾雅』に辨たれど、『四時祭式』及『類聚三代格』等に既見えたり。

(音韻啓蒙下の五〇丁)

三 大槻文彦 たはら 東藁の略か。田原藤太を倭藤太に通ぜり。

(言 海)

中村秋香の『中學音訓かなづかひ』に、『東藁の約にてタハラなりといふ説然るべくや』といへり。

此の他、大石千引は『言元梯』に『倭 巻藁』と注し、行阿の『假名文字遣』丁四二橋 成員の『倭字古今通例全書』石川雅望の『雅言集覽』近藤真琴の『ことはのその』またハの假名遣とせり。

三 未定

契沖の『和字正濫鈔』四丁二に「倭 たわら 眞名は光定の『一心戒文』又『延喜式』にあり假名は未考」といへり。加茂季鷹の『正誤かなづかひ』にも「たわら 『延喜式』假字未詳」と注せり。

ちようちん(提燈)

一 チャウチン

一行馨 灯呂をアントンチャウチンなど云文字如何。挑灯と書てチャウチンとよみ、行灯をアントンとよむ皆唐音歟。

(壺 囊 鈔三の四丁)

灯」と記せり。

二 山岡俊明

『俚言集覽』にもちやうの部に挑灯とあり。ちやうちん 燈灯。『秋夜長物語』「れいの童さきに立て、さよなふのてうちんに螢を入れてもしたり。その光りかすかなるに」てうちん 思ふに古へさかず。俗には燈灯と書く。これは唐などに有る紗燈なり。さよなふはなにの事にや未考。

唐山にては提灯と書く。今の唐韻にてはテウテンなるをテンとチンとはつねにまざるゝ音なるに於て、テウをチャウといひテンをチンといへるなり。又一本を見るにとうろと有るをよしとすべし。ちやうちんは後人のよみ誤りなるべし。

(類聚名物考第五冊の六二五頁)

松岡行義は『後松日記』百家説林續編中の七七一頁に提燈の字を用ゐ、假名にはちやうちんと記し、

物集高見の『日本大辭林』また『ちやうちん 提

二 テウチン

一 橋 成員 てうちん 挑灯。又張燈とも。(倭字古今通例全書)  
二 荻生徂徠 てうちんは吊灯なり。挑灯とかくは僻事なり。つるべも吊瓶也。(南留別志五の二一丁)

三 貝原好古

提燈言挑灯也。懸火同。

(和爾雅 五の二四丁)

四 槇島昭武

提燈一名張燈。太平御覽 挑燈俗用此字一謬乎。

(合類大節用集卷七の二九丁)

五 伊藤長胤

『名物六帖』の四〇丁に「懸火 正字通楚辭宋以來之提燈 ○提燈見上 ○提燈者曰提燈」また『同書』箋五の一丁に「提燈籠的提燈籠的莊客」



此の他、谷川士清の『倭訓栞』に「てうちん」「行厨集」に提燈といへる是也」と注し、寺島良安の『和漢三才圖會』活版本五 三一頁越谷秀真の『物類稱呼』四の 八丁いづれも提燈をテウチンと訓せり。

また伊勢貞丈の『四季草』秋、道 具の部貞丈雜記』故實叢書 本卷三の 〇三頁等には挑灯の字を用ゐる假名にはてうちんと記せり。

### 三 チャウチン・テウチン

大槻文彦 『言海』ちやうちんの條に「ちやうちん提燈。或は挑燈テウチン。字の唐音の轉」と注し、てうちんの條に「てうちん 挑燈。唐音。提燈に同じ」と注せり。

落合直文の『詞の泉』の説また同じ。

### ● 参考

一 齋藤彦麿の『傍廂』百家説林正編に 上の三七八頁に「挑灯は後世のものな

れば、論に及ばずといへども、挑は字書に「往來貌」ともあればさてありなん」編者いふ、「行燈は坐席にあれば字義かなはず。挑灯は他行の爲なれば字義かなはず。互に入れかへてよし」と或人の云へるにつきての説なり。行燈と挑燈とを取り違へたりとの説はやく橋 成員の倭字古今通例全書に見えたり。

岡本保孝の『傍廂料繆』況齋叢書三 八の一六丁に彦麿の説を駁して、「字書とは何をさすにか。提とかくべし」といへり。

二 『岡本先生隨筆』二六に「挑燈の字面ふるくは西土にては用語なりしを、今は本邦にては體語となりて挑燈と云もの世々一般に用ふるなり。いまだ其起りをしらず『下學集』に燈籠行燈挑燈とみえたり。『白氏』卷十九、夏夜宿直「寂寞挑燈坐沈吟踟月行」同卷秋房 夜「挑盡殘燈秋長夜」かの長恨歌の「孤燈挑盡未成眠」とあるは用語なり。亦『武林舊事』卷

二 公主 下降「燭籠二十提燈二十」

三 安井息軒の『睡餘漫筆』八に「チャウチン アンドンも唐音の訛れる也。挑燈は燈の心を前にかさ出すことにて物

の名にあらず。生物知ナマモノシの心得違ひで付し名なり。行燈をチャウチンの事と心得たる人あれども、是も亦誤りなり。總て漢土の燈は置付なり。夫ゆへ座中を持あるく燈を行燈と云ふ。編者いふ、貞丈雜記(故實叢書本、卷三の三一〇頁)に「行燈の事。古は夜道を行く時持つ燈也。さればユクトモンビと書くなり。鎌倉年中行事に鎌倉殿(足利殿の御代也)の正月五日、管領のもとへ參給ふ行 列を記して、續松二丁行燈一つもたすべし。とあり……」といへり。チャウチンは燭籠と書くべし。燈毬は燭籠中に燈を點ぜし也」

四 『日本社會字彙』に「朝野群載卷四應徳二年十月三十日法定院佛聖供<sub>二</sub>灯油料<sub>一</sub>」狀に云、「安<sub>三</sub>置佛像之前<sub>二</sub>無挑灯柱<sub>一</sub>云々」ここに挑灯とあるは、灯爐なるべけれど、かくふるき物に、此字面あるはめづらし。『下學集』『墮囊抄』等には挑灯の字をチャウチンとよめり。『墮囊抄』文安三年撰「灯呂をアンドン・チャウチンなど云文字如何。答、挑灯と書てチャウチンとよみ、行灯をアンドンとよむ皆唐音歟。行の字をアンとよむ事、行在行者等也」かくいへるにて此書をつくれる文安のころは、灯呂をさしてアンドンともチャウチ

ンともいへるをしるべし。『唐話纂要』五 卷「挑灯 ロウドウ」とあれば、チャウチンはもと灯爐をさしていへる唐音のこにうつれる也。今のチャウチンには提灯の字あたれり」

## ちようばみ(調食)

### 一 テウバミ

一 伴 信友 てうばみ 調食。信云、「異本枕草子」心物「すぐろくはてうばみ」又「てうばみうつに上手めきて、手はたてたるてう(調)どもうちしさりてやがてみなかけとられたる」

(増補語林倭訓栞)  
小山田與清の『松屋筆記』國書刊行會本第 一の一六一頁にいはいく、「物の數の調半の字を今は丁半チャウハンとも長半とも書くは借



字也。調半と書べし。調はトトノフ義。半はハシタの義也。定家卿『愚秘抄』に調半の字を書れたりといへり。

二 物集高見

てうばみ 調食。すぐろくのおそび。雙六なれば丁食にて假字もチャウなるべくおもはるれど、今はテウとかきなれたるをもてあらためず。編者いふ、ちやうの條に「ちやう丁。雙六の目の、ふたつにわかつべきかず」とあり。

(日本大辭林)

落合直文(ことばの泉)の説また同じ。鈴木弘恭の『増補枕草子春曙抄』上の二に「てうは賽の目の丁也」と注し、テウの假名とせり。

二 チョウバミ

谷川士清 『倭訓栞』に「ちようばみ 『枕草紙』に「はぐるめよくつきたる。ちようばみにちよう多くうちた

る」と見えたり。重食の義。ト食のハミに同じ。双六の采なり」と見え、

『同書』ちようはんの條に、「ちようはん 奇偶の數をいへり。重半と書けり。俗に云ふ重日半日を西土にて雙日隻日といへり。『百練抄』に「依御遺誠不被憚重日」と見えたり」といへり。

『清少納言枕草紙抄』國文注釋全書 本三四八頁に、「てうばみ 双六のこと也。今東國てうはみとて打也。テウとは重目の事也」といひ、岡西惟中の『枕草紙旁註』國文注釋全書 本五九頁にも重食の字をあててテウバミと書し、バは休め字とせり。

喜多村信節は『嬉遊笑覽』存採叢書本、に 八の三頁に「枕草子に、心ゆくもの内に、「てうばみにてうおほくうちたる」と有。これ又雙六の遊びにて偶數を勝とする也。今のありはのたぐひか」といひ、ありはの條 同丁に

や。其根の連珠せるをもて名を得たるなるべし。

(倭訓栞)

二 チャウロギ

平野必大の『本朝食鑑』卷三の 三五丁に「知也宇呂岐。即草石蠶。一名甘露子。古來未聞有近世華舶移種」

寺島良安の『和漢三才圖會』活版本一 八七四頁にも「草石蠶。甘露子。地蠶。土踊。滴露。地瓜兒。知也宇呂木」とあり。

三 チョウロギ

横島昭武の『合類大節用集』六上の 六丁に「草石蠶」大槻文彦の『言海』に「ちようろぎ 草石蠶 朝露葱の義かともいふいが……ちようろぎ」とみえ、落合直文の『ことばの泉』にも「テウロギの假名遣とし、物集高見の『日本大辭林』には「テウロギ」とあり。

『撮壤集』なる雙六下貽オウレコンヤウウ重噉のハンと傍點あるは誤にて、『枕雙紙』なるてうばみなるを音便にミをはねたるならん」といへり。

以上テウバミと書したれど重の假名はテウナれば士清と同じくテウバミの假名遣説なりといふべし。

以上諸説の他に、北村季吟は、『枕草子春曙抄』二の 一に 五丁に「てふばみ 重食。調食。双六のあそび也」と注せり。

ちようろぎ(草石蠶)

一 テウロギ

谷川士清 てうろぎ 草石蠶をいふ。朝露葱の義に



つじ(土塀)

一 ツイチ

一 契沖 ついちと云はつひぢの略なるを俗に築地と書なして此心也と思へるは誤れり。

(勢語臆断元の二二丁)

二 荷田春満

童子問、『闕疑抄』云「つひぢをつちと讀也。つひぢと少し持心有てよむべし」との御説有。つひぢといふを嫌故也と。しかりや。

答、先に問に、よみてをよんでとよむならひをいふごとく、つひぢをつひぢとよむは、ひをはぬるならひ也。つひぢと少し持心有てよむべしとは、五音第二の音轉をしり給はぬ故也。暫つひぢのかなは、ツイと書べし。『和名抄』

に築垣を豆以比知と有をも一證とすべし。築はツキなりキの音をイにかよはす事常の例なり。

(伊勢物語童子問第一の五〇丁)

三 狩谷望之

『和名抄』築垣の條の箋注に「按、豆以比知築土也。或急呼都以治見枕冊子」といへり。

(箋注倭名類聚抄卷三の三五丁)

澤田名垂の『家屋雜考』百家説林正編 下の二六〇頁にも、「築牆ツイヂ

『和名抄』に「都以加岐また豆以比知」と見えて、もと築墾といふ事なるを、音便にてツイチ・ツイガキ・ツイガイなどよぶなり」とあり。

大槻文彦(言海)落合直文(詞の泉)もツイヒヂのヒの約せられたるものとせり。

此の他、行阿の『假名文字遣』三〇橘 成員の『倭字古今通例全書』山岡俊明の『類聚名物考』第五册の藤井二六三頁高尙の『松の落葉』百家説林續編 上の七九五頁石川雅望の『雅言集覽』

近藤真琴の『ことはのその』及び物集高見(日本大辭林)『俚言集覽』等、いづれもイの假名遣とせり。

二 ツヒヂ

一 谷川士清 つひぢ 『倭名抄』に築牆をよめり。築墾也。今ツヒヂといふは中略也。俗に築地といふは非ず。

(倭訓栞)

二 田中大秀 つひぢは諸本ついちとあり。是は本築土ツキヂなるを、ツヒヂと云はキ字を略するなり。ツイヂとは書べからず。

(竹取翁物語解卷五の二二丁)

つごう(都合)

ツガフ

つごう(都合) つじ(辻)

『俚言集覽』 つがふする 手筈する事をツガフスルと云。都合を書は、總計を都合と云に、混じたる也。番字正義也。

大槻文彦の『言海』に「つがふ 都合。手番の略轉にて字は假借なりと云。手筈を調ふること」といへり。

つじ(辻)

一 ツジ

一 契沖 辻 つじ 旋毛をも俗にツジといへば、辻もツムジにて通ずべし。文字は十字の意にて、和俗の作れるにや。

(和字正濫鈔五の三〇丁)



寺島良安(和漢三才圖會活版本二三四頁) 谷川士清(倭訓栞)

山岡俊明(類聚名物考第一冊の四九頁) 『俚言集覽』の愚按、大槻

文彦(言海)の説いづれも、旋毛(ツムジ)と通じて、ツ

ムジなるを、ムを省略せるものとせり。

狩谷望之は『倭名抄』に「十字 『吳均行路難』云、

縦横十字成阡陌今字十字者東西南北相分之道。其中とある

に注して 『下總本無本文二字、有都无之三字。今俗

呼都之』と云へり。

(箋注倭名類聚抄卷三の五二丁)

二 中山信名

辻の假名は常にはツヂなりと思へる人も

あるは誤也。温古堂に藏せる古本の『宇都保物語』の俊蔭

の巻に「人にもあらぬ心地して、見めぐらしてつじに立玉

へり云々」又「三條京極のつじに立玉へり云々」ともあ

り何れも辻の事也。印本には共にツヂに直したり。

シとチとは至て近き音にて通用せるからに、ツヂなりと

也。これは四辻は十文字の如くあるにより、昔十字と書た

るを、假名にて字の字をかき、それをすぐにシネフのやうに

書たる也。十字唐音にてツンの音也。それゆゑツンジと書

たる字也。唐詩に「十字街頭吹尺八」とあるも此事也。こ

れ有來る説この通り也』と云へり。

伴 菴蹊の『閑田耕筆』四の三にも或人話として、「辻

といふ字、此方にて作れるは誰もしれり。然るに辻と

書は義なし。十字街の事にて、十しといふ假名を一字

になしたるなり。『四辻殿略譜』にも辻と書る。若又

辻とかけるは、之はしに同じとぞ』とあり。山崎美成

の『海録』六の二丁に「此の説ちもしろき考なり』といへり。

荻生徂來の『南留別志』卷一の三丁には「辻は遠の草書

なるべし』と云へり。

四 物集高見

つじ 此假字古書に見えず。されども『字鏡』に詭鏡を阿乎彌豆志牟とよみて、高くなるを豆志牟

思ひ誤る人もあるなるべし。シ・チの通用せる證古今少か

らず。穿邑ウガチの兄ウカシ弟ウカシ日本紀古事記 天地をアメツシ

道をミシ萬葉集東歌 常陸の古事を漬ヒメシの義とし 久慈の古事を

鯨鯢とし 大櫛オホヅの古事を大朽オホクの義とし常陸風土記 辰孫王を智

宗王とし辰爾を智仁に作る類甚多し。姓氏錄續日本紀 今も上野武

藏邊の人には、道をミシと云者まゝあり。又蛇に山カバチ

とよべるものあるを、山カバシとも云へり。今の世も京師

の人は辻の事をツシと云て辻子の二字を用る事也。シ・チの

音古今通用せる證かくの如し。さればツジをツヂと思へる

も、音の至て近かりし故の誤なるべければ、オヲのたがひ、

エへのたがひなどと同様にはあらず。おのづから通用せ

しこともあるにやしらず。

(中山信名隨筆抄録七丁)

三 或傳説

大田 覃の『一話一言』卷一五の三七丁に、「辻と云る字、十文字に毛邊かけたるやうにかく。此字も和字

といへれば、辻も豆志の假字なるべし。編者いふ、同氏の日本大腫。はる。はれあがる。ふくれあがる」とあり。

橘 成員の『倭字古今通例全書』加茂季鷹の『正誤

かなつかひ』石川雅望の『雅言集覽』近藤眞琴の『こ

とばのその』落合直文の『ことばの泉』等ジの假名遣

とせり。

(かなづかひ教科書)

二 ツヂ

一 松永貞徳 辻 つぢ。ツはつどふ也。チは路也。

(和句解二の二四丁)

高橋殘夢も『國字定源』中の二に八丁に「筋・辻のチは皆路

なり』と注せり。

二 大田 覃

和詞にも、あつまる肝要の處をも津と云。辻と云も、よりあつまる地と云事なるも不知それゆへ



十字と書てツチと唱るならん歟。

(一話一言卷一五の三七丁)

三 ツチ・ツジ

貝原篤信

『日本釋名』二丁に「衢<sup>ツチ</sup> かた<sup>ツチ</sup>」に

ゆく道ある所をツチと云。ツとはつどふ也。あつまる也。チはみち也。アツのツと道のチをとりて上下を略す。あつまるみち也。ツジともかく。チとシと通ず」といへり。

(倭訓栞)

つずらおり(九折)

一 ツヰラヲリ

楳取魚彦

つづらをり 葛折也。九折。

(古言梯)

二 谷川士清

つづらをり

馬を御するに、何遍も馬を

引廻す式あり。是を葛折といふ。『名目抄』にもしか書せ

り。編者いふ、羣書類従本(經濟雜誌社本第一六輯の一

〇九六頁)に「葛折 御幸之時、馬打様」とあり。 葛を折が如く

に、折返し<sup>ツヰラヲリ</sup>する意也。近江の高宮と越智川の間に、ツヰ

ラ折村あり。ツヰラ行李を多く作る〇九折坂をツヰラヲリ

の道といふも義同じ。吉野郡の村名に、九尾をツヰラヲリ

よめり。

本居宣長も『玉の小櫛』全集第五の「つづらをり

をれまがりたるさまの、黒葛の蔓のさまに似たるより

いふ名なるべし」と解し、大槻文彦(言海) 落合直文

(詞の泉)また葛折の義とせり。

三 大石千引

九折。 繼連折

(言元梯)

此の他、行阿の『假名文字遣』<sup>三</sup>をばはじめ、契沖(和字

正濫鈔<sup>三</sup>の<sup>一</sup> 市岡猛彦(雅言假字格) 加茂季鷹(正誤

かなつかひ) 春登(假字音便撮要) 清水濱臣(語林類

葉) 石川雅望(雅言集覽) 萩原廣道(心の種) 『俚言

集覽』 近藤真琴(ことはその) 物集高見(日本大辭

林)等みなツヰラヲリの假名遣とせり。

二 ツヰラオリ

一 山岡俊明

九折坂 つづらをり。 盤坂。 九折坂を今

ツヰラオリといふ。馬の騎方など習はせることなり。 ツヰ

ラオリの略語なるべし。

(類聚名物考第二冊の二〇三頁)

二 小山田與清

信友曰、『伊勢物語』に「もゝとせに

一年たらぬつくも髪云々」こはもとつゝもなりけんを寫

誤れるなるべし。若狭の海にツ、モといふ藻あり。今のホ

ダハラと云物の事也。一ふさの貌長さは二三尺ばかりにも

つずらおり(九折)

成て、莖も枝もいとほそく連りて、髪を垂亂したるごとく

海中にある時は色黒くいさゝか黄ばみたるが、かわきたる

は薄く黄になる也。そはいかにも老嫗の髪のためみだれた

るにたとへつべき物なれば、つゝも髪といへるなるべし。

さてツ、とは物のいま少し満足はぬやうの事にいへり。

手業の足りといへるはざるを、手筒と云も、『紫日記』『長明

無名抄』に見ゆ。『宇治拾遺』に「口手つゝ」と有も、轉り

て口語のたりといへるはぬにいへりといへり。又若き人の年齒

を、ツヰハタチばかりといふも、十九カ廿といへること也。

十九にかぎりてツ、と云にはあらず。こは廿を地として、

其二十に満足らぬをいふ詞づかひ也。地名にも大和吉野郡

九尾<sup>ツヰ</sup> 越前敦賀郡筒を、其地より出せる布を、古文書に

九十布<sup>ツヰ</sup>など書たり。『字鏡』に玄孫をツ、コとあるも、

のへだゝりて親みのやゝとほくらぬにいへり。又ツ、ム、

ツ、シム、ツヰマヤカ、ツ、シルなどいへるツ、も、物事を満



て足はせざる義ときこえたり。俗言にツ、一杯といへるも、満足らぬにいふと云々。編者いふ、信友の説は比古婆衣(存採叢書本)六の七四丁に出たり。

與清按に此説よろし。ツ、シルといふも、物を十分にくはぬ貌、ツ、シリウタフも十分にうたはぬ貌、ツ、グレも薄暮にて未暮了らぬほど也。ツ、リ、ツ、ツ、ツ、ツ、ツ、ツ、ツ、ツ、ツは登りおほせぬさま、登らんとして背ざまへおちらるゝより云なるべし。『六帖』二丁ハ寺の歌に「さゝ浪やしがの山道のつららおちくる人たえてかれやしぬらん」此歌に「おち来る人」とよせてよめり。……オリをヲリと書はひがごと也。

(松屋筆記國書刊行會本第一の一三六頁)

此の他、五井純禎が『源語梯』中の一に「つららおちり 九折とも羊腸とも書り。葛のまとへる如く、まがりて下る坂也」といへり。

橘 成員もオの假名と定め、『倭字古今通例全書』に、「つららあり 九折文選には盤折の二字を訓す」といへり。

つわる(熟)

ツハル

谷川士清 つはり 『倭名鈔』に擇食をよめり。惡阻ともいへば、衝張の義なるべし。……○梅の熟してつえるを、つはるともいふ。潰張の義成べし。『徒然草』にも「下よりきざしつはるにたへずして」といふ詞見えたり。『金葉集』に たゞならぬ人のもてかへしてと有けるに、子をうみてけるがもとより、うみたる梅をおこせたりければよめる「葉がくれにつはると見えしほどもなくこはうみ梅になりけるかな」

とう(臺)

タウ

一 榎島昭武 臺タウ 『本草』「米囊三四月抽臺」又云、「羊蹄入夏起臺」

(合類大節用集卷六の一三丁)

二 谷川士清 たう 草のたうのたつなどいふ。臺の音轉也。又塔の九輪などに似たればいふにや。さらばタフと書べし。

(倭訓栞)

大槻文彦(言海)も「たう 臺の音便と云、或云塔の音」といひ、物集高見(日本大辭林、ふさのたうの

とう(臺) どうさ(礬水)

條) 落合直文(ことばの泉)も臺の字を書せり。

『俚言集覽』たうにたつの條に、『倭訓栞』の説をあげ、「愚按、『季瓊日録』布直垂地紫紋桐塔と見えたり」といへるは塔の義とせるにや。

また大石千引は『言元梯』に「臺頭」と注せり。

どうさ(礬水)

一 ダウサ

谷川士清 だうさ 礬水をいふ。にかは地とも見えたり。今礬などともて造り成せり。……○染色にだうさを入るなどいふは明礬なるべし。ダウスともいへり。

(倭訓栞)

物集高見の『日本大辭林』『増補俚言集覽』の増補



とうじ(酒を醸すもの)

等ダウサの假名遣とせり。

## 二 ドウサ

大槻文彦 どうさ 礬水。明礬の蘭語ドウスの轉と云ふ。原字詳ならず。又ドウス

(言 海)

## 三 ダウサ・ドウサ

落合直文の『ことばの泉』だうさの條に「だうさ 礬沙」 どうさの條に「どうさ 礬水」とあげ、いづれも「明礬を膠に溶したるもの」と注せり。

## 四 未定

『俚言集覽』に「どうさ 假名未詳○『犬子集』朧月夜にひかひて「空に一重礬石紙をや春の月」

四三八

とうじ(酒を醸すもの)

## トウジ

一 貝原好古 酒杜氏。魏武帝短歌行曰慨當以慷憂思難忘何以解憂惟有杜康註謂杜康古之造酒者以此今俗亦稱釀酒者爲酒杜氏。編者いふ、杜氏を延べて、トウジと云りとの説なるべし。

(和爾雅 卷三の八丁)

慈延の『隣女晤言』下の四に「酒をつくる人をとうじといふ。杜康酒を作るにたくみなり。よりにて杜氏といふ心なるべしとある人にかたれば、番匠のかしらを、棟梁といふ。柳子厚の梓人傳に云、都料匠といふ人あり。みづから匠具をとらず、たゞ諸匠に指揮して、家を建しむ。棟札をあぐるにちよびて、都料匠造之とかけ

り。とうりやうは、けだし都料をとなへあやまれるなるべし。とこたへき。よき對語なりき」といひ、

佐々木高貞の『閑窓瑣談』四の二 また杜氏の義とし

物集高見の『日本大辭林』にも杜氏と記せり。

## 二 横島昭武

「桐兒。酒家奴隸曰桐兒今按漢有桐馬官作酒事詳勻會」 「杜氏。或用此字蓋據杜康舊名云云」

(合類大節用集 卷四の七丁)

## 三 新井白石

世に酒造りて商ふものゝ家にて、酒造る事をする者をトウジといふものゝ、また刀自なり。むかし造酒司に、大刀自小刀自次刀自とて、三つの酒造る壺ありけり。その大刀自は酒三石計いりしもの也。後に酒造る人もよびて、刀自といひしは、ふるくより云ひつぎし詞なり。かの造酒司の刀自は、三條の院の御時、大風に彼司たふれし時に、三つながら、打割りてけりと、舊さものにしるし置き

とうじ(酒を醸すもの)

けり。是等の事の如きも、世には、異國の事など附會していふ説ありとぞ聞ゆる。

(東 雅活版本一の一四〇頁)

大槻文彦の『言海』に「とうじ 造酒司、酒甕神に、

大邑刀自小邑刀自あり。又其酒壺に、大トジ小トジの名あり。これより起れるかと云。或は、支那周代に、杜氏酒を醸せれば云と云ふはいかゞ。さらば假名遣異なり」といへり。

## 四 或人の説

酒製事を司とるものをとうじと云は、一説に、いにしへ藤次郎と云もの、よく酒をつくる。是とうじといふは爰にはじまるといふ。又一説に頭兒と書て、酒家のかしらおとこといふの儀なりと。

(物類稱呼一の一丁)

四三九



とうち(十市)

一 トホチ

契沖 十市 とほち 『和名』 大和國郡名。十は常はトヲなり。地名には常に違へる事おぼし。故あるべし。

(和字正濫鈔三の三七丁)

本居宣長も『古事記傳』全集第二の二七三頁に、「十市は『和名抄』に、「大和國十市郡止保知」これなり。十は登衰なるを止保とあるは假字違へり。地名なればなるべし。されど其はやゝ後の訛にこそあらめ。十字をしも書來れるは本は登衰とぞ唱へけむ。然れども今は姑く『和名抄』に従て訓つ」といひ、又『同書』一三六に、十市之入日賣命の十市をトヲチと訓し、さていはく、『和名抄』に大和國十市<sup>止保郡</sup>あり。此地に依れるか。

十の假字は登衰なるに止保知とあるは地名なればなるべし。凡て地名の假字には尋常に異なることのまゝあるなり。此は常のまゝに登衰と訓つ」といへり。

二 鹿持雅澄

十市は『和名抄』に「大和國十市郡止保知」また『新古今集』に「暮ば速く往て語らむ會事の十市の里の住憂かりしを」とあり。これは會事の遠といひかけたれば、登保の假字なり。○編者いふ、新古今集とあるは拾遺集の誤なるべし。案に十は登衰の假字なるを、登保とあるは違へる如くなれど、本より通はし云るか。又は本は登衰知なりけむを、後に訛りて登保知と唱へしか。今たしかには定め難し。然れども今は姑く『和名抄』並『新古今集』の歌に従て訓つ。

(萬葉集古義活字本卷一中の一丁)

山田常典も『増補古言梯標註』に、『拾遺集』の歌の遠にいひかけたるを證としてホの假名とせり。

中嶋廣足も『櫃の下枝』<sup>上の九丁</sup>に、「北邊隨筆」云、

二字に定られしとき、本書來れる文字をしひて省しより、文字と訓とかなはぬやうになりたり。されどよくこゝろをやめて見るときは、其ことわり明らか也。假字の違へるにはあらざる也。本は三字なるを省て二字とせしは、勝田<sup>加豆</sup>登米<sup>止與</sup>八部<sup>夜多</sup>倍<sup>春部</sup>加須<sup>我倍</sup>などいへる類いと多し。此類唱ふるには、古名のまゝにいひたるのみにて、文字はしかよまるべきことにあらず。

さて十市<sup>止保知</sup>また十市<sup>止布知</sup>とあるを見て、十は止乎の假字なるに、あるは止保といひ、或は止布とあるは、假字のたがへるとおもふべけれども、これも二字を二字に省て、名はもとのまゝに唱へし也。止保知は十保市とありし保を省き、止布知は十布市とありし布を省しにて、登與米を登米と略し書たる類也。假字の違ひたるにはあらず。

又その中一つ二つ傳寫の誤れるもあり。尾間<sup>未</sup>とあるは後人の於乎を同じ事とおもひて書誤れる也。『萬葉』卷

三 村田春海

『若桂』<sup>丁六</sup>に「地名の文字をひたすら

『續千載集』皇子「露わけてやどかりごろもいとげども里はとほちの野べのゆふぐれ」遠は古はトホ、今トフ。十はトヲなればいづれにてもかよひがたし。といへり。今按に、『拾遺集』雜賀春日の使にまかりてかへりてすなはち女のもとにつかはしける、一條攝政「くればとく行てかたらむあふことのとほちの里のすみうかりしも」これも同じく遠き意にいひかけられたり。そは『和名抄』に「大和國<sup>郡</sup>十市<sup>止保</sup>」とあれば、ふるくよりしかとなへしなるべし。又「筑前國遠賀郡十市<sup>止布</sup>知」ともかけり。さればひとり『續千載集』をのみとがむべからず」といへり。但し、『増補雅言集覽』の増補には、「此地名の假字の事、濱臣が『答問雜稿』にくはしくいへるがごとし」とあり。濱臣の説は下に擧ぐべし。



九に、「其津乎指而」と古本に有を、印本には、「其津於指而」とあるなど、全く寫生の誤にて、もと論ある事にはあらず」といひ、なほ十の字をトの假名に用ひし例證をあげて、『神代紀』に十握劔をトツカツルギとよみ、『萬葉』に十方を止毛の假字におほくもちひ、又十年をト、セ、十丈をトツエと古語にいひ、又トフノスガコモなどもいへれば十を止の假字に用ふることうたがふべからず」といへり。

清水濱臣の『答問雜稿』<sup>三</sup>の説は師春海の説に同じく、『續日本紀』和銅六年五月の詔に「畿内七道諸國郡郷名著好字」と見え、又『延喜式』(民部式)に、「凡諸國部内郡里等名並用二字必取嘉名」とあるを引て、「いにしへは文字にかゝはず、正字借字かさ來れるまゝに通用し、三字にも書たるを、かく定ありての後は、國郡郷名みな二字に約めたる也」といひ、<sup>カミツツ</sup>上野古事記に上野<sup>シモツツ</sup>野をはじめて、大和郡

名磯城上下を<sup>シ</sup>城上<sup>カミ</sup>之岐乃<sup>シ</sup>城下<sup>シモ</sup>之岐乃<sup>カミ</sup>葛城上下を<sup>カ</sup>葛<sup>カ</sup>上<sup>カミ</sup>加豆良岐<sup>カツラギ</sup>葛<sup>カ</sup>下<sup>シモ</sup>乃之毛<sup>ノシモ</sup>相模郡名足柄上下を<sup>ア</sup>足<sup>ア</sup>上<sup>カミ</sup>加美<sup>カミ</sup>足<sup>ア</sup>下<sup>シモ</sup>准上<sup>ノシモ</sup>今本和名抄には、足柄上・足柄下と三字にか<sup>カ</sup>上<sup>カミ</sup>加美<sup>カミ</sup>足<sup>ア</sup>下<sup>シモ</sup>けれど、これはあやまり也。活字本に足上・足下とあるをよとあり。此ほかにも武藏<sup>ムサシ</sup>國名<sup>ノ</sup>但<sup>タ</sup>馬<sup>マ</sup>國名<sup>ノ</sup>美<sup>ミ</sup>作<sup>サカ</sup>國名<sup>ノ</sup>安宿<sup>アノカベ</sup>河内<sup>ノ</sup>丹<sup>タニ</sup>比<sup>ヒ</sup>同上<sup>ノ</sup>安八<sup>アハチ</sup>美濃<sup>ノ</sup>春<sup>カスガ</sup>部尾張<sup>ベ</sup>郡名<sup>ノ</sup>何<sup>イカル</sup>鹿<sup>カ</sup>丹波<sup>タニ</sup>郡名<sup>ノ</sup>登<sup>ト</sup>米<sup>メ</sup>陸奥<sup>リクオ</sup>知夫<sup>チフ</sup>隱岐<sup>インキ</sup>郡名<sup>ノ</sup>英<sup>エ</sup>太<sup>タ</sup>勢<sup>セ</sup>郡名<sup>ノ</sup>舉<sup>ウ</sup>母<sup>モ</sup>三河<sup>サンカワ</sup>郡名<sup>ノ</sup>都賀<sup>ツカ</sup>石見<sup>イシミ</sup>信<sup>シ</sup>樂<sup>ラク</sup>近江<sup>チカホ</sup>郡名<sup>ノ</sup>かぎらねど、大かたにてあきつ」と記し、「十市ももとは三字なりけんを中のホにあてし文字をはぶきしものなり」とせり。<sup>十をトの假名に用ひし例を擧げられど、春海の引く所と全く同じければ略せり。</sup>岡本保孝、『難波江』<sup>百家説林續編下</sup>に、此の説を駁していはく、「我師清水濱臣は和銅六年の詔により、本居氏の『轉用例』<sup>編者いふ、地名字音轉用例</sup>に倣ひて、十は登の假字、保にあたる字は省けるなりといはれき。……師説面白きやうなれどうけとれず。いかにといふに、『古

事記』孝靈に「十市縣主」とかけり。又崇神「十市之入日賣命」とみえたり。和銅六年五月の詔よりはやく、和銅五年正月に奉る『古事記』に十市とあれば、中略の例とはなしがたかるべし。……

師説は何故に『和名抄』をたすけてトホチとせられたらむともふに、十市を遠路<sup>トホチ</sup>にそへたる歌の、やゝふるくみゆるよりのことにはあらぬか。今おもふに、やゝふるくみゆる歌も『和名抄』に誤られたるものとさだむべくや。其歌とは、『拾遺集』<sup>雜賀一</sup>「くればとく行てかたらん逢事のとほちの里の住みうかりしを」『新古今集』<sup>秋下。式</sup>子内親王「更けにけり山の端ちかく月をみてとほちの里に衣打聲」……これらなり。すて、證とすまじきなり」といへり。

二 トヲチ

どじよう(泥鰈)

笹村良昌 とをち 十市。『和名抄』にトホチ。『拾遺集』に「遇ふ事のとほち」『續千載集』に「里はとほち」とあり。皆誤也。

(假字の榮)

郵岡良弼も『日本地理志料』<sup>卷二の</sup>三七丁に「十市郡、止保知。<sup>按保當作止。大同類聚方竹取物語並作止。止莫知郡。可從。伊呂波字類抄十訓止莫。</sup>」といひ、橘 成員(倭字古今通例全書) 谷川士清(倭訓栞) 落合直文(ことばの泉) 等もヲの假名遣とせり。また前にあげたる『難波江』の説によりて推すに、岡本保孝も『和名抄』の訓を誤れりとし、ヲの假名遣とせるがごとし。

どじよう(泥鰈)



トヂヤウ

一 橋 成員 どぢやう 鰍 『本草』には鰍魚とあり。又泥鰍とかく。俗に土釘とかく。然ども是を訓母とす。

(倭字古今通例全書)

二 榊原芳野

『洋々社談』第八號、海泥二鰍の談に『海鰍嘆じて

曰、我と汝と同名なるを以て辱く吊はる。然れども汝は卵生にして淡水に産する魚屬、我は胎生にして鹹水に育する獸類なるは、近來人間も亦知れる所ならずや。而るに汝は泥字を加へ、我は海字を加へて等しく魚類とす。物を辨ぜざるの甚ならずや。泥鰍笑て曰く、請ふ岸頭の酒店を見よ。招牌上に、くじら汁どぜう汁と並に兩行に書す。是大小の別を知らざるのみならず。汝は久治良にしてクジラに非ず。『古事記』神武の御製以て徵すべし。我は土長にしてドゼウに非ず。『塵添塵囊』の語證するに足れり。已に彼が如く、其名を誤る。何ぞ其實を識るに至らん。文明の世猶

文盲の人多し。其これを如何せん』

平野必大(本朝食鑑卷七の一九丁) 小野蘭山(本草綱目啓蒙卷四〇の三〇丁) 落合直文(ことばの泉)また『塵添塵囊』に土長とあるに従へり。

狩谷望之は、『箋注倭名類聚抄』卷八の一二丁に、『鰍即泥鰍。『塵囊抄』所載土長是也。土長即泥鰍字音之譌』といへり。

三 鈴木忠孝

泥鰍の假名いかゞあるべき。一説ドジヤウとす。そは『和漢三才圖會』五十、魚類、河湖中無鱗魚に「泥鰍、どじやう。泥鰍字音之訛也」とあるによれるなるべし。鰍は『字彙』に鰍の俗字とあり。鰍鰍ともに、七由切、音シウなり。此説一わたりはさることのやうにも思はるれども、もと泥鰍ダイシウといふ漢名は、本草家のいふ學名にこそあれ。これによりて一般俗間のと名へ名となれりけむことおぼつかなくやあらむ。さてはまだ、本草の書のここに渡

り來ざりし前には、何といひけむ、といふかし。一説土生の

字音なりともいへれども、是も亦迂遠の説にやあらむ。ざるは世に土中に生ずるもの、必しも泥鰍とのみ限れるにもあらじをや。又一説ドヂヤウとす。是はかの何がし釋氏の『塵添塵囊』に土長の字をあてたるによれるものにて、榊原芳野氏も此説に従へり。されど土中に生ずるも、土中に長ぜむも、同じ程のことなり。信じ難し。『下學集』に土鰍の字をかきたるは據りどころあること歟。捨て難きここちもせらる。

おのれ思ふに、ドは必泥ドといふことにて、その流音を省けるものなることは、必疑なかるべし。さてはチャウの義いかゞあらむ。此魚強くつかめば、チュウチュウと鳴く。そのこゑによれるにはあらじ歟。こは極めてをさなき考ならめど、こうじはてはかゝることをも思ひつけるなり。

(大八洲 二五の五號)

此の他、林 道春の『多識編』四の二また登知也字と注し、具原篤信の『大和本草』卷一三にもトヂヤウと訓

せり。

二 ドヅヲ・ドヂヲ

小山田與清 今俗に泥鰍をドヂヤウといへり。與清按に、こは泥津魚ドロヅナの義なるべし。されば假名にはドヅヲドロヅヲまたはドヂヲなど書べき也。

(松屋筆記圖書刊行會本第一の二五頁)

三 ドジヤウ

一 寺島良安 泥鰍 俗云止之也字。泥鰍ダイシウ字音之訛也。

(和漢三才圖會活版本七三三頁)

二 谷川士清 『倭訓栞』に「どじやう 泥鰍をいふ。音轉にや。又泥生の音也ともいへり。……鰍は倭の俗字な



り。湖邊の名に柳土生釘土生などの品あり」といひ、  
『鋸屑譚』百家説林正編上の九八九頁には、「泥鱈。俗土淨とよぶは音の  
轉訛なり」といへり。

物集高見の『日本大辭林』笹村良昌の『假字の栞』  
またドジャウの假名遣とせり。

#### 四 ドジヨウ

『俚言集覽』土鯪 假字未詳。髭ある魚なれば土尉  
の義歟。然らば尉は丞の義にて、ジヨウの假字なり。

#### 五 ドゼウ

大石千引 『言元梯』に「鱈ドゼウ 泥鱈ドゼウ」

#### 六 未定

大槻文彦の『言海』ドゼウの條に、「ドゼウ 泥鱈。ど

ぢやうの條を見よ」と注し、どぢやうの條に、「どぢやう  
鯪。『塵添嚙囊鈔』に土長の音を當てたり。或云、泥鱈の音  
の轉訛かと。或は泥生又土生の音の轉ともいふ。常にドゼ  
ウと記すはいかゞ」といへり。

#### とのゝ(宿直)

##### 一 トノイ

賀茂眞淵 侍宿トノイ爲鴨。侍宿と書からは、こは殿宿トノイ也。  
然らば假字は止乃伊也。後世トノキと書はあしはかりのわざ  
ぞ。

(萬葉考卷二の二五丁)

楫取魚彦(古言梯)この説に従ひ、谷川士清も、『和訓  
栞』に「とのゝ『日本紀』に宿、『萬葉集』に侍宿を

よめり。殿居トノイにあらず。宿直も同じ。晝に直といひ夜  
に宿といふ。『文選』注に「直謂宿禁中一以備非常  
也」と見ゆ。殿寢の義也。寢をイとよめり」といひ、  
坂 徴(蜻蛉日記解環國文注釋全書本三七〇頁) 高橋殘夢(國字定  
源上の三) 寺田長興(太津可豆衛) 笹村良昌(假字の栞)  
等も殿寢の義とせり。

#### 二 トノキ

行阿 『假名文字遣』三六に「とのゝ 宿直殿居」  
と注せり。

『一步』にも「とのゝ 宿直 是は番をして居を殿  
居と書故、宿直とかきても、番をして居事なるにより中  
のキの假名を書也」といひ、  
本居宣長は『玉の小琴』全集第五の六一五頁に、「侍宿の假字  
を『萬葉考』にトノイと定められたるはわろし。殿居

の意にてキの假字也。若宿の字によりてイの假名也と  
せば、トノネとこと云べけれ。ネとイとは聊意異也。  
ネは形につきていひ、イは睡眠の方に云也。侍宿は形  
につきて、殿にてぬるとは云べけれど、殿にて睡眠する  
とは云べきことに非ず。集中にも宿字は、又ネには  
書れどもイにはかゝず。トノキのキは居にて、夜殿に  
居と云こと也。晝をトノキといはざるは、晝は務るこ  
と有て只には居ぬ物也。夜は務ることなくて只居る故  
に、夜をトノキとは云也。さて務ることなき故に、寐も  
することなれども、寝るは主とすることには非ず。侍  
宿は殿に居るを主とすることなる故に、トノキとは云  
也。眠るを主としてトノイと云べき由なし」と論じ、  
敷田年治は『音韻啓蒙』下の五に『夫木集』廿七なる  
「深き夜のみ山がくれのとのゝのゝ猿ひとりちとなふ聲の  
さびしき」といへる歌を擧げ、「按にとのゝは殿居



にて、俗に云夜番也と聞ゆ。上に引るとのい猿も、多くの猿の寐たるに獨り起き居たるよしなり。是を殿寢とせむはわろし」といへり。

貝原篤信(日本釋名三丁) 平直方(夏山雜談一丁) 石川雅望(雅言集覽) 『俚言集覽』 足立稻直(紫式部日記解國文注釋全書 堀秀成(假字本義考) 大槻文彦(言海) 小田清雄(國語かなつかひ早學) 等また殿居の義とし、

村田春海は『増補古言梯標註』に「本居宣長がくはしくいへるによるべし」といひ、鹿持雅澄の『萬葉集古義』活版本卷二 下の八七丁にも『玉の小琴』の説を引きてキの假名を書けり。

又大石千引は『言元梯』に殿寐の義としイの假名遣としたれど、『増註日中行事略解』頁一六には此の説を否定し殿居の義とせり。萩原廣道も『心の種』にはイの

假名と定めたれど後に其の説の變じたるなるべし。『源氏物語評釋』にはキの假名を記せり。

此の他、橘成員の『倭字古今通例全書』市岡猛彦の『雅言假字格』加茂季鷹の『正誤かなつかひ』清水濱臣の『語林類葉』近藤真琴の『ことはのその』物集高見の『日本大辭林』落合直文の『詞の泉』等いづれもキの假名遣とせり。

以上諸説の他に、契沖が『和字正濫鈔』二丁に「宿直、とのゐ。殿居なり。侍宿とも」と注し、『和字正濫要略』一六には「宿直、とのゐ。殿寐也。ゐの假名に非」といへり。後に考へ改めたるにや。

### とんぼう(蜻蛉)

#### 一 トンバウ

一 貝原篤信 蜻蛉 かける也。飛かける虫也。蜻蛉は飛羽也。

(日本釋名二の五二丁)

谷川士清の『倭訓栞』に「とんぼう 俗に蜻蛉をいふ。飛羽の義也といへり」とあり。

二 大槻文彦 とんぼう 蜻蛉 飛坊の音便ならむ。或云飛羽の轉と。

(言海)

此の他、寺島良安の『和漢三才圖會』活版本七に「蜻蛉總名曰止牟波宇。名義未考」とあり。

伴信友も『比古婆衣』百家説林續編 中の九五頁に『和歌童蒙

とんぼう(蜻蛉)

抄』に「かげろふのことを黒きとらぼうのちひささやうなるものなり」と見えたるごとく蜻蛉を林逸節用集・新韻集にトハウ本草和名薄抄に止牟波宇又加計呂不。運歩集・撮壤集にトンハウとよみ、今なべ蓋義抄に「蜻蛉といふは大小のとんぼうの惣名なり」といへり。てとんぼうといふもの、中の一種に云々」と記せるを見ればバウの假名遣説なりしなり。

#### 二 トバフ

貝原好古 蜻蛉 とんぼう又とんぼう並誤。

(諺草一の五九丁)

#### 三 トンボウ

清水濱臣 とぼう 蜻蛉。『袖中抄』三十一「あきつは蜻也」○『著聞集』蹴鞠「我一期に此とんぼうがへり一たび也」○東方の轉音なるべし。

(語林類葉)



東方の説は、はやく荻生徂徠のいへる所にして、『南留別志』卷三の二丁に「蜻蛉をとんぼうといふは吾邦の名を秋津洲といふゆゑ、東方といふ事なるべし」といへり。

『南留部志の辨』温知叢書第五編の一六頁には、「和名抄に胡

黎をキエンバといふ。蜻蛉の小にして黄なるなり。赤卒はアカエンバ。蜻蛉の小にして赤きなりといへり。

今いふヤンマ又トンボはみな訛れり。東方なりと思ふは、近比の唐をしたひこらじたる人、稱呼をたがへるより出たる意なり。もししひごとせばヤンマはヤマトムシともいへらんやうなるべし。蜻蛉の形に似たるとは和州のかたちにして、大八洲すべて形の似たるにはあらず」とて徂徠の説を駁せり。

此の他、狩谷望之の『箋注倭名類聚抄』八の六 蜻蛉の條に「今俗呼止无保字。是名見三袖中抄・童蒙抄」ま

た物集高見の『日本大辭林』に「とんぼう 蜻蛉。『袖中抄』三「あさつとはとんぼう也云々」など見え、

橘 成員の『倭字古今通例全書』新井白石の『東雅』四の五 山岡俊明の『類聚名物考』七一頁 鹿持雅澄の『萬葉集品物解』活版本、四の七四丁 等いづれもボウの假名を書せり。また、

大石千引の『言元梯』に「蜻蛉トシホ 飛トシホ」と注せり。

### 四 トンバウ・トンボウ

落合直文の『ことばの泉』とんぼうの條に「とんぼう 蜻蛉」とんぼうの條に「とんぼう 蜻蛉。とんぼうにあなじ」とあり。

林 道春の『多識編』四の九丁に「蜻蛉 阿元豆牟志。俗云登牟波宇」と注し、蜻蛉を阿於登牟波宇。胡黎を元登牟波宇。赤卒を阿加登牟波宇などと訓せるに、

紺鑿の訓に久呂登牟保宇。馬大頭に於保登牟保宇と訓せり。

## なおざり(等閑)

### 一 ナホザリ

賀茂眞淵 なほざりにてふ語は直進ナホサミの意なり。いかにぞなれば、直は凡人ナホをナホ人ナホてふ直の如く、常體ツネニの事をいふなり。スサミをサリといふは、スツを略ツミをリに通はせて云なり。然ればその物にふかくおもひも入らず、打ある心なほをナホザリとはいふなり。

(伊勢物語古意全集第四の三五二七頁)

楫取魚彦(古言梯) 大野廣城(掌中假字便覽)この説に従へり。

建部綾足は『伊勢物語古意追考』一三に眞淵の説を駁して、「さる時はことばの心しかとあたらず。こはたゞ直去の意。そのままにてなほにすぎしやるとばかりの心也」といへり。直去の説は『言元梯』にも見え下下に引けり。

### 二 谷川士清

なほざり 等閑をよめり。千家詩の注に「尋常也」と見えたり。直ナホ有の義。ゾア反ナホ也。ナホは即よのつねの義。たゞ人をナホ人ともいふが如し。一説に「ナホナホノスサミゴト」といふ也。スサミをサリといふはスサは約めてサ也。リとミと同韻通也。心に深く思はぬをいひもし、なしもするをいふ。編者いふ、此の一説は、賀茂眞淵の説をいへるなるべし。西要抄言釋(全集第四の三九九三頁)に「なほざりは、ナホナホノスサミゴト。此ナホは平直の人々をナホビトといふ類のナホにて、大かたにする事なり。スサミは進にてロスサミ・手スサミのナホに同じ。仍て物を大かたにするをナホザリといふ。」とあり。前に擧げたる伊勢物語古意の説と同意なれど、「ナホナホノスサミゴト」の約とせんはあまりに冗長なれば、古意の説をあげたるなり。……『遊仙窟』に平生をもよめり。今ナホザリと書るはいかじ。



(倭 訓 栞)

『俚言集覽』大槻文彦の『言海』等『倭訓栞』の説を  
擧げたり。

三 小山田與清

なほざり 與清按にナホは尙猶などの  
の義にあらず。直また默などの意なり。『續紀』二十二に、  
「默在牟止云々」『同』二十八に「默在去止不得之天云々」  
とみえ『同』十に「猶在倍岐云々」『同』十七に「猶止  
事不得爲天云々」などある猶も默に借たるなり。『萬葉集』  
七に「默然不有跡」と書を、『河海抄』の花宴の巻に  
ナホアラジとよみ、『伊勢物語』に「みやづかへのはじめ  
に、たゞになほやはあるべき」などあるナホも、みな默の  
義にて、いたづらになどあるさまなり。サリは去往の意に  
て、時のうつり去る事なり。何わざするともなく、いたづら  
に時日の移去をナホザリとはいへるなり。  
(十六夜日記殘月抄の二二丁)

四 高橋殘夢

ナホザリ 等閑 こは猶去にて猶と願ふ思の去たる  
を云。よてホなり。  
(國字定源中の六丁)

五 寺田長興

なほざり 『倭訓栞』に「千家詩の注に  
尋常也と見えたり」と云り。『遊仙窟』には平生を訓り。  
かゝれば『いせ物語古意』に「直進」といへるも、理り  
は近けれど言葉には遠し。こは按ふに、直人をタ、人とし  
訓れば、直はタ、の意にて、直然り也。シカの約はサ也。又  
字書に、然は如是と注せれば、尋常又平生にも通へり。心な  
らず過しやる意にはあらずかし。  
(太津可豆衛)

此の他、大石千引は『言元梯』に「等閑 直去」と  
注せり。建部綾足も直去の義とせること前にいへるが  
如し。

二 ナヲザリ

行阿の『假名文字遣』五丁に「なをざりがてら 等閑」  
と見え、橘 成員の『倭字古今通例全書』契沖の『和字正  
濫鈔』三の二にも、ヲの假名と定めたり。

なぢむ(馴染)

一 ナジム

谷川士清 なぢむ 熟する意。馴染の義也。なぢま  
ぬ人を生客といひ、なぢめる人を熟客といふなり。

(倭 訓 栞)  
横島昭武の『合類大節用集』に「馴致 致目ニ馴致一  
馴染」  
小山田與清の『松屋筆記』國書刊行會本第 二の四一六頁 に「なぢみ

なぢむ(馴染)

二 ナヂム

『陽祿門院三十三回忌記』九卷六十八丁左 に「むかしの  
御なぢみ淺からず云々」按に、今もいふ詞にて、馴染  
の義也」と見え、この他、  
大槻文彦も『言海』に「なれしむの約」と注し、『俚  
言集覽』物集高見(日本大辭林) 落合直文(ことばの  
泉)等いづれも、ジの假名遣とし、馴染と書せり。

『俚言集覽』愚按 「なぢみ」『色道大鑑』門辭「ナヂ  
ミ 尋常のナジミと云は、誰によらず、年久しく昵び來れる  
にいへども、當道にては、先女郎にむかはらずして、久しく  
逢たる男をさしていふ詞也。されど、大かたは女のかたよ  
りいふ詞也」愚按、ナジミは假字違也。奈治美の假字也」  
「なぢむ ナヅサイ又ナヅムに同じ。泥字を訓り。又昵  
をよめり。又俗に馴染を訓り。馴染はナジムの假字也。ナ



ジムにはあらず。然れどもナレソムルのソムルは、本初字の義にて、染は借字也。いづれにもナジムとは別義也」

### なばえ

#### 一 ナバエ

一 谷川士清 なばえ 苗生の義なるべし。草の芽出メダシをもいへり。『夫木集』に「鶯の居る杭の柳はなばええしてめぐみにけりな春をわすれず」

(倭訓 栞)

大槻文彦の『言海』に「なばえ 苗生の約かと云。芽出メダシ」とあり。

二 小山田與清 なばえ 『夫木抄』三 柳歌に、家集、源仲正「とびのゐるゐぐひの柳なばええしてめぐみにけりな春

をわすれず」又『建長八年百首歌合』法印實伊「春雨はいやふりにけり河邊なるゐぐひの柳なばええするまで」

按になばえを原本になばへと書たるは誤也。ナバエと書べし。『類聚名義抄』僧 雑部に、嵐嵐嵐嵐の五體をムマゴツギ・タチ・ヨワシ・ナバキとよめり。ナバキはナバエを寫しひがめたる歟。ナバイとありしイをキに書かへたるにても有べし。

名義は空生の略語と見ゆ。そは切杭より生出たる芽にて繁榮すべくもなき空生ムナバエなれば也。

(松屋筆記圖書刊行會本第二の二二八頁)

三 中島廣足 『増補雅言集覽』なばへの條に、「廣足按にナバエなり。契沖説またばえにちなじといへり」といへり。

#### 二 ナバへ

石川雅望 なばへ 柳のすぐに延たるをいふなり。長延か。『夫木集』三、源仲正「とびのゐるゐぐひの柳なばへしてめぐみにけりな春をわすれず」『同』同、法 春雨はいやふりにたり河邊なるゐぐひのやなぎなばへへするまで」

(雅言集覽)

近藤真琴の『ことばのその』長延の義とし、

吉田安年が『詞乃美乎都久志』卷六の一、三三三頁にも、「なばへ 柳のすぐに延たるを云」とあり。

物集高見は『日本大辭林』に「なばへ 柳のながくのぶをいふともいひ、やなぎのまたばえなりともいへり」として『夫木集』なる歌をあげたり。

#### 三 ナバエ・ナバへ

落合直文の『ことばの泉』なばえの條に「苗生メダシの義。芽の生ずること」と注して『夫木集』「春雨は云々」の歌

なめずる(舐)

### なめずる(舐)

#### 一 ナメズル

大槻文彦 『言海』に「なめずる 嘗シ。舌にて屢唇を嘗む」

#### 二 ナメヅル

田中延香 『日本靈異記』嘗の字の傍訓によりて、『古言梯拾遺』にヅの假名遣とせり。

物集高見(日本大辭林) 落合直文(詞の泉)もナメヅ



ルと記し、また『増補語林倭訓栞』の増補の部に、「なめづる『躰源抄』に、多 近方が堀川院天皇に神樂を授り奉る條に、「たしう紙に飯をいれてたびたりければ、其をわづかになめづりてぞ二三日もすごしける」と記せり。

### にゆうめん(入麵)

#### 一 ニフメン

小山田與清

入麵ニフメン 今世ニフメンといふは、索麵ソウメンを醬油ソウヂウの鹽梅汁にて烹、それに加天カテを加へたる也。此名目『節用集』仁部食服門に「入麵。ニフメン」と見ゆ。

(松屋筆記國書刊行會本第二の五六五頁)

物集高見の『日本大辭林』に「にふめん 入麵。さ

うめんのたまりにてにたるもの」と注せり。

清水濱臣も『語林類葉』に入麵の字を書せり。但し傍訓にはニウメンとあり。

本居宣長の『玉勝間』全集第四の二八六頁に「入麵。『中御門宣胤卿記』に「文龜二年正月廿五日、今日内裏御月次和歌會也。云々。參内云々。又有程一身被召御末賜入麵天酒等」と見ゆ。にうめんはこれ正字にや」といへり。

#### 二 ニウメン

谷川士清

『倭訓栞』さうめんの條に「醬もて煮たるを煮麵と稱す。ニウメンとよぶは音を引きたる也」

大槻文彦も『言海』に「にうめん 入麵。煮麵の延。入は當字にて假名違ふ」といへり。

り。然るを本居春庭の『詞のやちまた』全集一にはネヅクルと記せり。

#### 二 ネヅ・ネヂル

楫取魚彦の『古言梯』に「ねぢけびと 捻也。けは辭にて加禮約。佞人」と注し、谷川士清(倭訓栞) 本居宣長(玉の小櫛全集第五の二七六頁 御國詞活用抄第六) 石川雅望(雅言集覽) 萩原廣道(心の種) 小山田與清(松屋筆記國書刊行會本第一の七三頁) 『俚言集覽』近藤眞琴(ことはのその) 大槻文彦(言海) 物集高見(日本大辭林) 落合直文(詞の泉)等いづれもネヅまたはネヂルと記せり。

### のうれん(暖簾)

#### 三 ニフメン・ニウメン

落合直文の『ことばの泉』にうめんの條に「にうめん 煮麵」 にふめんの條に「にふめん 入麵。にうめん(煮麵)におなじ」と注せり。

### ねず(捻)

#### 一 ネジル

岡本保孝 『言靈』七一のに、「にじる 『宇治拾遺』十三第六「板敷におしあて、にじれば」 ○ネジルと同語也」とあり。ニジルの假名は新撰字鏡に論の訓不彌爾志留とあり。

此のねずと語源を同じくせりと思はるゝ語にねじくといふ語あり。中古の物語書にみえて、假名の證すべきもの、未だ見當らざれど、普通にヂの假名を用ゐた

ねず(捻) のうれん(暖簾)



一 ノウレン

一 谷川士清 のうれん 『璫囊抄』に暖簾とかけり。されど暖簾なるべし。門帘などもいふなり。ノウはナンの音轉なり。

(倭 訓 栞)

二 『俚言集覽』愚案

のうれん 愚按、暖は腴に同じ。又腴に作る、『韻鏡』十八轉嫩。奴困切。ノンと通ず。ノンをノウとよむは、判官をハウグワンといふが如し。

行書『璫囊抄』卷七の二に『暖簾垂布也』『同書』二卷

ハ丁に『叢林の秉拂寮等の兩班寮を賀するをノンリヤウと云何事ぞ。字には暖寮と書く。入院を賀するを暖寺と云。其席をかたむる心也。惣て禪家の名目皆以て常ならず』とあり。また、

橘 成員の『倭字古今通例全書』に『のうれん。のうれんとも 暖簾。垂席也。附、ノンキの時、暖氣とか

く。又禪家に云ノンジ暖寺。又ノンリヤウ暖寮。皆俗言なれども、ダン・ノウ・ノン舌音にして一也』といひ、物集高見の『日本大辭林』にもノウレンの假名遣とせり。

二 ノウレン・ナウレン

大槻文彦

『言海』なうれんの條に『なうれん 暖簾。字の音ナンレンの音便。或は元明時代の音ともいふ。……ノウレンとも書し、又略してノレンともいふ』『同書』のうれんの條に『のうれん 暖簾。なうれんの條を見よ』とあり。

落合直文の『ことばの泉』またなうれん・のうれんの兩條に出せり。

● 参考

一 バイ

谷川士清 ばい 海螺をいふは貝を誤れる成べし。……ばいごまは西土の書に陀螺の名あり。バイトキともいへり。

(倭 訓 栞)

林 道春の『多識編』四の二に『海贏 今云波伊』と見え、大槻文彦の『言海』に『ばい 貝の音かと云。螺の類。……此殼の頭尖を碎さ去りて獨樂とす』といへり。

平野必大は『本朝食鑑』卷一〇の四六丁に『貝者諸貝子之通稱然今本邦俗以海蠅稱貝故暫隨俗耳』といひ、荻生徂徠は『南留別志』二の三に『貝は子安がひなり。海螺をバイといへるは誤れるなり。貝をカヒとよみて一切の介虫の惣名とするも誤なり』といへり。

橘 成員の『倭字古今通例全書』にもイの假名遣と

一 松永貞徳の『和句解』三の二に『暖簾 のうれん 暖字不審。暖、ダン・ナンと云聲をノンとはナンと云心か。ナニヌ子ノと五音つらず。あたゝかなるすだれと云義か。ノンキも暖氣と書。唐音か』といへり。

林 道春の『多識編』四の二にも『縹 今案、多禮奴

乃。俗云、能牟辰牟』と見ゆ。

二 太田 方の『漢吳音徴』二八には、『暖。吳轉音。乃尼。』『倭字通例書』『暖簾、ノンレン、暖氣ノンキ又禪家、暖寺ノンジ、暖寮ノンリヤウ』愚案、是十八轉の炳に轉ずるなり。炳音、次音ノン 暖の去聲便と同韻の緞、俗にドンと呼べり。同じひじさなり』といへり。前にあげたる俚言集覽愚案の説は、恐らくは太田 方の説なるべし。

ばい(海螺)



せり。

### 二 バビ

寺島良安の『和漢三才圖會』活版本七に「海蠚俗云波比〇二頁按、海蠚生海中一螺也。色形似田螺而堅大於田螺。小兒取其殼打去頭尖令平均纏細芋繩舞之爲戲」物集高見の『日本大辭林』にも「ばひ 海蠚」と注せり。

### 三 バイ・バビ

落合直文の『ことばの泉』に「ばい 黄螺。貝の名。海蠚」「ばい 陀螺。ばいごまの畧」「ばひ 海蠚。貝の名。兒供はその殻を獨樂の如くまはして弄び、これをばひごまといふ」

### はいる(這入)

#### 一 ハヒル

谷川士清 はひる はひ入の義。はふはいさゝかの間の處を歩き行事也。『後撰集』に「妹が家のはひ入に植る青柳に今や啼らん鶯の聲」門より屋の内、はひ入までの間の庭をはひ入といひしなり。

(倭訓栞)

山岡俊明も『類聚名物考』第五冊の二〇七頁に「家のはひりはひり ○家のはひり口といふに同じ。走出ともいふなり。這入といふを略る歟。又匍匐の意にはあらば、入口といふにハをそへて云ふにやあらん。さらば假名もハイリと書べきにや。まづはハフ意なればハヒリなるべし」といひ、

本居宣長も『古事記傳』全集第一の六九三頁に波比岐神の名義を解して、「例の強ていはゞ波比入君の意か、伊は比の韻にある故に本より省き、又理と美とを省けるなり。……『後撰集』春上に、通住侍ける人家の前なる柳を思ひやりて。躬恒。「妹が家の波比入に植る青柳に今や啼らむ鶯の聲」『堀川百首』にも「柴の屋の波比理の庭におくか火の煙うるさき夏のゆふぐれ」是らるを思ふに、門より舎屋内に入までの間の庭を、波比入と云しなり。古言なるべし。波比入とはたゞ歩入にて、今世の言にも、入を波比流と云、これなり。波布とはいさゝかの間の處を歩き行ことなり。故『源氏物語』などに、家内などにて、彼より此へ來ることなどを、波比渡など多く云り。須磨浦と明石浦との間を、「たゞはひわたるぼと」と云ること、彼卷々に見えたるも、甚近きよしなり。……かゝればかの人家の波比入も、門よ

り舎までは遠からぬほどなる故に、其間を步行入る意なり」といへり。中山美石の後撰集新抄(一)の二五丁)この説により。また、  
村田春海の『若桂』丁ハにも、「此假字古書に正しき證は見えず。……ハヒルと書べき事とぞ。そのゆゑは、イリを約めてリとのみいふは古語の常也。ハヒを略してハとのみはいふべからず。かつさる例もなし。されば里は伊里を略せる事明らか也。波比理と書こそ正しけれ」といへり。  
この他、鈴木 順(雅語譯解) 石川雅望(雅言集覽) 萩原廣道(心の種) 大野廣城(掌中假字便覽) 寺田長興(大津可豆衛) 佐藤誠實(語學指南三の二) 大槻文彦(言海) 物集高見(日本大辭林) 落合直文(詞の泉)等みな同説なり。但し言海・日本大辭林ではイリ『俚言集覽』にもハの假名遣として、春海の説を引き、清水濱臣の『語林類葉』またハヒルとあり。



二 ハイル

加茂季鷹の『正誤かな遣』に「はいり 匍入」と注し、契沖の『和字正濫鈔』二の二に「匍匍入 はひいり」後撰の歌によめり。常に「ハイルグチといへり」と記し、本居春庭も『詞の八衢』全集三には「はいる」と書せり。

● 参考

齋藤彦麻呂はく「今の世の人の詞に、外より内へ入る事をハヒリといへるは、這入の事として、犬猫のたぐひにいひ馴れたる詞なるべし。ハヒリは家の門口の事にて、『後撰集』に「妹が屋のはひりにたてる青柳に今や鳴くらん驚の聲」編者いふ、二句普通本には、ハヒイリとあるを、ハヒリとせるはさる異本のありしなるべし。村田春海この語につき、若桂に説をなして曰く、ハヒイリといふことはなし。古歌に「ハヒリの庭」「ハヒリの柳」などのみいへり。後撰にハヒイリと書たる本のあるは、這入など書たるを、ハヒイリとこゝろ得て後人の書誤れる也。といへり。ハヒイリといふことはなしといへど、類聚名義抄尾部に、「這、ハヒイル」とあり。字鏡集這の訓ま

たお『堀川百首』に「柴の家のはひりの庭にたく蚊火の烟うるさき夏のゆふぐれ」『古事記』に大年神子、阿須波神・波比岐神とある阿須波は庭なり。波比岐は波比里にて門口なり。『萬葉集』に「庭中の阿須波の神に小柴さし我は齋はんかへり來までに」『祈年祭祀詞』に、井の神を祭る處に、「生井榮井・津長井・阿須波・波比支登御名者白氏辭竟奉者云々」とありて、門の入口を波比利といふなり」

(傍 廂百家説林正編上の三九六頁)

はえ(蝕)

一 ハエ

谷川士清 はゑ『推古紀』に蝕字を訓せり。日月の蝕は虫の木葉を食ふごとくなれば、食餌の義なるべし。

俗にエバミといふがごとし。

(倭 訓 栞)

石川雅望(雅言集覽) 近藤真琴(ことばのそ) 大槻文彦(言海)も『推古天皇紀』蝕ハエツキタルの訓により、萩原廣道の『心の種』菅村良昌の『假字の栞』にもエの假名遣とせり。

二 ハエ

一 伴 信友 近き頃となりて、古事しのふともがら、日月の蝕といふことになれるを、古はハエといへりと心えて、文などにもものすめり。されど『和名抄』にも、蝕字の下に和名を載られず。其餘ホカ古き書どもの訓にも、をさく見あたらず。たゞ『書紀』の古訓に、「推古三十六年三月丁未朔戊申日有蝕盡之」とある蝕盡を、ハエツキタルと訓み、「舒明八年正月壬辰朔日蝕之」とある蝕を、ハエタリ

はえ(蝕)

と訓み、次に九年三月乙酉朔丙戌日蝕之とあるところの訓も同じ。「皇極二年五月乙丑十六日月有蝕之」とある蝕をも、ハエタルとよみ、又天武九年十一月壬申朔日蝕之とみえたるころには、ハエタリと訓り。是を其ハエといへる言の書に見えたる始なるべき。

さて其蝕をハエと云へるは、日月の光映ヒカカリの翳カケるを忌て、反さまに映と云なしたるにて、死を奈保留、病を夜須美、葦を與志など云ふと同じ例なるべし。但し映の意ならむには、假字ハエなるべきを、此に擧たる『推古紀』などにハエと作るかたは誤寫にて、『天武紀』にハエと書るどよろしかるべき。

(比古婆衣全集第四の三九頁)

前田夏蔭が天保九年に書ける『蝕字訓義考』一卷あり。説く所『比古婆衣』の説に同じく、日月の虧失カケウスるを忌憚イミヤカリて表裏にいひ替ウラウヘたる忌詞イミコトバなりとせり。なほ上古より反對にいへる忌詞の例證の多きをあげて曰く、



『皇大神宮延曆儀式帳』に云、「倭姫内親王の齋宮の御時、種々の言忌を定め給へりしより、人打乎奈津止云。法師乎髮長止云。死乎奈保留止云。屍乎奈保利物止云。今本に、「死乎奈保利物止云」とあるは語とよのはず下に引く延喜式の文を合考するに、語の脱たる事いぢるく、如此あらざれば聞えず。故、病乎慰止云」と見えたり。是皆其意を表裏に替たる忌詞なるをみるべし。

又『延喜齋宮式』云、「凡忌詞内七言、僧稱髮長、尼稱女髮長、外七言、死稱奈保留、齋院式には、病稱夜須美、式に直字を作り、打稱撫」と見ゆ。死を奈保留といふは、病癒るを上古も直るといひけむ。天平年中の『大安寺資財帳』に、寺内の坊舎を計たる中に、「病直屋」といふ所あり。此は病者を聚置て療養ために設たる屋を云なり。然れば病癒む事の活らで死るを、表裏に奈保留とは云るなるべし。又『儀式帳』には病を慰と云とあるを、『齋院式』には息と云と書き。此に据て按に、慰の字は

憩と云字の誤にやとも思はるゝを、中世に病臥を忌て、歡樂といへる詞もありて、『東鑑』の中などにも所々見えれば、即それと同意にて憩と云けむも知るべからず。何れにもあれ。意を表裏に替たる詞なるは同じ。

又『和名抄』卷十一部云、「蘇魴切韻云、音故。和取、洩舟中水之斗也。唐韻云、澹、故紺反。漢語抄云、澹、水和物也」とみえたる。また『拾遺集』源順の長歌に云、「波路にいたく行通ひゆもとりあへず成にける船のわれをし君しらば云々」とみゆる澹・辱・ユモトリアヘズなどある由といふ物は、船の中に水の打入たるを忌て、冷なると熱とを表裏にして水を湯と云るなり。是往古水手・梶取等が云習へる船中の忌詞なるべし。

又今俗に、人の死るをメデタクナルといふ詞あり。これも『中御門宣胤卿記』文龜元年十月條に、「勾當

内侍の消息云々ちぜむの御れう所の事、故あさくらげむぢらにしん上候べきにて、うけみぶらり。其とし御ねむぐまへにめでたくなり候あとにおほせ事候へば、何とも申あきさふらはぬよしにて云々」とあるは、越前國守護朝倉貞景の父の身まかりし時の事をいへるなれば、今の俗語に云習へるのみにはあらぬなりけり」といへり。

二 大石千引 『言元梯』に「蝕 喰彌」とあり。

三 小山田與清 蝕を『日本紀』にハエタリと訓めり。

ハエは所食の義也。波末の反波也。古言に禮を江といふ。則ハマレの義也。

(松屋筆記圖書刊行會本、第三の四四頁)

鈴木 脰の『雅語譯解』物集高見の『日本大辭林』小田清雄の『國語かなつかひ早學』もヤ行下二段活用の動詞とせり。落合直文の『詞の泉』また同じ。但し『同

はおり(羽織)

書』は多つくの條に、「は多つく 蝕盡」と注して、『推古天皇紀』の訓をあげたるは矛盾なりといふべし。此の他、市岡猛彦の『雅言假字格』にもエの假名遣とせり。

### はおり(羽織)

#### 一 ハオリ

『慈照院殿實錄』 多田義俊の『南嶺遺稿』二の二に、「羽織といふもの古來の道服也。いにしへ道服といふものを着したるは、其形羽織の長さやうなるものにて、道中にて塵ほこりの、衣装にかゝらぬ爲に着すもの也。夫が轉じて羽織となりたり。足利義量將軍の近習に仰られて、鳥の毛



にて織ませたる道服はやりたり。夫より通して羽織といふ名起りたるよし、『慈照院殿實錄』にあり」と記せり。

山本格安の『和言黔驢編』卷五の一丁に「羽織は羽を以織たると云より名づく名物なり。これをラリルレロに通はして一の詞とす」といへり。

二 寺島良安 ハオリ 按、襦短衣也。小襦爲<sub>レ</sub>衫俗云羽織也。其缺髻衫馬上所用羽織也。士庶人著<sub>二</sub>之於衣上<sub>一</sub>猶鳥之羽翅<sub>ニ</sub>故名<sub>レ</sub>之。

(倭漢三才圖會活版本四八一頁)

菊岡沾涼(近代世事談溫知叢書第三編の二六頁)の説また同じ。

三 谷川士清 ハオリ 羽織とかけり。……『無名抄』に鳥の毛にて織たる布といふ事見えたり。又足利將軍の時、鳥の毛を織ませたる道服はやりたるよりの名也といふ説あれども、鶴襲より起りたる名なるべし。道服の變じたる製とは見えたり。……○陣羽織あり。袖なしにしたて、

鳥の羽を集めたるが多ければ、羽織の起りは是なるにや。○俗語のハオツテ居といふは羽織を用ひたる也。

(倭訓栞)

文部省編輯寮の『語彙』二の一にあさのはちりと見え、物集高見は『奥羽永屋軍記』に「小具足の上に麻の羽織を着」とあるを引きて、ハオリと記し、落合直文(ことばの泉)またオの假名遣とせり。

大槻文彦は『言海』に「ハオリ 羽織。元と鳥の羽にて織れりと云。いかゞ。投の轉にて衣の上に投げかくる意ならむ。或云、道服の端折の義と。さらば假名遣異なり」といへり。

### 二 ハヲリ

一 『永祿日記』 『南嶺遺稿』二の二羽織の事をいへる條に、「此もの古來なきものにて、小袖の端を折て、短にした

るもの故、反折といふよし、『永祿日記』にあり」と記せり。

義俊また同説にして、『故實類聚抄』九卷に『太平記』時代の『園太曆』には、端折とあり。ハシヲリは女のうち掛の端折る事也。歩行する時、足取のよいために、はしををる。それで、男の羽織も女の端折に准して、歩行の爲に、すをなしにして着る故、ハシヲリのシを畧して、ハヲリといふもの也。……

今羽の字を書は、淡路國に伊弉諾尊の宮あり。その末社に少彦名命有。此神鵲の羽を以て衣に織て着玉ひたる事、『神代卷』にあり。其例を以て、彼社へ参り鳥の羽を一羽づつもらひ請て、衣に織籠て着物を羽織と云。此端折と聲一なれば文字を書損したるものなり」といへり。

村瀬之熙の『藝苑日涉』卷一の二七丁にも端折と書せり。

二 田宮仲宣 世俗貴賤の差別なく、羽織と稱する物を着くす。『園太曆』の趣を以按ずるに、承久の兵亂の後、公卿大に窮玉ひて、衣服調度ほむに任られず。勿論車馬は愈不隨意にて、衣冠束帶の御方も歩行し給へば、晴の服に塵埃の蒙らんことをいとひ玉ひ、衣冠などの上へ、明方などの服を上張歩行し給ふ故に道服と云。其上張の妻の地に引を折てはさみ給ふ故、服折と稱す。服は身に服る衣の惣名也。吳服をクレハと云も、禽の羽翼をハと訓も、みな身に被もの稱なり。羽二重と云も、御召絹の念を入れて、恒の絹を二重合せ織しごとき絹と云稱にて、服二重なり。献上に八反掛の名有がごとし。端折羽織の諸説多けれど信用し難し。

(東廬子三の一六丁)

小寺清之が『老牛餘喘』中三にも、「ハヲリは羽折にて、……もとは常の衣を裾を内に取上て、腰のあたりにて折て着たるをいふなり。今も田舎の婦人はしか



するものあり。羽は衣のことなり。長白羽神と申名の詞も衣の事なり。鳥の衣を羽といふも同じ。世に人の歸らむとして、衣をととのふるを、ハヅクロヒといへり。かの裾を内に取上て、腰のほどにて折て着たるよりはじまりて、後には衣の裾を切たるが、今の羽ヲリなるべしと思ふはいかに」といへり。

此の他、高橋残夢の『國字定源』上の一に、「羽折此名、折居の二義有。いづれにも國字はヲ也。俗に羽織と書は誤り也。名義は『名義考』にいへり」とあり。されど、未だ『名義考』を見ることを得ず。

### 三 ハフリ

伊勢貞丈 羽織の事、古は胸服といひし也。其たけ短くて胴斗をおほふ故の名也。後に是をハオリと云也。又道服といふ物あり。是は公家衆の用ひ玉ふ物なり。胸服と

也。たとへばつなぎたる物の、はなる、やうの事をハフリカスハフリといふ也俗語にハフリナゲル・ハフリカケルなどといふも同じ詞也。胸服をハフリと云も、上より帯をせずしてはふりかけて着る故、ハフリと云也。それを、詞にはハオリといふ也。ハフリカケル、放掛ハフリカケの字なり。帯にておさへずして放ち着にさるゆるの名也。羽織の字は詞に付てあて字にしたる也。編者いふ、貞丈雜記(三の五丁)安齋隨筆(故實叢書本八の二五六頁)にも同意の説を載せたり。

(四季草秋、衣服の部)

瑞 保己一も『武家名目抄』故實叢書本卷一八の一九一〇頁に「羽織は即前に見えたる胸服のことなり。はふり懸て着するが故ハフリといふ。ハフリをなだらかにいへばハオリのごとくいひなさるる故、字訓を假借して羽織と書るなり。『太閤記』に竹中半兵衛尉のことを記して、「餅の付たる青黄の木綿筒服を長々と打はふりゆらり」と打見えしな」とあるにてもおもふべし」といひ、

は別の物也。裝束拾芥抄などに見えたり。

或説に、羽織は昔し異國より鳥の羽にて織たる服を渡したるを、其形に似せて裁縫したる物なる故、羽織と名付るといへり。是は羽織と文字に書に付て造り出したる妄説也編者いふ、後頼の俊秘抄(歌學文庫二の四〇頁)に、「此けふの細布といふ事は、是もみちのくにのおくに、鳥の毛して織りけるぬの也。はたばりもせば、ひるもみちのくにのうへにきる事はなくて、小袖などのやうに、したに着たるなり。されば昔なばかりかくして、むねまではかゝらぬよしを詠む也」とあり。さては羽毛を布に織り込むこと古くありしにや。参考のために抄録せり。羽織と書くは詞に付て、あて字に書たる也。

實はハフリと書て、詞にはハフリといふ也。アフヒと書て詞にはアフヒといひ、アフグと書て詞にはアフグといふと同例也。

ハフリと云は放字也。『つれづれ草』に「そのこむまごまでははふれにたれど云々」『源氏』若紫の卷に、「心にまかせてはふらかしつるなめり」又赤石の卷に、「かくながら身をはふらかしかふるにや云々」これら皆放の字

喜多村信節の『筠庭雜考』百家説林續編下の一の四九二頁にも「ハフリは放散の義。帯をせず放ちて着る故の名也。羽織のよしにはあらず」と記し、田中尙房も『歴世服飾考』故實叢書本卷の六五頁に「羽織。ハフリは放ち著る故名づく」と云

貞丈氏の説に隨ふべし。然るに羽織とかきては假字違ひて心よからねど、フのオにきこゆるより誤りしものなれば、俗傳に隨て羽織の字を用うるなり」といへり。大野廣城が『青標紙』の説また貞丈に同じ。

また土肥經平の『春湊浪話』存探叢書本中の八丁に、「羽織といふ名をよぶ事をもさまゝの説あれども、さも有べしとおもふこともなし。昔に打かけとよびし名のるひにて、衣服のうへに打はをるといふことより、羽織といふなるべし」とあるも同意の説ならむか。

田沼善一の『筆廼靈』前篇の三七條に「今の羽織と云物も、又ひたゝれのなごりにて、是は其下をすて、裾の方をし



めずして、放り置き、胸紐を以て脱ざらむ様に結び置、  
脱も着るも便利に爲たるなり」といへり。氏が假名遣  
説、また貞丈に同じきなるべし。

### はこえ

山岡俊明の『類聚名物考』第四冊の、四九九頁に、「はこゆる はこ  
ふる 『清少納言記』ハ「三十ばかりなる女の、つぼ装束な  
どにはあらで、たゞ引はこへたるが云々」『春曙抄』「はこ  
えは引あげたるなり」○思ふにこの抄は誤なり。今衣紋  
者の詞にハコエといふ事有るは、すそを引あげて、はとちら  
ぬやうにする事なれば、さもいはるべけれども、その本は引  
上る意にはあらで、衣のすそなどのかいひろがらぬやうに、  
はこにかいかいつくるふをいふなり」といへり。

物集高見も『日本大辭林』に「はこふ 衣などをかきぐるをいふとぞ。この假字  
ユカフかきだかならず。語」と注し、落合直文の『ことばの泉』  
の意もいかにぞやあり。」と注し、落合直文の『ことばの泉』  
にも「ひきはこゆ 衣裳などかきぐることなりといふ。なほハコフを見よ。」と注せり。但し  
にハコフの語を脱せり。

この語の活用かくハ行なるかヤ行なるか詳ならざれば名  
詞として用ゐる場合もいづれの假名遣なるか明ならず。

谷川士清は『倭訓栞』に、「はこえ 袍ウシロの後の袋をいふ  
といへり。或は宮衣と書り」とてエの假名とし、清水濱臣  
は『語林類葉』にハコへと記せり。

### はずむ(反跳)

#### 一 ハヅム

一 谷川士清 はずむ 極るより轉せる詞にや。馬にい

へる事『平家物語』に見えたり。常に鞠などにいへり。

(倭訓栞)

#### 二 『俚言集覽』

はずみ ハヅミはハト飛義歟。ツミと  
トビは通ずる音也。『續無名抄』世話字盡「却合鞠ムハツ」  
『小町踊夏手鞠』「つかねども風のハヅマス手鞠かな高敷」  
『貞享節用集』世話詞「利ハツ」○利の字ハヅムの義にあ  
らず。○又『色道大鑑』言辭門「ハヅム 蹴鞠より出たる  
詞なり。言語座配にあらず。體利口のさて氣味よき貌なり。  
凡て機に乗ずる所に用ゆ」

#### 三 寺田長興

はずみ 極踏の略語成べし。  
(太津可豆衛)

本居宣長の『御國詞活用抄』第五にもツの假名を書  
せり。

### 二 ハヅム

はずむ(反跳)

#### 一 大石千引

御合 經進

(言元梯)

#### 二 小山田與清

はずみ 走進ハヒスの略語にや。『重之集』の  
下に「打かへし蹴のはずみにまみれつ、秋のたのみもな  
がからぬ世に」とよめり。蹴の刃に走進ハヒスをよせ、走進ハヒスに墨  
に塗れつとよせ、秋の田の實ミに頼タシをよせてよめる歌也。  
假名も墨によみかけたれば、必波須美と云べし。印本オシマキに波  
豆美ハヅミと書るはひがごと也。

(松屋筆記國書刊行會本第一の六二頁)

#### 三 大槻文彦の『言海』に「はずむ 弾ハツくに通ずと云」と

いへり。

橘 成員の『倭字古今通例全書』物集高見の『日本  
大辭林』落合直文の『ことばの泉』等いづれもズスの假  
名遣とせり。



はずる(外)

ハヅル・ハヅス

一 谷川士清の『倭訓栞』に「はづす 極すの義なるべし」  
 『はづれ 物の端をいふ。ハヅルル意也。』『下學集』に刻を  
 よみて絹布と注せり。又梢頭をいへり。『はづるる  
 『古今集』に糸とつゞけたり。極つるる義也。俗にホツレル  
 ともいへり』といへり。但し、はずの條に、「はず 弓に  
 礮といひ、矢に筈といふ。……○俗語カケハズシは弓より出  
 たり。『古事記』に「弭弓藏兵」と見えたり」といへ  
 るは疑はし。

二 大石千引

外ハヅル 端出ハイツ

(言 元 梯)

『俚言集覽』に「はづる 中リハヅレ。假字未考。

端出の義歟。……『節用集』「軾出。ヤリハヅス」とあり」といへり。

三 入江昌喜

はづれ 物の列にもれたるをはづれるといふも雅語なり。『枕草子』に后宮のうた「もとすけがのちといはるる君しもやこよひの歌にはづれてはをる」ハは離。ツレは連にて離連歟。

(久保之取蛇尾上の二三丁)

四 小山田與清

はづすといふ詞は物語におほく見えて、「とりはづして」などいへり。按にハナツのナを省きてハツといひ、それを體語にしてハヅス・ハヅシなどいふなるべし。恩地左近太郎聞書に「實ノ軍ヲバセズ勝ベキ圖ヲ外也」と有て、外の字をよめり。

(松屋筆記圖書刊行會本第一の二四五頁)

五 本居宣長

弭は波豆之と訓べし。此假字古書に見えたらねば、豆は受ならむも知らねど、姑く世に書きならへる

に従へり。なほ考ふべし。

(古事記傳全集第二の一八七五頁)

参考

岡本保孝の『古言梯補遺』はつすの條に『古事記傳』の説をあげていはく、『延寶年間山崎吉里と云もののかける『假名字例』に「はづるる 外。……」とあり。本居氏の「世にかきならへる」といふなるの一なるべし。しかれども『萬葉』の波自伎の事を引出らるときは波受志ならんもしられず。  
編者いふ、前に擧げたる古事記傳弭の訓の條に、「又波自伎とも訓べきか。萬葉十四に美知乃久能安太多良末由美波自伎於伎豆とある。是弦を弭し置くを云り」とあり。  
 假字の證にならねど、此詞『圓光大師行狀』世にいはゆる巻勅修御傳也 四十五に「左のこぶしを右のこぶしにてうたんにはずすまじさほどに云々おのづからはづる事もあらんずるとあり。又『枕草子』季吟本。五、廿四ウ「こよひのうたにはづ

はなわ(塙)

れてはをる」『宇治拾遺』七第一「狩人ども矢をはづしてみるに御こしの前に」又『同』九第四「きりはづし／＼つ追にして」『同』十三第十「またにはさみてはづさず」といへり。

はなわ(塙)

一 ハナハ

一 『俚言集覽』 塙ハナハ 塙を波仁不と呼べる氏族もあれば、波行の通にて波奈波の假字歟。猶考べし。

二 大槻文彦

はなは 山背の端の義か。山の差し出でたる所。

(言 海)

石川雅望(雅言集覽) 近藤真琴(ことはのその) 物



集高見(日本大辭林)落合直文(ことばの泉)笹村良昌(假字の栞)等、ハの假名遣とせり。

二 ハナワ

一 新井白石

東國の地名にハナワといふ所、こゝかしこにある也。方言にこそと思ひしかば、そこらの人に問ふに、山の鼻を廻る所を申す也といひし。後に清輔朝臣の『奥義抄』を見しに、陸奥武隈の松の事をしるして、「武隈のはなはとて、山のさし出たる所のあるなりとぞ、近く見たる人は申せし」としるせり。今も俗に凡物のさし出たるさを鼻といひ、まはれる所を輪といふなり。さらばハナワといふは、岬讀てサキといふものとぞ見えたる。

(東 雅活版本一の五七頁)

谷川士清も『倭訓栞』はなに「鼻回の義也。山鼻な

どいふ名義も同じ」といへり。但し『同書』はなば

の條に、「はなば 山のさし出たる所をいふとぞ」とあり。ワバ通音にて、何れを書くも差支なしとの説なるべきか。

また山岡俊明も『類聚名物考』第二冊の六二〇頁に、「慶長の頃塙圍右衛門といふ者有り。これを一にはツ、ミと訓、或はハナハとよめり。その語古へはさかぬ事にて、意もあきらかならねど、塙といふ字によりて思へば、堤の出ばりたる崎の所の灣になりたる所をいふか。俗に四海などのまがりくれて、入こみたる所を、すなはち入といふ。それは古へ志賀の大わだなど歌にも讀しものにて大灣なり。さらばそれにむかへて思ふに鼻灣なるべし」といひ、寺田長興も『太津可豆衛』に鼻回の義とせり。

二 小山田與清

塙の字をハナワと訓て、大坂の勇士に塙圍右衛門あり。これは音便にバンともいへり。鹿島神宮

の大宮司に塙氏あり。塙保己一檢校など皆同稱にてハナワといへり。

『類聚名義抄』法中土部に「臺壇壇壹壇拾塙七谷下雲字タカシ

々」『字鏡集』四土部に、「塙拾同・壇同・壹同・臺同・壇同・壇同云々」

『倭玉篇』中土部に「塙タカシ云々」など見えて、ハナワと訓る古證なし。

『重之集』下雜十首の中に、「たけくまのはなはに立る

松だにもわがごとひとりありとやは見る」一本にきくと有。又同卷

たけくまの松一もと枯にけり。「たけくまの松も一もと

枯にけり風にかたぶくこゑのさびしさ」「年をへてたれを

まつとか武くまのときはにのみはいかてたのまん」此次

の歌のときはを一本にははなわとあり。『空穂物語』初秋の巻に

「たけくまのはなわの松はおやも子もならべて秋の風はふかなん」

『奥義抄』中卷『後撰集』の釋の條に、「此松はむかし

よりあるにはあらず。宮内卿藤原元能といひける人の任に、館の前にはじめてうゑたる松也。みちのくにの館は、武隈といふ所にあり。此人ふたゝびかの國になりて、後のたびよめる歌也。武くまのはなわの松ともよめり。重之歌云「たけくまの云々ありとやはさく」武隈のはなわとて山のさしいでたる所のあるなりとぞ、近く見たる人はまうし、云々」

『袖中抄』十六卷武くまの松の條に、「古歌云「われのみや子もたりといへば武くまのはなわに立る松も子もたり」『拾遺集』云「われのみやこもたりてへば高砂のをのへに立る松も子もたり」云々按にハナワと尾上は似たる所をいふなること、此二首の歌をかうがへ合せてしるべし。

今云、宮城野・武隈はなは館はひとつ所也云々」『歌林良材』下卷に「武隈松事。古歌「われのみや子もたるといへば武隈のはなわにたてる松も子もたり」右奥州たけくまといふ所に、二木の松あり。これによりて子もた



るともいへり。はなわとは山のさしいてたる所のあるをいふなり。云々』

『藻鹽草』三の限部。『奥羽觀迹聞老志』五の名取郡部等の 說亦同。『和歌名所追考』百六の陸奥名取郡部に、『武隈 塙 或は準輪。山のさし出たる所を云。則 塙と云在所もあり。今は植松といふ云々』……

與清按に、ハナワのハナは、『源有房集』に「かすみたつゑしまのはなを見わたせばたみかへしたる心ちこそすれ」『神名帳』に遠江國濱名郡部に「猪鼻湖神社云々」『更級日記』に「遠江のゐのはな坂云々」『後鳥羽院熊野御幸記』に「紀伊の猪鼻云々」『北國紀行』に「武藏のちやうのはな云々」編者いふ、頭書に、旅宿問答(一丁ウ)に「武藏ノ廳アリシニヤノ鼻和」ト云地アリ。廳ハ在廳アリシ處也。上巻ニモト記セリ。 など皆ハタの通音にて端也。ワは回にて浦回(廻)回などおなじくいり曲たる所をいふ。されば端回の義なれば、假名も波奈和と書べし。

江戸の高繩タカナハは高さ處の繩手道にて、高繩手の義。古き合戦の書どもにも、高繩と書たるがよろしきを、今高輪と書は誤にて、端灣ヘナワとは別也。

(松屋筆記圖書刊行會本第一の三三四頁)

『俚言集覽』にも、「端廻にて岬の如き出崎の地を云。浦廻など云に同じ」とあり。但し、初に擧げたる説のしたり。思ふに別人の注せしが如し。

### はぶたえ(羽二重)

#### 一 ハブタへ

一 谷川士清 はぶたへ 光絹をいふ。羽振ハネの義なるべし。衣服を白羽といふは、『古語拾遺』に見えたり。吳羽穴羽の二を重ねて、羽二重と名くるよしいへるはいかゞ

侍らん。

(倭 訓 栞)

二 狩谷望之 『倭名類聚抄』に「帛。『説文』云帛。蒲角反。俗云波久乃岐奴」とある條に注して、「今俗呼羽二重者蓋此類。或羽二重是帛袴之訛轉」と『箋注倭名類聚抄』卷三の九五丁にいへり。

三 邨岡良弼 絹布の名に、羽二重といへるは、埴生帛ハブタの假字なるべし。古へ布帛を總て多徹タテといふ。荒妙アラカサ和妙ワカサ照テ多倍タヘ明多倍アカルタヘなどいへるにて灼焉イナシし。古事記傳に、今、古衣をフルテといふも、フルタへの約れるなり。 望陀布アツマエフ東木綿アヅマユヅ唐綾アヅマユヅ高麗錦などの例にて、其物を織出す地名を冒して、埴生帛とは呼し者なるべし。

さて埴生郡は、上總下總の二國にあれど、埴生郷と云は、駿河に多かれど、是下總の埴生郡に、羽取郷印本の倭名抄に、酢といふ名にあらじ。が、ありて、今は羽鳥と書き、南北二村に分れたり。羽取羽鳥みな機織の假字にて、服織部を置れし故の名と知られ、古語拾遺

に「好麻所生故謂之總國。穀木所生、故謂之結城郡」とありて、今も結城紬として、織物に名高ければ、此國には早く紬織の業の開けんことも思合せられ當時紬織オリモノの盛なりし事も推量れて、此郡の名を負したるものなるべくおぼゆ。『和訓栞』に、「羽振妙の義なるべし。衣服を白羽といふ」とあるは、いまだしき心持す。吳羽穴羽の二を重ねて、羽二重と名づくるよしいへるは、甚しき妄説にて、論ふにも足らず

(如蘭社話一の二丁)

この他、貝原好古の『諺草』益軒全集卷之三の八〇三頁に「光絹。はぶたいは誤」と注せり。

また田宮仲宣の説あり。はぶり(羽織)の條なる同氏の説を見るべし。

#### 二 未定

『俚言集覽』 羽二重 俗に羽二重と書り。假字未詳。羽二重の義ならば、波布太閉の假字なり。然れども、二重の義にはあるべからず。



● 参考

黒川真頼の『工藝志料』全集第三の四二二頁に、『寛文五年二三年二徳川家綱令して、絹繩の長さを定め、二丈六尺を以て一端となさしむ。此際京師・堺及美濃・加賀・丹後の織工、盛に好絹を織り出す。就中京師及堺に製する所のものは、殊に佳なるを以て、人稱して羽二重といひ、美濃・加賀・丹後に於て製する所のものは、稱して撰絲セシといふ。而して羽二重と撰絲と、其の製別なるにあらず』といへり。

ひいな(雛)

一 ヒヒナ

一 契沖 『和字正濫要略』二九に「ひいなあそび」此

假名いまだたしかなる證を見ず。又眞名はましてしらず。

『齋宮女御集』に「うちにおはせし時ひいなあそびに云々」

又「おなじひいな社の前の河に紅葉ちる處にて云々」又

『中務集』中宮のひいなあはせに、かはらのかた、すはま

につくれり。ひいなひいなのくるまのなぬか「たなばたもけふは

あふせと聞く物をかほとばかりや見て歸りなん」又云、

れいけいてんの女御、中宮にたてまつれ給ふひいなひいなのものに、

あしてにて「しら浪にそひてぞ秋は立ちぬらしみぎはの声

もそよといはなん」俗本の假名は證としがたけれど、これ

ら一同に皆ひいなひいなとかき、又ひいなともあれば、是を引。

俗書にひいなと書、眞名は雛の字を書けり。最負の音は

ヒキなるを、音便にヒイキといふごとく、ヒナの音便もヒイ

ナといへるかと思へるにや。假名にはさることなし。

鳥のヒナをいふ時、ヒ、ナといへることは見及ばねど、ヒ

と聞えてなく物なれば、ヒ、ナヒ、ナキを略してヒ、ナといひ

り。『崇神紀』比賣那素麻ヒメナソマ殊望シズモの釋に、『私記』曰言不知殺逆之謀爲兒女之遊。今案比々ヒヒ奈遊ナユとあり。是かなの證といふべし。

又『古本うつ保物語』藤原君に「すを出てねぐらもしらぬひなとりも、なぞやくれゆくひよとなくらむ」と有にて、ヒ、となく物故にヒ、ナと云ことわりしらる。

(假字拾要)

三 山岡俊明

『類聚名物考』第四册のひなあそびの條に、

『雛の屋』『源氏』『齋宮女御家集』『紫式部日記』……『う

つぼ物語』にもヒ、ナと有り。『源氏』『枕草子』にはヒナ

とのみいへり。……『台記』久壽六年「比々奈遊」と有り。

『江家次第』立太子の所「比々奈」と注せり。

石川雅望(源注餘滴國書刊行會本一四二頁) 小山田與清(松屋筆記

國書刊行會本第一の四七二頁)は『釋日本紀』に引ける『私記』の文に

より、春登(假字音便撮要) 喜多村信節(嬉遊笑覽存探叢書本第一)

て、それを猶略してヒナといふにや。ヒ、ナをも俗にはヒナとのみいひ、『齋宮女御集』ひなやしろとあれば、互にヒ、ナともヒナともいふべきにや。

鳥のひなは、ちひさういたいけしたれば、装束かたなどをも、ヒナガタと云。これを思へば、ヒ、ナも屋形・人形より、よろづちひさういつくしさをヒナに名たるにこそ』といへり。圓珠庵雜記七八丁にも同意の説あり。

楫取魚彦が『古言梯』にも「ひいな 鳥の子のヒ、と鳴音もて名づくるなるべし」といひ、

谷川士清(倭訓栞ひなの條)の説また同じく、小山田與清

も『擁書漫筆』四の二に「鳥の子のヒ、となくより雛

の子とよぶ」といへり。

『俚言集覽』にも「ひいな 雛を訓、俗にヒヨコと云。ヒ、もヒヨも聲也」といへり。

二 村田春海 ひいな 雛なり。『古言梯』證をもらせ



三五丁)は『私記』『江家次第』等の訓によりて、ヒ、ナ  
の假名遣とせり。

此の他、市岡猛彦の『雅言假字格』加茂季鷹の『正誤  
かなつかひ』清水濱臣の『語林類葉』清水宣昭の『紫  
式部日記釋』<sup>四の二</sup>岡本保孝の『言靈』<sup>五二の二</sup>近藤真琴  
の『ことはのその』等またヒの假名遣とせり。

## 二 ヒイナ

本居宣長 人の形をちひさく作りて、わらはのもて  
あそぶ物を、物語ぶみどもにヒキナといへり。これはち  
ひさくつくれるを、鳥のひなになすらへていへる名にて、字  
も雛とかき、今の世の人もヒナといふを、ふるくヒキナとし  
もいへるは、詩歌をシイカ、四時をシイジ、女房をニヨウバ  
ウといふたぐにて、ヒもじを引ていふなれば、假字はヒイナ  
と書、へきをキと書るはたがへり。

(玉勝間全集第四の二四九頁)  
岩瀬醒齋は『骨董集』<sup>百家説林續編</sup>中の五三一頁に、『玉勝間』の説  
を引きて、『ちのれ此説によりてしばらくヒイナのか  
なをもちふれども、『釋日本紀』<sup>卷二</sup>比賣那素寐の釋に  
引る『私記』のことばに、「比比奈遊」とあり。『江家  
次第』<sup>卷十</sup>立太子の條にも、「比比奈」とかける古例あ  
れば、ヒ、ナとかくもわるさにはあらざるべし。  
されどヒ、と鳴義とさだむるときは、ヒ、ナは本な  
り。ヒナといふは略言にて未なるに、鳥の子をヒナ・ヒ  
ナ鳥などはいへれど、ヒ、ナと物にかけるをいまだ見  
あたらず。ふるさきものにも人形のたぐひ、すべてちひ  
さくつくれる物のみを、ヒ、ナとかけるは、末を本とせ  
るに似たり。  
又人形のたぐひをヒナとつとめていへるも、ふるさ  
物にはすくなし。たま〜『齊宮女御集』<sup>卷下</sup>に「ひな

社』とあれど、契沖師の校本を見れば、古本には、「ひ、  
なやしる」とあるよしにてひさなほしたり。又『御  
堂關白御集』のことばがきに、「たかまつのさみの御  
もとより、ひなやまゐらせ給ふとて」とあれど、下の  
詞がきには、「わかみやの御ひ、なやに云々」とあ  
れば、上にひなやとあるはちほつかなくぞおぼゆる。  
かく末を本にせるにて、ヒ、ナのかなにもうたがひな  
さにあらず。

又ヒ、となく義とせる説をやぶりて、『和名抄』に比  
奈とあるを本の名とせんときは、『玉かつま』の説の  
ごとく、ヒもじをひきていふなれば、ヒイナのかななら  
まし。

おのれがおろかなるころには、いづれをよしとも  
さだめがたし。なほたしかなる證のいてくるをまちて  
あきらめてん。今おほくはヒ、ナのかなをもちふれ

## 三 ヒヒナ・ヒイナ

此の他、橘 成員の『倭字古今通例全書』笹村良昌の  
『假字の栞』等イの假名遣とせり。

物集高見の『日本大辭林』落合直文の『ことばの泉』と



もに、ひいなひひなの兩條に出せり。

四 未定

大槻文彦 『言海』ひいな條に、「ひひなの條を見よ」と注し、ひひなの條に、「ひひな 雛 鳥の子は小く愛らし。此戲玩皆小き物を用れば名とすと云。但し鳥の子はヒナとのみいへり。上のヒ心得難し。『崇神十年紀』の歌に比賣那素寐とあるは、姫之遊の約にて、雛遊の事なりと云。さらば姫雛の略にてもあらむか。或はヒイナ(ヒキナは非なり)ともあり。ヒナの延なり。それと混じたる語か」といへり。

ひおりのひ(近衛の眞手番の日)

五日を、ひおりの日といふ」といひ、

藤原清輔の『奥義抄』歌學文庫本、一〇九頁にも「右近の馬場のひをりのひ、まゆみのまて結の日也。五月五日也。此日は、かちのしりをひきをりたれば、ひをりのひとは云也とぞ、秦 兼方編者いふ、袖中抄に引けるには下野武忠と記せり。は申けれども……」と記せり。

顯昭も『袖中抄』歌學文庫本、一頁に、「五月三日は、左近のあらてつかひ也。四日は右近のあらてつかひ也。五日は左近のまてつかひ也。六日は右近の眞手結也。荒手結の日は、いての近衛舍人、水干ばかまにくしりをあげて、裾カサのしりを女の中ゆひたるやうに引出して、其上にむかはさを結也。眞手番の日は、紅の下のはかま、あり物のさしぬきに、くしりをあげず、そばをはさみて、裾の尻を、はぎより前さまに、引たをりて前にはさめり。されば此眞手番の日をひおりの日とは云也。女のひ

ヒヲリノヒ

一 秦 兼久 藤原範兼の『和歌童蒙抄』國文注釋全書に本、六一頁に「ひをりの日と云、ことは、ふるさうたがひなり。兼久編者いふ、袖中抄(歌學文庫本、二頁)に引けるには秦の兼久とあり。は、まゆみいむとするときに、かちのしりをうちさまにひき折てはさむを云なりとぞ申ける」『伊勢物語知顯抄』續群書類從卷五、二下の四四丁に「うこんのばばとはさたののまへにて、さたのまつり。はかのところにてするなり。たとへばこのことは、五月三日より五日まで、三がにちのまつりなり。三日をばあらてぐみといひ、四日をばまてつかひといひ、五日をばひをりの日といふなり。そのゆへは、五日の日のゆみのしゆのきたるかりごろものしりを、かちかふりといふ。かちのしりをとりてひきありかへし、ひだりのわきにはさむなり。たゞのときはすこしもかへさじとするものを、わざとかくひきありかへすゆへに、かのところは五月

ありといふは、きぬをしたさまに引つぽる也。荒手番の日、裾の尻を、女の中ゆひたる様に、はこひをあらせて、かみへひきいだしたれば、ひおるとはいふべからず。荒手結の日は、射ことのならしにてかりそめなれば、ひきつぽをれり。眞手結は、射手もさだまり、次第をもたてつれば、事したまり、つよくひきたうさくなり。而を近代は、只眞手番の日も、水干ばかまにて、引折て荒手番の日と同じ様なれば、いづれの日をひおるといふべくもあらぬによりて、今の世の人、此ひおりの日をしらぬなり。左近のむまばのひおりの日と云は、五月五日也。右近の馬場のひおりの日と云は五月六日なり」といへり。また、藤原定家の『僻案抄』經濟雜誌社本羣書類從に第一〇輯の六〇二頁に「まゆみの手結に、とねりども、まさしく裾を引折てきたるを、ひをりといはん、たがはず聞ゆ。荒手結にもおなじすがた



なれど、あら手つかひは、かたのやうなる事にて、まてつかひをむねとしたれば、此事當りてきこゆ」といひ、契沖も『古今餘材抄』國文注釋全書 本二四四頁に顯昭の説をあげ、「ひをり」は引折なり。引板とかきてひたとよむがごとし」と云ふ、

田沼善一も『筆廼靈』前篇の三五條に「次に出せる畫は、年中行事の畫に出る所にて、先鳥居ありて、それより埒を作り始めて、其終の方に馬にのれる人居り。埒の中を走らして行人もあり。いはゆる走馬と覺えたり。馬には美さ下鞍をかけたなり。馬にのれる人の衣は、常に隨身の着る褐なり。其尻を内様に打かへせり。是『袖中抄』にひをりの日と云事を説くとて褐の裾を引折る事を云へるはかく爲るなり。惣て褐にても何にても、一重なるを折て二重にし、短かからしむるをば引折といへる事なり。『今昔物語』廿九の廿八語に「中將泣

々起テ衣一計ヲ引折テ竊ニ其教ツル遣戸ヲ出テ」などもあり」といへり。此の他、

本居宣長も『玉勝間』全集第四の一三二頁に、顯昭の説を「さもと聞えたり」といひ、藤井高尙も『伊勢物語新釋』に、「袖中抄」の説を是認せり。然るに、

藤原範兼は、『和歌童蒙抄』に、前に挙げたる兼久の説をあげて、「但、いづれの日もさこそはすめれば、これひが事にや」といひ、藤原清輔も『奥義抄』に、兼方の引折の説をあげて、「あらてつかひの日も引をれり。おぼつかなし」といひ、共に引折の説を排せり。また、

賀茂眞淵の『伊勢物語古意』全集第四の三六一九頁に「顯昭などの説に、五月五日六日に、近衛の舍人の乗馬の事をいひて、六日には、褐の尻を前さまに引折てのる故に、ひをりの日と云といへるは、いとやさかなる由にて、日

になづくべくもあらず。且此日は、此馬場編者いふ、右近馬場をいふ。

にてもなきをだに考へぬほどの事なれば云に足す」

『右近の馬場は、一條京極の末に在よし』『拾芥抄』にいへるも是なり。或説に、これを五月六日の右近衛の眞

手結の事といへど、其日なるは、内馬場にて行はれて、

武徳殿に行幸有なれば右近の馬場にての日は他日なる

事明らけし』などいへり。本居宣長も玉勝間に「五月六日の騎射は大内の馬場にてこそあれ。其日

左右近衛の馬場にてある事は、いづれの書にも見えず」といへり。

二 賀茂眞淵

昔右近馬場之射禮日。

こは世に難き事

とて、云説あれど、猶わろければ、年經て思ふが中に一二つ侍りし。右の一つは、

先馬場の埒をば、ひをりと云べし。引はへて長さ柵なれば、引柵の意なり。さて此古本編者いふ、眞名伊勢に、射禮日と書たれば、騎射の日なるを知べし。此事有には、必埒をゆひて、それが中にて馳れば、其日を、其比の語に、ひをりの日と

はいひしなるべし。『萬葉』に馬柵をウマヲリと訓たるは、

馬をこめおくをりなり。編者いふ、萬葉集卷四の二〇丁に、「赤駒之越馬柵乃」とあり。但し傍訓ウマオリと記せり

是に准らへて、馬場の埒も馳る馬を、左右へはぶれざらしめ

を料にて、引はへゆへれば、ひをりといふべき物なり。引を略

ひとのみいふは、水田の引板をひた。盗人の引割をひはきといふ類猶多し。又ひとつは、

埒をたどをりとよみ、右に同ひは標の事か。貞觀・延喜の

式などを考るに、競馬には、必馬場の埒の末に、馬どもの標

をたつめり。然ばくらべ馬ある日を標埒の日ともいふべき

なり。標をヒと云は、字音なれど、すでに寛平・延喜の比となりては、當云語には、音訓打ませていへる事多かりしなり。且標をばぶきて、ヒとなふるは、標位をヒイと云が如し。

(伊勢物語古意全集第四の三六一九頁)

本居宣長は『玉勝間』全集第四の一三二頁に「師の考へには、ひをりを引柵または、標柵ならんといはれつれど、馬場の埒をヒヲリといへること物にも見えぬ、又しかいふべくもあはれず。まして標をヒといへることなし。



又標を立てばとて其日を標柵の日とはいふべくもあらざれば、此説も二つともに取がたし」といへり。

三 橋 守部

京極の末を、右近馬場といひ、その東の方を、左近馬場と云と『拾芥抄』に見えて、此は誰もしる處なり。さて此左右の馬場にて、五月三日より兩日づゝ、競馬騎射を行ふ事は、五日・六日、大内の馬場におきて行せらるる競馬騎射の下ならしを、ならし試みらるるわざにぞありける。……京極の馬場にて、兩日づつせらるゝ下ならしは、三日左近の荒手番、四日右近の荒手番荒手とはあら試みにて、此塗を荒打と云荒の如し。番とは、乗手と射手とを合せ番、義なり。五日左近の眞手番、六日右近の眞手番眞手とは、右の荒手に對へたる言にて、俗にほん試みと云んが如し、〇編者いふ、五日・六日に右近・左近の眞手番あること。及び荒手・眞手とは、あらこころみ・本こころみと云義なること。眞淵・宣長が五月五日六日の競馬騎射は大内の馬場にて行はれ、左右近衛の馬場にてあることなしといへる説の非なることは、早く藤井高尙が伊勢物語新釋(六の一八丁)に辨じたり。なり。此眞手番の日をひをりの日とぞいふなる。……

さて此の眞手番の日を、ひをりの日といふは、俊賴朝臣の

うたに、「ながさねも花の袂にかをるなりけふやまゆみの

ひをりなるらむ」これ五月五日によめるなれば、左近の馬場の眞手番の日を指るなり。又『今昔物語』に「今はひかし、右近の馬場に、五月六日うま弓行ひけるに」とある。こは、右近の馬場の眞手番の日を指るなるに、其日を共にひをりといへるにてしるし。されば此ひをりてふ言の意は、彼荒手番の日に、既に一日試みたるわざを、二日眞手番の日に、再び折かへして、試みらるゝより云て、日折の義なるにやあらん。其は舞を一さしまひて、又再び舞ひ返すを「折かへし舞ふ」といひ、歌を一たびうたひて、又再びかへしうたふを「折返しうたふ」と云詞の例と同じかればなり。又節折マサと云も、天皇のみたけをととりて、御形代ミカサシロにうつすを云なれば、節は竹の節、折はこれも折かへす意なるべし。又『書紀』に、三度をミヨリ、六齋日をムヨリノイミなど訓るヨリも、ヲリと同韻にて通ずれば、時々を時々と云が如し。猶折返す意と聞

ゆ。編者いふ、此の日折の説に似たる説はやくあり。参考(三)の條を見るべし。

(難語考 三の五二丁)

『再版日本社會字彙』上巻の九に、守部の説をあげて、

「此説正しとすべし」といへり。

● 参考

一 藤原範兼の『和歌重蒙抄』國文注釋全書本六一頁に「あるやうごとなきひとのありけるは編者いふ、袖中抄に引けるには、「あるやむごとなき人のありければ」とあり。左近馬場の南洞院よりは、ひんがしにひき入りたる處有。そこを日をりと云也。さらば左近とかくべきを、右近とはかきあやまてるにや。編者いふ、古今集戀一の詞書に、「右近馬場のひをりの日」とあるを以てなり。

業平が手づからかみやがみにかける『伊勢物語』の朱雀院のぬりごめにありけるには、只「右近の馬場の日むかひにたてりける女のかほ下すだれよりほのかにみえければ」とぞかけりける。されば「日をりの日」とかさあやまてる

にや」

顯昭の『袖中抄』歌學文庫本、三頁に範兼の説をあげていはく「洞院より東は、人の家を引いてつくりたること一定也。ずいじん秦 兼成が家も、それにあれば、入彦の府生と申けり。さらむからに、そこをひちりといふべきにあらず。たとひひちりといはんからに、それによりて、ひちりの日といふべきにあらず。あらてつかひも眞手番も、一日はあなじく右近馬場にてあること也。又業平が自筆の本に、ひちりの日とはかゝぬこと、これも世の人申事也。さればにや、『古今』にも『伊勢物語』にもひちりの日と書ぬ本もあれど、つたへある證本どもに、みなかゝれたればひがこととおもふべきにあらず。又業平がたとひかかずとも、『古今』にかゝれんもかたからず」といへり。

二 秦 兼盛の説として『袖中抄』歌學文庫本、三頁にいはいく「日より



の日と云事を、ひぢりと申したりと云義侍り。たとへば、雨などのふらんに可延引心と云々』

三 藤井高尙の『伊勢物語新釋』六の二に曰く「高尙、一とせよさくすしに、やまひをつくるはすとて、都にまゐりをりける頃、これかれこふまゝに、此『いせの物語』をかうさくしけるを、あまた來つどひてさく人の中に、崇須法師といふ人のありて、それがいひけるやう、「ちのれはやくあづまのかたにゆきけるに、尾張の國中島の郡のあたりにてひをり男とよぶ男あり。さよぶはいかなるゆゑぞととひけるに、そこの人のこたへけるは、めしつかふ男の、ひと日こゝもとにつとめては、ひと日あだし家にゆきてつとめ、かくしつゝ月のうち十五日つとむるをいふ也とこたへき。ゐなかに、おのづからにふる言をつたへていふものなれば、右近の馬場のひをりの日も、それにやあらん」といへり。これもむげにあしくはあらぬ説也。此説によらば、左右

近衛の馬場にて、一日かへにある事なれば、五月六日を右近の馬場のひをりにあたれる日といふ心にてかけりとすべし。されどその日をりにては、六日の眞手番にはかぎらず、四日の荒手番をいふべきなれば、その日とさだまらずして、まぎらはしきかさまにぞなりぬべき。又俊頼朝臣の「ながさねも花の袂にかをる也けふやまゆみのひをりなるらん」と五月五日によまれたるをも思ふに、ひをりは眞手番にかぎれる事とおもはるゝがうへに、「ま弓のひをり」とつづきたるも褐のしりをひきをるかたにちかくきゝなされて、おのれは崇須の説よりも、なほ顯昭の説にぞ心ひかるかし』

四 伴 信友は、『比古婆衣』百家説林續編中の二三三頁に『伊勢物語』『古今集』に「右近のうまばのひをりのひむかひに……」とあるを、「右近のうまばのひ、をりのひむかひに……」とよみ、説をなして曰く、

『藤原範兼の『和歌童蒙抄』に「ひをりのひとは、古き疑ひなり。云々。業平がてづからかみ屋紙に書ける『伊勢物語』の、朱雀院の塗籠にありけるには、只、右近の馬場の日、むかひにたてりける女のかほの、下すだれより、ほのかに見えければ。とぞ書けりける。されば日をりの日とは書あやまてるにや」としるされたり。然るに、今の世に、朱雀院塗籠御本の寫として、傳はれる本には、件の文、今ある本ともとまたく同じ。範兼卿の見て引給へる本とは別なり。

さてその朱雀院なりける御本、まことに業平朝臣の手なりけるにか。そはいかにまれ、そのかみ後院に置れたりつる御本にて、古き一本なり。そもく此物語には、まことに異なる本どものありて、とりつゝにみえきたれるは、この本書のいまだ草本にてありけるほど、これかれに寫傳へたるが、世にひろごりたるもあるべく、又後人のとりなほして、寫しつたへたるもあるなるべし。

さて『伊勢物語』を讀て、つら／＼かむがふるに、此原書は、業平朝臣のおもふこゝろありて、身のおこなひを放縱にして、わざと有しことも、あらましごとをも、心のおもむくまに／＼、みづからかき記されたる歌集のごときものありけむを、後人の詞を加へ、或は改めなどし、又さらに業平朝臣より、後の人の古歌をさへにとりて、詞がきをまねびてつくりそへなどして、おもしろかるべく作りなしたるものなるべし。

また『古今集』に業平朝臣の歌には、多く詞書をこまかに長く記されたるが、この物語とおほかた同文なるは、其原書の歌集よりとり載られつるが故なるべし。然らば、此右近馬場の歌も、その集よりとりて載られたりつらむを、其は『童蒙抄』に記されたる塗籠御本の『伊勢物語』のごとく、しるしてありけむを、さては上に車といへる事なくて、うちつけに「下すだれより云々」とては、詞たらざるがこ



とききこゆれば、上に「車に」と云ふ詞を加へ、又その上にも、詞を補へて、「右近の馬場の日、をりのひむかひにたてたりける車に」と書ととのへられたりけるを、後に立かへりて、その詞書によりて、此物語をも直したりし本どもの、今の世には傳はれるものなるべし。……

さて右近の馬場の日は、五月六日の眞手番の時の事なるべし。をりはその馬場の柵にて埒ともいふものこれなるべし。但しなべては人にまれ、鳥獸にまれ、捕り籠めおく處はをりといへど、そはもと、其ものを放れざらしめむ爲に造れるものゝ名ときこゆれば、馬場にて馬を逸ざらしめむ料に、シメカマ標構へたる垣をもをりとは云べきなり。伊呂波字類抄に、埒をヲリと訓るも義通へり。○編者いふ、鳥獸をこめおくの假名遣明ならず。其の條を参照すべし。『相模集』に、男とよみかはせる歌の中に、「はなれにしこまのをりにも我ならぬ人をばえこそなづけざりけれ」とよめるをりも馬場の埒をいへるにて、男のうへを、馬のをりを放れたるにたとへたり

ときこゆるに、おもひ合すべし。『萬葉集』に「赤駒之越馬柵乃絨結師妹情者疑毛奈思」とある馬柵を、舊訓にウマヲリとよめるも、古の名なるべき。はたおもひ合すべし。この馬柵をウマセと訓る説は非じ。……

さて「柵の日向ひに立たりける車に云々」とは、柵に添ひて、日の射す方に向ひて、たてたる車なるが故に、日向ひといへる言は、萬葉集に、「高北之八十一隣之宮爾日向爾」このほか古書ともに見えたる言なり。日を負ひたる方より見れば、下簾の内へ、日光の射しとほりて、女の容貌の髣髴に見え透たるよしなり。右近の馬場は、南北行なれば、柵の東方の車中に、夕日さす頃のさま、ことによくかなひてきこえたり編者いふ、細注は多く略して、これを引けり。

五 齊藤彦麻呂は『勢語圖說抄』國文注釋全書本三六一頁に「ひをりの日とある、下の日の字は、衍字にて、「ひをりのむかひにたてたりける車の云々」とありしならむ。かゝらばひをりを引

### ひこじろう(牽)

#### 一 ヒコジロフ

足立稻直 ひこじろひ 『源氏物語』若菜卷に「遁んとひこじろふほどに云々」夕霧卷に「をしみがほにもひこじろひたまはねば、云々」など有て、ヒコは引なり。シロヒはつきしろふのシロフも同じ。たがひに争ふ意のある詞なり編者いふ、倭名抄毛群部に、「觥 説文云、觥、丁禮反。漢語抄云、豆岐之良比。以角觴物也」とありて、つきじろふの古き假名遣は、ツキジラフなるべし。

『古事記』神代條に、「比許豆良比」『萬葉』卷十三に、「曾朋舟爾網取繫引豆良比云々」とあるにより。又『書紀』に通をシラヒとよめる、其意も同ければ、こゝもヒコチラヒ・ヒコチラフと書べき理なれど、すべて『物語』どもに云るは、身じろくのシロクも同言とおぼしく、又ヒコジロ

柵にて埒をいふなるべし。あまりに深く考へ遠くもとむる時は、いささかなるたがひより、いみじきひが事と成行也。またひとつの考あり。「右近の馬場のひをり」と云切て、

「日向ひに立たりける云々」と言をおこしていへば、またよくきこゆる也。日に向ふ國を、日向國となづけられしこと、『古事記』『日本紀』及『日向國風土記』に見えたり。かゝれば日向といふ詞も、此頃はありしならむ」といひ、

六 荷田春満の『伊勢物語童子問』第七の一二丁には「日をりの日の事、舊記に所見なければ、文字の書誤りより、ひをりの日といふ事出来たとみゆる也。舊記に、古名目ならば有べき事の、なさは心得がたし。榻をひき折てさるといふ説信用にたらず。日の名に用べき語例なし。『眞名伊勢物語』には射禮日とあれど、ひをりとよむ事聞へがたし。『古今集』の古本みへねば、疑ひ残り」といへり。



ヒ、ヒコジロフ・ツキシロフ、ツキシロフ・キシロフ、キシロフ・イヒジロフ、イヒジロフに、編者いふ、萬葉集卷一三の二二丁の詞ども、「日豆良實」といふ語あり。も、皆「ロフ・ロヒ」と通て、こは當時の假字とおぼしく、かつはラリルレロの通音にてとかく論はんにも及ばざるべし。

(紫式部日記解國文注釋全書本一〇五頁)

山岡俊明(類聚名物考第四册の五〇八頁) 本居宣長(古事記傳全集

第一の六) 義門の指出龜磯(一五丁)に「古事記傳十一卷に源氏物語

〇一頁) などにヒコジロフとあるは、もと古事記にヒコヅラフと見えたる語の轉れるならん。もししからばヒコヅラフとかくべきかとの説あり」と記せり。されど古事記傳十一卷に、さる説見當らず。想ふに同

卷(全集第一の六〇一頁)比許豆良比の解釋に、引豆理を延べたる語なりとし。又源氏物語若菜上に「綱いと長く付たりけむを云々、逃むと

ひこじろふほどに」夕霧に「惜みがほにもひこじろひ賜は。鹿持雅

ねば」なども見ゆ。と記せるを思ひ違へて書けるなるべし。 澄(萬葉集古義活版本卷一 近藤真琴(ここのはその) 佐

藤誠實(語學指南五丁) 物集高見(日本大辭林)等いづれ

も、『古事記』『萬葉集』のヒコヅラフと同意の語と解

し、假名遣はヒコジロフとせり。またヒキシロフと同

意とせるは、はやく、

橘 成員の『倭字古今通例全書』に「ひこしらふ

挽擺ひこしらふ」と見え、賀茂真淵(源氏物語新釋全集第五

九) またヒキシロフと同語とし、萩原廣道も『源氏物語

評釋』七の三に「ヒコはヒキの轉、シロフは辭にて互

にする意也。ツキシロフなどのシロフに同じ」とい

ひ、落合直文(詞の泉)もヒキシロフの轉じたるものと

せり。

此の他、石川雅望の『雅言集覽』大槻文彦の『言海』

またヒコジロフの假名遣とせり。

## 二 ヒコヅラフ

清水濱臣 『語林類葉』に「ひこしらふ」『散木奇歌

集』「いなゝらばいひもはなたでもちつゝじやにかけたる

はひこしらへとや」と記せり。羣書類従本(經濟雜誌社本第九輯

の七九二頁)には結句「ひこしらへとや」とあり。

## ひじじかに

### ヒヂヂカニ

一 西三條公條 けだかさ物からひぢゝかに けだかく

て、然も人ぢかなるやうなる體もあるべし。又ひそやかなる心もあるべし。何れにてもあるべきなり。一本ひそびかとあり。ひそやかなる心歟。

(細流抄 國文注釋全書本、二一八頁)

ひぢゝか 泥土ぢかになるとなり。下すゝしきなり。

(同 書 同、三二六頁)

賀茂真淵の『源氏物語新釋』全集第五の五〇八二頁に「かたちは

ひぢぢかに 或説、土近ヒヂヂカの意といふはよし」といひ、

柳亭種彦も『柳亭記』百家説林、續編 下二の九七頁に『源氏』みを

ひじじかに

つくしの卷、秋好の中宮の事をいふ條「かしらつきあ

てに、けだかさものから、ひぢぢかに、あいぎやうつき

給へり」『細流』に「ひぢぢかは人近なるやうなる體」

とあるはあしし。又とこなつの卷、近江の君の事をい

ふ條に、「かたちはひぢぢかに、さすがにあいぎやう

つきたる方にて」『細流』に「泥土近也」とあるはよ

し。如此同じ『細流』に、二様に注をされしは、近江の

君をばそしる詞ゆゑ、ひぢぢかの詞はやく聞え、秋好の

中宮をば、ほむる詞ゆゑに、さこそかねしなるべし。俗

語にていはく、「かしらつき髪のかかり、あてやかにけ

だかさものながら、つんとばかりはしてあらず、泥土近

に地下の女に近く、ごじよさいがあらつしやらぬあい

きやうものだ」と中宮をほめたるにて同じ詞なり。「近

江の田舎娘なるゆゑ、かたちはひぢぢかに、姿は泥土近

かにいやしけれど、さすがにあいぎやうはあるはうだ」



といひしなり。今土百姓土町人、遊女のことを泥水など、みないやしめていふ詞なり。そのいやしきへ近きが、ひぢちかなり。中宮をひぢちかといひしは、下情に通じ給ひしをほめたるなり。『鴉鷲合戦』文明八年一條禪閣御作と云ふは、鳥を人に比へし物語にて、法勝寺の塔鳩僧都俊観が詞に、「我等が一名字中つちくれ鳩の藤太豊業おもく

はなれぬと云類なるべし。  
 契沖 かたちひぢちかに 『細流』泥土ぢかなると也。下すくしき也。今案、俗に下手くしきを、つちけの  
 又案ずるに、ハネトビ 近年田舎のすまひにて、農業を事として、世間のやうは、ばつくん心やすくなりて候。生得の風情、今いふ土鳩 土ちか一本作斑鳩にして、塊ツツクレ 鳩今いふ土鳩といはれ、云々」土ちかひぢち近、同じ意なり」といへり。

二相の中にも、「兩臂修直摩膝相又諸指圓滿纖長相」ともあり。『古事記』に、日本武尊の、宮簀媛に賜へる御歌にも、「ひさかたの天のかぐ山、とかまにさわたるくひ、ひはぼそたわやがひなを、まかんとはあれはすれど」とあるは、宮簀媛の、ほそやかにたわやかなるかひなをほめての給へり。されば手も指もふとくみてみじかさは、けだかからぬそのひとつをもて、餘をなすらへていふか。

(源註拾遺國文注釋全書本九〇頁)

ひずむ(歪)

一 ヒヅム

契沖 『ひづむ』『つれづれ草』にヒヂリメといふ言にかよはる、假名かくなるべし。  
編者いふ、ヒヂリメは徒然草一七段に見えたる語なり

(和字正濫鈔五の三七丁)

本居宣長の『御國詞活用抄』第五に「ひづむ」『俚言集覽』に「ひづみ 非規」とあり。

二 ヒヅム

一 谷川士清 ひずみ 『神代紀』に日隅宮あり。俗に物ノヒヅミといふは此義なるべし。或は飛墨と書り。  
 (倭訓 栞)

二 小山田與清 ひずみ 『御筋記』三丁に「ひずみをよくく見て軸をなほし退候云々」ヒヅミ 非墨繩の義歟。

(松屋筆記國書刊行會本第二の三二二頁)

大槻文彦の『言海』物集高見の『日本大辭林』落合直文の『ことばの泉』等ズの假名遣とせり。

ひよう(雹)

一 ヒヨウ

一新井白石 『日本紀』に雨水の字讀てヒサメフルといふは、ヒとは氷也。サメとはアメといふ語の轉にて即是雹なり。又これをアラレといふ也。アラレとは散なり。入り散るの義なるべし。『日本紀』に散の字讀て、アラレといふが如きこれなり。今俗是をヒヨウといふは氷雨の字の音によりて呼びしなり。

(東雅活版本第一の三〇頁)

山岡俊明も『類聚名物考』第一册のあられの條に「今思ふに、雹今俗には比與宇といふは氷雨の音語の訛なるべし」といひ、

大槻文彦も『言海』に「ひよう 雹。氷雨を氷雨



と音讀したる語ならむ。或は雨氷の氷の延。又は其音讀。或云、雹の音便轉。いかが」と注せり。

二 橋 成員 へうふる 氷降。作氷略也。

(倭字古今通例全書)

貝原篤信も『大和本草』卷三の七丁に「雹 俗にへうと云。氷の字なり」といへり。成員篤信共にへうと記したれど、氷・氷の假名遣はヒョウならざるべからず。

此の他、寺島良安の『和漢三才圖會』活版本に四八頁「雹 俗云比也字。如用氷字音乎」といひ、

賀茂真淵も『源氏物語新釋』全集第五の四八―五頁に『日本紀』

に大雨を比布留とも比佐米とも訓は、氷降また氷雨の意なり。後の俗是をヒヤウと云は氷の音字なり。唐にて是に雹の字を用ゆるに泥みて氷は別と思へるはわろし」といへり、  
『俚言集覽』にも「ひやう 雹也。……『倭名鈔』

雨水俗にいふヒフルと見えたり。……俗に音にて「氷がふる」と云是也。「長和二年三月雷鳴氷降大如梅」とも見えたり」といへり。

二 ヒヤウ

狩谷望之 今俗謂二雨雹爲比也字布留者比布留之轉譌也。或以比也字爲雹字音轉非是  
(箋注倭名類聚抄卷一の二五丁)

三 へう

谷川士清 へう 俗にへうのふるといふは、雹の音の轉せるにや。又『日本紀』に雨水をヒフルとよめれば氷の音を用ゐたるにや。  
(倭訓栞)

物集高見の『日本大辭林』にも「へう 雹」とあ

り。

四 ヒヤウ・へウ

落合直文の『ことばの泉』に「ひやう 雹」「へう」と兩條に出せり。

びょう(鉦)

一 ビヤウ

寺島良安の『和漢三才圖會』活版本、一五二―一頁 鉦 鐺の條に「泡頭丁。俗云比也字。按、……箱櫃等飾小者曰泡頭丁」

此の他、橋 成員の『倭字古今通例全書』に「びやう 鉦」と注し、

大槻文彦の『言海』物集高見の『日本大辭林』落合

直文の『ことばの泉』ともに鉦の字を記しビヤウの假名遣とせり。

二 べう

谷川士清 べう 砲頭釘也といへり。音の轉訛成べし。鉦と書くは和の俗字也。  
(倭訓栞)

榎島昭武の『合類大節用集』卷七の六丁に「砲頭丁 屬釘 鏢」と見え、  
『俚言集覽』に「べう 鼓釘『虞初新志』ハ 俗に

は鉦か。俗字なり」といへり。

参考

狩谷望之の『箋注倭名類聚抄』卷五の八〇丁 鉦 鐺の條の箋注にいはく「按、鉦、『西陽雜俎』作浮漚釘。『諸阜記』巨白



菌如<sub>ニ</sub>殿門浮漚釘。蓋其狀如<sub>ニ</sub>浮漚。故以名<sub>レ</sub>之。浮付音通。又其物用<sub>レ</sub>金造。故後人作<sub>ニ</sub>鉗<sub>一</sub>也。今俗呼<sub>レ</sub>鉗者即是。鉗疑<sub>ニ</sub>鉗<sub>一</sub>之急呼爾」といへり。

ひわ(鶺鴒)

一 ヒワ

一 谷川士清 ひわ 『枕草紙』に見え、『山家集』によめり。鶺鴒字は『簞海』に「昆鳥也」とみゆ。ヒワヒワしたるは弱き意なれば、二合の意にとる也。

(倭訓栞)

二 源 岩垣

ひわ 鶺鴒 此假字古書にみえず。中昔のふみどもにも、假字の證とすべきほどのものにはいまだみあたらず。後世の歌には、「ひわのむら鳥」とよめり。文

字は『玉篇』に出て、「而灼切」とあり。今案に此鳥いとよわしさをもち、弱鳥文字にあてたるべく、常にもひわといふ事あり。又『和名抄』に、「鶺鴒はイワシ」と有も、ヨワシの意なるべし。是によりて今はヒワの假字とす。

(類語假字格)

此の他、『俚言集覽』に「ひわ 假字未考。或曰、ヒョワの義歟。と云り」と注し、また、

敷田年治は『音韻啓蒙』<sub>下の五</sub>に、「ひわ 鶺鴒。口語にもヒハとは云ず。又弱をヨワシとよみ、鶺鴒をイワシとよむに倣<sub>レ</sub>ても鶺鴒をヒワとよむべくおもほゆ」

物集高見は『かなづかひ教科書』に、「ひわ この假字古書にみえず。…常にかくかきならへり。文字も鶺鴒の字に似たれば此假字なるべし」などいひ、落合直文(新編假名遣)は、ヒョワの略といへる説に従へり。大野廣城は『掌中假字便覽』に「ひわ 鶺鴒。此かな

古書に見えず。されども證とするものあればワのかたとす。考は別に記す」といへり。

平野必大の『本朝食鑑』<sub>六の一</sub>にも比和と訓し鶺鴒の字義は詳ならずとせり。

寺島良安の『和漢三才圖會』<sub>活版本、萩原廣道の『心の種』</sub>近藤真琴の『ことはのその』小田清雄の『國語かなづかひ早學』笹村良昌の『假字の栞』にもワの假名遣とせり。

二 ヒハ

中村秋香 『中學音訓かなづかひ』に、「ヒワとする説もあれど、こはヒハヅ・ヒハヤカなどいふヒハより出でし名ならむ」といへり。なほ ひわず(纖弱)の條を參照すべし。

又大槻文彦が『言海』に「ひは 弱鳥の合字あれ

ひわず(纖弱)

ひわ(鶺鴒)

一 ヒハヅ

は、ヒハヒハと弱き意ならむ」といへるも、纖弱の意のひわずひわやかかの假名を「同書」にハとせるより推すに、秋香の説に同じさが如し。

松永貞徳の『和句解』<sub>六の三</sub>にも「鶺鴒 ひわ。ひはづなるか。文字にも弱と云字を篇に作」といへり。但しハハヅいづれの假名遣説なるべきか。

貝原篤信の『大和本草』<sub>卷一五の二四丁</sub>にはヒハと書せり。

本居宣長 『古事記』中卷日本武命の歌に「佐和多流久毘比波煩會多和夜賀比那」とある比波煩會の解に、「弱細なり。比波は『源氏物語』<sub>真木</sub>に、「いとささやかな



る人の、常の御なやみに、瘦ヤセ衰へ、ひはづにて云々」又柏木「宮はさばかりひはづなる御さまにて云々」又竹川「源侍従とていと若うひはづなりと見しは云々」……『榮華物語』の巻に「宮いみじうひはづやかに、めでたうて入せ給ふ」……などある比波豆・比波夜加などと一言にて、細くたをやかなることなり。今世言に、物の細く弱ヨロくて撓タラむ貌サマを、比波々々とも比波都久とも云是なり。されば此上の詞どもは細く比波夜加なる意の序にして、……此句は美夜受比賣の腕カヒナの細くたをやかなるを詔へるなり」といへり。

(古事記傳全集第二の一六七五頁)

橘 守部も『稜威言別』三四に、比波煩會の比波、と同語なりとし、田中延香の『古言梯拾遺』にも、比波煩會によりてハの假名遣とせり。

此の他、橘 成員の『倭字古今通例全書』鈴木 脰の『雅語譯解』及び大槻文彦(言海)『俚言集覽』等、ヒ

ハヅの假名遣とせり。

### 二 ヒワヅ

一 賀茂眞淵 石川雅望の『源注餘滴』國書刊行會に、本三九五頁に、「ひはづ 眞淵云、稚弱なるを、ヒワヅ也とも、ヒヨワシとも、またよわくたわめる物を、ヒワ／＼スルなどいふに依て、幼少にてよわきをいへり。然れば假字もヒワヅと書べし」と見え、『雅言集覽』にも「ひわづわは眞淵の説なり」とあり。但し眞淵の源氏物語新釋には此の説見當らず。

二 『俚言集覽』愚按 ひわづ 愚按、……ヒヨワヅなるべし。

此の他、行阿の『假名文字遣』谷川士清の『倭訓栞』萩原廣道の『心の種』笹村良昌の『假字の栞』等ヒワヅとあり。

### 三 ヒハヅ・ヒワヅ

近藤眞琴の『ことばのそ』ひはづの條に「ひはづ 庭弱。よはよはしきさま。またヒワヅともかけり」ひわづの條に「ひわづ 庭弱。よはよはしきさま。またヒハヅともかけり」といへり。

落合直文の『ことばの泉』にも、ひはづにひわづの兩條にいだして同意の語と解せり。

### 四 未定

物集高見の『日本大辭林』に「ひはづなり この假字はヒワヅなりともいへり。いまださだめがたし」とて、ひわづの條にも出せり。

### ひ わ る (裂)

### 一 ヒワル

谷川士清 ひわるる 乾破カハの義也。埴ハをよめるは土にいふべし。源仲正「湊出る鹿子の友ぶねゆすれどもひわれもやらぬ朝氷かな」編者いふ、夫木集一七の巻の歌なり。

(倭訓栞)

大槻文彦(言海) 物集高見(日本大辭林) 落合直文(ことばの泉)等また干割の義とせり。石川雅望も『雅言集覽』にワの假名遣とし、『源氏物語』横柱の卷なる「柱のひわれたるはさま」及び『夫木集』の歌を例にあげたり。

### 二 ヒハル

『俚言集覽』愚按 ひばる 今ハハルと云。『新撰字鏡』「圻ハ新同字。恥格反、入。小開也、裂也、分也、擘也。佐



介女、又比波留」愚案ヒ、張の義。

### ぶちようほう(不調法)

#### 一 ブテウハウ

行響 人のテウハウナキとは何事ぞ。无朝榜也。

六條内府有房卿説云、「上古蒔繪銅細工等、皆朝家ヨリ被下レ榜不堪レ之者无ニ彼榜ニ故世間ニ非細工ナル者ヲ无朝榜云也、則无朝榜共云也」ト云々『三寶字抄』には、榜をシルシフタナと點ぜり。榜とはシルシ歟。

(璫囊抄卷二の三〇丁)

横島昭武の『合類大節用集』九上の「無朝榜」本朝俗語。事見『璫囊抄』とさへり。

#### 二 ブテウホフ

大槻文彦の『言海』に「ぶてうほう 不調法。(一)爲す事の行き届かぬこと。物事にふつつかなること。(二)あやまち。疎忽」

物集高見の『日本大辭林』落合直文の『ことばの泉』また不調法と記せり。但し假名遣は漢音によりてブテウハフとせり。

『世話重寶記』卷四の八丁に「無朝榜といふは、上古は蒔繪師銅細工師などは、みな朝家より榜を下さる。細工に堪ざるものは榜を下されずとなり。榜といふは、今町人の受領免許の札のたぐひなり。世にわろき細工を無朝榜などいふは、朝家より、ゆるしの榜をさるゝ事なきといふ義なり。『璫囊抄』に見へたり。無調法と書は出所いまだ不見之」とさへり。

### ぶつそう(物騒)

#### 一 ブツソウ

伊勢貞丈 物念。古、念の字を用ゐたり。『庭訓往來』にも「此間者依連々物念」とあり。物念は物さがしき也。念は俗字也。本字は忽也。

物騒と書てモノサハガシと讀むを騒を念の音を借りて物念と書也。念にサハガシの訓なしといへり。

(安齋隨筆故實叢書本卷五の一五六頁)

石川雅望 ぶつそう 物念。『平戸記』「依是京中物念」『保元物語』「是程京中物念ノ由承聞ス」『朝野群載』「如是物念日夜不絶」

(雅言集覽)

はやく、橘 成員の『倭字古今通例全書』に、「ぶつ

そう 物念。ものさわがし」といひ、横島昭武の『合類大節用集』卷九の一丁にも「物念」とあり。また近藤眞琴の『ことばの泉』にも「ブツソウ物念」と注せり。

#### 二 ブツサウ

谷川士清 ぶつさう 物騒と書り。ものさはかしきを音にいふ、俗語なり。

(倭訓栞)

大槻文彦(言海) 物集高見(日本大辭林) 落合直文(ことばの泉) 等また物騒の義としサウの假名遣とせり。

### ぼらぞく



一 バウゾク

一 四辻善成 ぼうぞくなるもてなし 傍側也。あらはなる心也。『うつぼ物語』云「わかき人は物わらひし給ものなり。されどさやうにぼうぞくにもあらずといふ」

(河海抄國文注釋全書本五一頁)

中院通勝の『岷江入楚』

國文注釋全書本上の一九四頁

によるに三條

公條・同實枝の父子ともに『河海抄』傍側の説に従ひ、

傍若無人の義とせり。北村季吟も『湖月抄』空蟬の卷四丁に

『河海抄』と『花鳥餘情』との説をあげ『傍側猶宜歟。』

旁若無人の心なるべき歟』といへり。

二 契沖

ぼうぞくなるもてなしなり 放俗なるべし。ハを清みツを濁るべし。

(源註拾遺國文注釋全書本二三頁)

大槻文彦の『言海』落合直文の『ことばの泉』に

『ぼうぞく 放俗の音といふ。一説には凡俗の音の轉とす』とすへり。

三 賀茂眞淵

ぼうぞく 傍若無人の意なるを、さまでは詞のしたゝか過たれば、傍若とのみいひてしらするなり。且ジャクをゾクと訓は此國の唱への例なり。

(源氏物語新釋全集第五の四五四頁)

四 石川雅望

契云放俗なるべし。ハを清てツを濁るべし。○雅望考るに、これは昔よりバウゾクと濁りてよみつけたれば、すみてよめる字を引いていへるは強たり。おもふに凡俗の字なるべきにや。『遊仙窟』にも出て、タビトとよませて、ふるくいひならひたれば、おほかたは此字なるべし。

凡俗の字『夷堅續志』にも見えたり。もしさならずば僕遯か。これは『漢書』息夫躬傳に「僕遯不足數」と有て、注に「凡短貌」とあり。

右のうち『遊仙窟』に出たる文字なれば、凡俗のかた近かるべし。……○『身のかたみ』といふ物に「第七、御ひさあはせの事。御むねにつねく御心をそへられ候。むねはいかにうつくしきえりなりとも、しどけなくぼうぞくにひきなされ、とりはづしては胸ひろがりて、ちのしたまであきとほり見にくきことも出る物にて候」

(源注餘滴國書刊行會本八〇頁)

『雅言集覽』ぼうぞくの條にも同意の説を注せり。近

藤眞琴(ことほのその) 物集高見(日本大辭林)この説に

したがへり。

五 萩原廣道

『源氏物語々釋』四丁に「ぼうぞく 試

にはば、暴側の字などにやあらん。『餘滴』に引る『身のかた見』に「むねひろがりて、乳の下まであきとほり」といへる、すなはち暴側の意にて、胸のあきて身の側までも見ゆるを、側を暴すといへるにもあらん歟」といへり。なほ

『同書』頭註に、「暴字、アラハスとよむときは音泊にて、バウにはあらず。されど入聲の字音を用るときは、なだらかに引てウとかくこと、法師をホウシ、緑衫をロウサウなどかく例なれば、今もさる類とすべきにや。これはせめて試にいふのみなり」とあり。

此の他、一條兼良の『花鳥餘情』空蟬の卷に、「舊説に傍側と釋し侍れどいかゞとおぼえ侍り。飽足の二字相叶べきにや。にぎはしくほりかなる心なるべし」といへり。されど一本には此の説見えず、『蜻蛉卷』にも此詞あり。見合て了簡すべし。大方はものゝしからぬ心とみえたり。『河海』に傍側とかきてあらはなる心と釋せらるおぼつかなし』とのみあるよし、『岷江入楚』國文注釋全書本上の一四四頁に見えたり。また鈴木 脰の『雅語譯解』に、「ぼうぞく 字音とさこゆ。其字は未審」といひ谷川士清の『倭訓栞』



また<sup>バウ</sup>の假名遣とせり。

本居宣長(玉の小櫛全集第五の一三九六頁)も假名は<sup>バウ</sup>と記し、

『傍側・飽足など注あれど、いかゞ。』『拾遺』に放俗の字をあてたれど、これもいかゞ。すべてかやうの字音の詞は、その意によりては、字は當がたき物なり。字は字にて、意はあらぬさまにも轉じ用ふるものなればなり」といへり。

## 二 ボウゾク

井上文雄

凡俗の字音は、中昔の平語也。傍側放俗などの熟字は、中昔には聞も及ばず。見も及ばぬをや。『堤中納言物語』虫めづる姫君の條に「かのおつる人はぼうぞく也とて、いと眉ぐろになんらみ玉ひける。云々」凡俗の詞は、中昔の歌合の判詞にいと多きをみて、そのかみの平語なるをしるべし。

## ほうぼう(魴鱈)

### 一 ハウボウ

谷川士清 はうぼう 方帽と名けしにや。方頭魚なるべし。

(倭訓栞)

### 二 ハウバウ

大槻文彦の『言海』に「はうぼう 魴鱈。方帽の音かとも云。しかが」といへり。

横島昭武の『合類大節用集』卷五の二二丁に「魴鱈」

### 三 ホウバウ

## ほうろく(焙烙)

### 一 ホウロク

一新井白石 今俗に瓦器のホウロクといふもの整の屬なるものなり。古より。ありしものによ。詳なる事を知らず。物を焙ずる事をホイロを取るなどいふは火色ホイロなり。其火を得て色の變ずるをいふなり。ホウロクとは「ホイロの器」なるをいふ。クとは器を呼びてケと云ひ、キといふ語の轉ぜし也。『下學集』に焙爐の字讀てホイロといふは漢音をもて呼びし所にて、それは火鉢の類、別に一物なり。

(東雅活版本第二の三一頁)

『俚言集覽』ほうろくの條に『東雅』の説をひき、「愚按、先生の説是也。焙爐は別に一物なるべしホウロクに炮烙の字を用う最非也」といひ、越谷秀眞が『物類

## 四 ホウボウ

『俚言集覽』に「ほうぼう 竹麥魚」 越谷秀眞の『物類稱呼』二の二に「保宇保宇」 物集高見の『日本大辭林』にもホウボウと記せり。

## 五 ハウボウ・ホウボウ

落合直文の『ことばの泉』に「はうぼう 魴鱈」 「ほうぼう 魚の名。はうぼうにおなじ」といへり。

寺島良安の『和漢三才圖會』活版本七二〇頁に「保宇婆宇 正

字未詳。按、保宇婆宇魚狀色氣味共似銅頭魚カナガシラ而大其物有硬鬚而尾緒有五彩色其鱗細於銅頭魚ヨリナル大者尺餘」



稱呼』卷四の七丁にも白石の説をひけり。

二 谷川士清

ほうろく 焙炒の瓦器をいふ。「火色をとる器」といふ義。又炮烙の轉か。或は焙爐具の字を用う。

(倭訓 栞)

太田 方の『漢吳音徴』一八に「倍。音佩、又音背。

吳次音、部。『日本紀』べの假字。漢轉音、保。『日本紀』

ホの假字。愚按、倍にホの音あるは廻にヲの音あるが

如し。倍と同音の焙今常に焙爐をホイロとよむ」と

いへり。参考のために抄録せり。

三 日尾 瑜

天野信景が『鹽尻』に「ほいろは蒲黄色か」と『春曙抄』にあり。或人云、茶葉など、ほいろかくるといふは是か。余思ふに夫は火色なるべし。但黄色なる色なればほを色にやと云へり。

瑜案するに、ホイロは火炙ホイロなるべし。茶などほうろくと

云も火アツルの訛なるべし。夫より轉じてほうろくをさへに茶ほうじ又はほいろなどいひし也。余が説によらば、ホウジはホウヂの假字をよしとすべし。

ホウロクも火アツル器なれば火炙器なるべし。かはらけを瓦器と、よみと音にて呼など思ひ合すべし。さてほいろも火あてたる物の黄ばみたるよりいふにや。

(燕居雜話百家説林續編下一の三二八頁)

此の他、横島昭武の『合類大節用集』七の六丁に「土鍋・

炮碌』ホウロク 笹村良昌の『假字の栞』に「ほうろく 炮烙」とあり。

二 ハウロク

橘 成員 ほうろく 炮烙。物をいる器也。

(倭字古今通例全書)

大槻文彦の『言海』にも「ほうろく 焙烙 炮碌 焙

爐具』と注せり。

また落合直文の『ことばの泉』にも焙烙・焙碌・焙爐具等の字をあて、物集高見の『日本大辭林』には焙爐具と書し、いづれもハウロクの假名遣とせり。

● 参考

寺島良安の『倭漢三才圖會』活版本、五〇四頁に「はふらく。砂

鍋。俗云法樂。按砂鍋即瓦埵。毎用焙藥物及茶米穀以

文火チンダカニ徐可攪廻之。相傳源義經妾、名靜。或時靜於吉野

勝手明神前爲法樂舞。人咸稱歎之。俗呼砂鍋名法樂

者。徐可舞之謎語乎」といへり。砂鍋は今の焙烙なる

が如し。さてそれを法樂といへるは、今ほうろくといふと

同語なるか。或は別にさる俗稱のありしか。同語の轉とせ

ばハウロクの假名遣説と見るべきなり。

ほとおる(熱)

一 ホトホル

一 貝原篤信 ホトホル 熱 火通るなり。

(日本釋名二の三八丁)

二 飯田武郷 『日本書紀』神代下、「避熱而居」とあ

る語の解に、「熱字ホトホリと訓り。第三、一書には、

「避火炎時」とある火炎をばホムラと訓るを、『私記』に

「保乃保」と有り。第五、一書には、火折尊と彦火々出見尊

を別神と爲て、一には「火炎衰時」一には「避火熱時」

と有は、其言の同義なるよりの混れなり。

火熱ホトホリとは今も云事にて、物に火氣の有無を云とて、火熱の

有無と云る是なり。「熱ほとり」又「手足のほとる」なども云へ

田皇大神鎮坐記』に「後號此燧天火徹」と見えたり。



るも、火を打出るは、即火の物に通徹<sup>トホ</sup>る由の名なり。照徹又は蒸徹など云る類是なり」

(日本書紀通釋第二の七九九頁)

大石千引(言元梯) 寺田長興(太津可豆衛) 敷田年治(音韻啓蒙<sup>下</sup>の五<sup>丁</sup>)等、また火通の義とし、大槻文彦の『言海』にも、「火通<sup>ホトホ</sup>るの義か」といへり。

橘 成員(倭字古今通例全書) 契沖(和字正濫要略<sup>四</sup><sup>五</sup>)

丁) 佐藤誠實(語學指南<sup>三</sup>の二<sup>六</sup>) 物集高見(日本大辭林)

等又『日本紀』の傍訓をあげてホの假名遣とせり。

此の他、『俚言集覽』本居宣長の『御國詞活用抄』<sup>第六</sup><sup>會</sup>

石川雅望の『雅言集覽』清水濱臣の『語林類葉』近藤

眞琴の『ことばのそ』落合直文の『ことばの泉』等も

ホの假名遣とせり。

## 二 ホトヲル

### 谷川士清

ほとをり 『神代紀』に熱又火熱をよめり。『古事記』同じ。火の折たる義なり。○『枕草紙』に「さるべき事もなきを、ほとをり出たまふさまこそあらめ」と書るは、恨をいへるをうけてさいへば、胸のほのほなるべし。

(倭訓栞)

## ま い ば(蟠車)

### 一 マイバ

谷川士清 まいは 糸を裏に移すまでに巻て置物をいふ。纏<sup>マキ</sup>の義なるべし。撥車<sup>マヒバ</sup>といへり。『蜻蛉日記』に「白糸のまいくる」と屬けるは是にや。

(倭訓栞)

寺島良安の『和漢三才圖會』<sup>活版本五</sup>に「まひのは蟠車。撥車、撥榑、車榑。俗云未以乃波」とあり。

## 二 マヒバ

### 山岡俊明

まひは 舞。まひはは糸巻物なり。平さ臺に柱一本を立、その上に十文字のくも手を入、その端に各柱四本を立、わくの如くして糸を巻。……

舞とのみもいひしにや『蜻蛉日記』上二兼家公長歌「天

雲とのみたなびけばたえぬ我身は白糸のまひくるほどをち

もはじとあまたの人の手にすれ身ははし鷹のすじろにて云々」

(類聚名物考第五冊の三八七頁)

物集高見の『日本大辭林』落合直文の『詞の泉』と  
もに、まひのはの條に舞羽の義とし、まひばの條に

『まひのはに同じ』といへり

まつこう(額の中央)

## 三 未定

大槻文彦の『言海』まひばの條に「まひば 舞羽。或

云、マイバにて卷羽の音便と」 まいはの條に「まいは

蟠車<sup>マヒバ</sup>の條を見よ」といへり。

## まつこう(額の中央)

### 一 マツカフ

#### 一 谷川士清

まつかふ 抹額也。『本朝式』に末額とも見えたり。もと軍容より出たり。今いふ鉢纏也。よて胃の額上にあたる處をもしかいへり。眞向の義にはあらず。

(倭訓栞)

#### 二 山岡俊明

眞向 まつかふ。まむかふを略てまつか

五一



うと云ふは音便の轉訛なり。額の正面をいへり。戰記等に「まつかうなしわり」など見えし是なり。○『參考保元平治物語』「眞向内兜はおそれも候。障子の板か。梅檀弦走か。……」○「眞向御頭の骨はおそれも候」

(類聚名物考第四冊の一八八頁)

はやく、横島昭武の『合類大節用集』卷六の四九丁に「眞向マツカウ」  
或作眞甲マツカウ「首鏡正面」といへり。

大槻文彦は、『言海』まつかうの條に、「まつかう眞向。或は眞甲、眞額。額の中央」と注し、まつかうの條に、「まつかう 抹額。字の音の音便。鉢巻に同じ」と注せり。されば抹額は額の中央をいふまつかうとは何等の關係もなきものとせるなり。

### 二 マツカウ

新井白石 『令』には「衛士の朝服、會集の日は朱

の抹額マツカウ掛甲を加ふべし」と見えたり。抹額といふものすなはち鉢巻といふものにてあるなり。……胃の額上にあたる所を俗に末都加字といひて、眞向の字など用ひ來れり。まことは抹額といふことばの胃にもうつりし也。額の字を加字とよむ事にしへのならはし也。帽額とかきて毛加字などもよみたり。

(本朝軍器考故實叢書本二二九頁)

『俚言集覽』まつかうの條にも、『倭訓栞』の説をあげて、「愚按、額字入聲なれどもカウと呼とさの假字はフ文字にあらず。字の假字也。是等は音便の假字遣ひ也」といへり。

此の他、橘 成員の『倭字古今通例全書』に「まつかう 正面。同訓に眞向はかぶとことに云」とあり。

### 三 マツカフ・マツカウ

物集高見の『日本大辭林』まつかうの條に、「まつかう抹額。はちまさしたるひたひのところ」まつかうの條に、「まつかう 眞甲抹額。まつかうを見るべし」とあり。

落合直文の『ことばの泉』の説ほど同じ。但しまつかうの條なる注の抹額を削り、眞甲とのみあり。

### まとい(團欒)

#### 一 マトキ

藤原清輔 『奥義抄』歌學文庫一の二八頁に「まとい 圓居なり」と注せり。

顯昭(古今和歌註第一七) 行阿(假名文字遺三六) 四辻善成(河海抄國文注釋全書本三三四頁) 宗碩(藻しほ草卷一六の三九丁) 契沖

まとい(團欒)

(和字正濫鈔四二) 橘 成員(倭字古今通例全書) 平直方(夏山雜談三の三四丁) 賀茂眞淵(神遊考全集第二の九九三頁) 楫取魚彦(古言梯) 谷川士清(倭訓栞) 山岡俊明(類聚名物考第四冊の一七三頁) 本居宣長(古今集遠鏡全集第五の七五〇頁) 加茂季鷹(正誤かなつかひ) 春登(假字音便撮要) 萩原廣道(心の種) 高橋殘夢(國字定源上の三五丁) 近藤眞琴(ことばのその) 大槻文彦(言海) 落合直文(ことばの泉)等みな圓居の義とせり。

#### 二 清水濱臣

まとい 纏居マトキなるべし。圓居と云説いか

(語 林 類 葉)

橘 守部も『神樂入綾』上の二二丁に、眞淵が圓居の説をあげて、「是博通の説なれどもかなひがたし。そは宴席に集へばとて、必ずしも圓かにのみ並ぶべきにあらざれば、『古本今昔物語』に纏居マトキと書たるを正字とす







ずとしられたり。『貫之集』にも「山風にかを尋てや  
梅花匂へるほどに家ゐるめけむ」といへるなどをみ  
るに、家・マト居などみな用言なること著し。かの纏ひの  
説を証ひんとは、「いざけふは」の古歌の「まじり」をしも謬なり  
なども云めるは、皆語の用きのかたに心づかぬから也。」といへ  
り。

中島廣足も『櫃のしづえ』下の二に、義門の説を賛し、  
九丁なほゐる用言にせる例として、『和泉式部集』「あみのめ  
に風もとまらぬうらにてもあまならなくながむつる  
かな」『同續集』「いづこにかこゝら久しくながむつ  
る山より月の出てゐるまで」の歌をあげたり。

まとい(纏)

一 マトキ

「師古曰、幢麾也。纏有衣之鼓。其衣以赤黒繪爲之」  
はやく横島昭武の『合類大節用集』卷七の二  
三丁に「纏マトキ兵  
家所用」と見ゆ。

『俚言集覽』にも「纏。馬印を纏と云。麻止比の假  
字也。圓居と混同すべからず」といひ『日本社會事  
彙』ウマヅル  
シの條にも「まとい 俗に纏の字を用ふ。これ  
を諸書にマトキの假字に書くは誤れり。衆人を纏ひあ  
つむる所の印なれば也」といへり。

物集高見は『日本大辭林』に「まとい 纏。大將  
の居る本陣の標シムシにたつるものにて、竿のさきにさまび  
まのものをつけたり。これはちりぐゝになりたる士卒  
の、こゝかしこよりみてあつまるやうにするものなり」  
といひ、落合直文の『詞の泉』また纏の義とせり。

大槻文彦は『言海』に「まとい 纏。一軍の陣所  
の標として立つる具。或云的率マキの義かと」といへり。

一 寺島良安 まとい 帳幟、帳與的  
同字。纏幟。圓居。俗云  
末止井。

按帳幟始于永祿元龜之比ヨリ而正字未詳相傳北條氏康家  
臣同左衛門太夫始作之ト而後武田信玄製大小二品最戰場  
重器也今諸將作一器懸竿頭令持之ヲ先於衆其器家家  
有所定ル作之士卒觀帳居所ヲ向隨行猶射的之ヲ帳マテ乃是  
大將幟也。  
(和漢三才圖會活版本四〇八頁)

二 谷川士清 まとい 軍陣のマトキも的率の義なるべ  
し。士卒を率ゐる目あてとする意なれば、纏と書はいかゞ  
侍らん。馬印と一物なりといへり。  
(倭訓栞)

二 マトヒ

山岡俊明

纏 まとい。『前漢書』七十六、  
趙廣漢傳。幢檠。注

また新井白石の『本朝軍器考』故實叢書  
本九頁に「馬ヅル  
シといふ物は、永祿比ほひ迄はなかりしに、元龜の比ほ  
ひより生まれりとも、信長又は天文の比ほひすでに始ま  
れりともいふ。相模の北條の家人大道寺といふもの、  
河越の夜軍に、本間といふものをうちて、それが差物を  
取りておのがしるしとす。是より小マトヒといふ物は  
生まれりと『甲陽軍鑑』には見えたり。今の兵家の説  
に、大馬ヅルシ小馬ヅルシ又大マトヒ小マトヒなどい  
ふ物ある歟。馬ヅルシといひマトヒといふ是れ一物に  
して名を異にす。或人のいひしはマトヒといふことは  
甲斐の武田の家のことばなりとぞ」といへり。

みずわぐむ



一 ミヅワグム

一 素寂 みづわぐみて侍るなり。『後撰集』「年ふればわが黒かみもしら川のみつわぐむまで成にける哉」としたけぬればこしかままりて、兩のひざとりいでたる中に頭まじはりぬれば、三の輪をくみ入たるがごとし。それによりて三輪組と云。

(紫明抄内閣本、天の三六丁)

行阿の『假名文字遣』四〇にも「白川のみつわぐむまで三輪組」と注し、その他、古抄物類多くこの説を採れり。藤原爲家の『後撰集正義』續羣書類從卷四五四の五六丁にも「或老人云」として此説を引用せり。

但し同じ『後撰集正義』に引ける或人の説にはこれを駁して「此儀いさゝか不審なり。老かままりたればとて三の輪あるべしや。この詞あしく心得て今案によめるにや」といひ、なほ一の傳説をあげて曰く、

「さするほどになれりと云なりとぞ傳をしへはべりし」といへり。

二 伴 信友

みづわぐむといふ詞のふるき書に見えたるは、檜垣軀の歌なるぞ始なるべき。其は清輔朝臣の『袋草紙』に、肥後國遊君檜垣老後落魄者也。『家集』云おいにさはまりて

此おいに云々の詞、袋草紙普通本に脱たるを、一本によりて取れり。このほかにも、本どもに互に寫誤あり。又この文を後撰集正義に清輔卿記に云とて引れたるにも、またいさゝか異なる處あり。これかれ校べて、其よしとおもはるゝかたに據りて訂して引り。すみ

所もなくなりて、手づから水くむほどになりて、桶ひささげて出るにしも、國のかみ神拜に出給ふ道にさしあひたれば、めざとなるもの見つけて、いかでかかくはと見とがむれば、かみ何ぞと問ければ、名高き檜垣なりと人の云けるをさゝてよびいづれば、はづかしけれどかくれ所もなきに思ひ侘て、桶さしちきてぬれば、いかでなとかくは成しどとあるに「老はてゝかしらの髪も白川のみづはくむまでなりけるかな」白河は件の所にある河の名なり。如「後撰」大貳興範

にあひて詠と云々。と見えたり。

『後撰集』三には、つくしの白川といふ所に住侍りける、に、まへより大貳藤原興範朝臣のまかりわたりたるついでに、水たべんとてうちよりてこひ侍りければ、水をもて出てよみ侍りける。ひがきの軀「年ふればわが黒髪も白川のみづはくむまでなりけるかな」として載られたり。五の句、普通本に「老にけるかな」とあれど、今は正義に擧られたるに據れり。……

さて此みづわぐむをみづわさすともいひて同言なり。言の意は、『後撰集正義』に諸説を擧られたる中に、「或老人云みづわぐむと云事、老人のかままり居るかたちなり。左右の膝立てやとしたる貌なり。まさに三輪ありとみゆ」と載られたるのみぞかなひたりげにさこゆれどなほさこえ難き處あるを、その老人の説に據りてつらく考ふるに、ミヅワグムは三勾グムの義にて、そは老に極りて、腰の二重に勾まりたるが上に、膝もまた折れ勾みたる容貌をミヅワと



いへるなるべし。ワとは打まかせては圓きものを云ふ言ながら、轉りては物を二にも三にも勾めたるをいふべし。

『夫木抄』に載たる源仲正朝臣の歌に「かまどもるみつわのおみないほりよりはひいでの小田に早苗とる見よ」句老まりて、歩行もしがたき嬢によみかけたる趣なり。とたぐにミツワとよまれたるをもおもふべし。

『古事記』に倭建命の御言に、「吾足如三重勾而甚疲」とあるも、御足の腫れたるを譬へ給へるにて、體狀はことなれど、三重としも詔へるに此の三句と云へるおもむきのちのづから似通ひてきこゆ。

さて腰の二重になるとは、今の世にもいふ言にて、『夫木抄』の歌に、「おいらくの腰二重なる身なれども卯杖をつきて若菜をぞつむ」『大鏡』に「此姨いといたう老てふたへにてゐたり」なども見えたり。然二重といへるなどにつけても、身體の三に折れかゝみたる形容を三句と云けむ事おもひ合すべし。此項下總の佐倉わたりの民の老たるが、ものがたりせる言の中に、「おのれ年老たれどいまだ

足腰の三に折るゝばかりにもあらず」といへり。これいにしへの言のさまの残れるにて、三句ぐむの言の意とおなじ。

さてミツワクムミツワとは、しか三句になれるを、さし交たるごとさ狀に甚じく云へる詞なるべし。又ミツワサス又ミツワサシと云ふは、サスは氣ザシ根ザシなどいふサシとおほかた同じ意にて、殆ミツワともいふべくなりたる形容をいへるなるべし。ミツワクムは既にしか成極まりたるうへの形容をいへるなり。檜垣嬢が家集に「おいにきはまりて云々」と云ひて歌にミツワクムとよめるをもおもふべし。

『鴨長明抄』に道因法師が事を「九十ばかりになりて、耳などもおぼろなりけるにや、會の時はことさら講師の座のきはにわけ寄りて、わきもとにつとそひ居て、みつわさせるすがたに耳をかたぶけつ、他事なくさけるけしきなど等閑の事とは見えざりき」又『續世繼』の序の文に、「みつわさしたる女の杖にかゝりたるが、云々。もとは都にも、とせあまり侍りて、そののち山城の狛のわたりに、いそぢばかり侍りき」などいへる形容をおもひやりてかむがへ

合すべし。

さて此言を漢字に當たるは、『類聚名義抄』古本、仁治二年に三年に寫離をミツホサ爪と訓めり。此字訓、色葉字類抄にも載たるともに支離とかけりといへり。又顯昭法橋の散木奇歌集の注に、ミツワクム・ミツワサス

大江匡房卿の『續本朝往生傳』に「沙門増賀云々兼詠和歌曰水輪指矢曾千餘之老乃波久良希之骨爾逢爾介留哉」とあるを、『印本』に「支離八十有餘之老乃波海月之骨爾逢爾計留鏡」と作き、尾張國眞福寺に藏る建長五年の『古寫本』には二様ともに並載たり。『多武峯略記』跋に建久八年歲次丁巳閏六月十二日於多武峯南院檢校靜胤撰之に載たる増賀上人傳にも「長保五年六月八日未時詠和歌曰支離八十餘之老乃

浪海月之骨爾逢仁計流鏡」と書せり。件の歌にもミツワサスに支離を當て書るなり。然るに『古本今昔物語集』にも此歌を載て「美豆波左須夜會知阿末利乃於比乃奈美久良介乃保爾爾阿布會宇禮志伎」と書り。美豆波と書るは記者の疎なりしなり。近頃、或人件の今昔物語集の歌の書さまに據りて、美豆波といふを正しとして解る説あれど、

本書三句に老を於比と書るも假字違へるを、ひそかに於以と書直しておきて、美豆波と書る方のみとらへて、證とせるはいかじなるうへに、其解説もはやく谷川士清の和訓栞にいへる兒齒の説にもはら同じくてさらに諸がたし。○編者いふ、小山田與清は松屋筆記(國書刊行會本第二の一八一頁)に、「ミツワサスと書たるは、走を波志流和志流などいふ類にて、通音なれば事もなけれどなほ美豆波左須と書べし」といへり。かくて支離の字は、漢籍『莊子』に見えて、注に「身體無收拾之貌」と云へり。この字義をおほよそに心得て、ミツワサスと云ふ言に譯せるなり。これをも合せ考て言の義の證とすべき也。

今考たるごとく、三句の義ならむには、ミツワとツを清音にこそ唱ふべけれ。ミツワといへるにはかなひ難しといひおもふ人もあるべけれど、此言、かの檜垣嬢がよめる歌詞を始にて、それより後の歌どもにも、おほくは水にいひかけたるは、古はもはら水をミツと清みて云へりしなるべし。然考たる由は、今もその肥後の水島を、其島人はさらにて、其わたりの土人も、なべて彌都島と清音にいひ、その所のほかにも、又他の筑紫の國々の中にも、水を清みていふ所あり



と、肥後の熊本人木原楯臣いへり。古言の遺れるなるべし。  
 然るは『古事記』に彌都波能賣神『神代紀』に罔象の訓  
 注彌菟破廼迷とみえたるは、水神の御名なれば、彌都彌菟  
 など書るは、決して水の義なるべきに、然清音の字を用ひられ  
 たるをもて證とすべく、又『伊勢家集』の首に、伊勢に男  
 の文をおこせたりけるに、返事せざりける由をいへるとこ  
 ろに、「こゝらの年月になりぬれど、などか見つとだにの  
 たまはぬと云ひければ、たゞ見つとのみぞいひたりける。  
 それより此女をミツとぞつけたりける」といひ、また男の  
 かけ歌に「夏の日のもゆる思ひのわびしさに水乞鳥の  
 ねをのみぞなく」返し「いたづらにたまる涙のみつなら  
 ばこれして消てといはましものを」とよめるかけ歌の水  
 乞鳥は、女をミツと名づけたるによりて、ミツ戀鳥といふに  
 かけ、返しの「たまる涙のみつならば」のみつも、水にミツ  
 を兼たる也。但し後世の歌詞の云ひかけには、清濁にかゝ

はらずしてよめる例も、まれくにはあれど、件のミツコヒ  
 鳥を女の名のミツにかけて、ミツコヒ鳥とよみてはあまり  
 に口つゞにてつきなが上に、返しに「たまる涙のみつな  
 らば」とよめるも、水にミツを兼て應へたるにて、其意とほ  
 りてきこゆるを、たゞ涙の水とのみするときは、いと拙劣く  
 なりてきこえ難きはた思ひ合すべし。萬葉集には、水といふに美都  
 とも美豆とも二かたに書り。  
 此集は清濁定ならぬ書さま。故雅しくは美都和佐須と都を清て唱  
 ふべし。上に引たる如く、類聚名義抄にミツ禾サ爪と、ツに濁聲の點を  
 かたに依れる  
 も交れは證としがたし。そのかみ既に今世の如くなべてミツと云ひならへる  
 ものなるべし。

(比古婆衣存探叢書本六の二七頁)

三 本居大平

みづわぐむは老人の腰の屈む事をいふな  
 りといふ舊説然るべし。

それに付てみづわぐむといふ詞の腰のかゝむ事といふは  
 いかにといふに、上代の井の水をくむさま、先づ深き井の水  
 は、桶の如き檜曲物ヒノカマに綱をつけて釣揚て汲しなるべし。是  
 なる事上にいへるがごとし

さて老人の腰の屈むを名づけて、水ワクムとはいふなる  
 べし。

さてこゝに檜垣が歌によめるは、水を入る器の名の事に  
 もあらず。又水を汲む形を水ワクムといふによりていへる  
 にもあらず。こゝにてはたゞ老人の腰の屈む事をミヅワク  
 ムといひならはしたる詞につきてよめるなり。其時は決して  
 水を汲むといふ語にはかゝはる事にあらず。白川のと枕言  
 のやうにいへるは、ミヅワのミツの詞にかけて面白く思ひ  
 よりて、一つの趣向にあたらしくよめるなり。

(後撰集新抄別記三〇丁)

四 大石千引

支離 身瘦回屈

(言 元 梯)

五 谷 千生 みつわぐむは身撓クムと云事也。ツとタ  
 と通音なり。但身撓屈ミダラクムの略とすれば聞えやすきやうなれど

ツルベと云器なり。又淺き山の井又川水などを汲むも、歌  
 などに見えたるが如く、ひさご以て汲しなるべし。右二つ  
 のさまなるべし。今の代のごとく棹ツルベ・車ツルベはな  
 かりしなるべし。依て水をくむさまを「水輪を吸」といひ  
 しなるべし。

ミヅワ・ミヅハ、假字はしれがたけれど、しばらくワの假  
 字とさだめて、水輪ミヅワといふは器の事とすべし。

さて水輪と云は水を入る器の名にて、それをたゞに水の  
 事とするなり。水を入る器の名を云てたゞに水の事とする  
 例は、飲む事に用ふる水をミモヒといふが如し。催馬樂の  
 あすかゐの歌「あすかゐにやどりはすべしかげもよし  
 もひもさむしみ草もよし」又主水の官をモヒトリとい  
 ふも同じ。モヒは水を入る器の名なるを、のむ用にする水  
 をミモヒと云なり。依てミヅワクムといふは、水を入る器  
 を用ひて、井の水を擗揚クミアゲる事なり。そのさまは腰のかゝむ



わろし。クムはたゞ添たる詞なり。故サスともいへるなり。

クム・サスは先達いへるが如同じ詞にて、しかなるさまをいふ詞也。たとへば草木などの芽の出るをメグムともメザスともいへるが如し。タワムもタワと云がことばのもとにて、タワワなどいへるこれなり。ムははたらき詞をそへたるなり。

さて『言元梯』をみれば、支離ミツハグムは身瘦回屈也とありて、己が考とおほかた同じやうなるはいとうれし。されど瘦回屈ツカレクムなりといへる、もの遠きこゝちす。されば近時の歌書どもすりまきなる、うつし傳へなる、おほかたみづわぐむと云ことばをワの假字にかきたり。これふるき假字のおのづからつたはれるなるべし。……かの『古今昔物語』にありといふなる「美豆波左須夜會知阿末利乃於以乃奈美久良介乃保禰爾阿布會宇禮志伎」といふ歌のみを據とはしがたし。かの書もしは宛などのあやまりにはあらじか。

(語格雜論 三の一丁)

契沖の『源註拾遺』國文注釋全書本二七頁 本居宣長の『御國詞活用抄』第五會 鈴木 脛の『雅語譯解』本居春庭の『詞の八衢』全集本三五頁 等、ワの假名遣とせり。

### 二 ミヅハグム

一 四辻善成 みづはぐみて 支離『日本紀』曰「水神罔象女。罔象此云美都波」伊弉諾尊所生神也。髮白已老嫗體也と云へり。編者いふ、一説として三輪組の説をも載せたり。

(河海抄 國文注釋全書本六七頁)

契沖の『源註拾遺』國文注釋全書本二七頁 に、「今案、罔象此云美都波、ミヅワグムと假字ことなり。またクムの詞そへり。ミヅワグムを又ミヅワサスとも云り。『日本紀』を引説は誤りなり」といへり。

二 荷田春滿 賀茂真淵の贊同 『縣居雜錄』全集第四の四〇六三頁 に「み

づはさす 『今昔物語』舊本第十二増賀といふ僧の事をいふ條云、「亦往生極樂に寄て和歌を令讀。聖人も自ら和歌をよみて云、美豆波左須夜會知阿末利乃於以乃奈美久良介乃保禰爾阿布會宇禮志伎」と。此美豆岐の岐は波の誤とみゆ。『後撰』に「みつはぐむまで」といふをあしく心えて、三輪と書て、老て腰のかゞまりたる事なりと皆おもへり。いかで腰のかゞまりたるが三つ輪をくむやうなるにや。ことわりなき事なり。

我師春滿のいはれたるは、三齒組を水者汲といひかけたるにて、其老女の水くみてゐたるにいひかけたるも聞え侍り。且老ては齒のところへぬけ落て、上下の齒をくみあはせたる様にさし入ものなればいふとなり。是まことにしかなり。右の「美豆波さす」といふはその心なり」といへり。源氏物語新釋(全集第五の四五七八頁)にも同じ説を注せり。

山岡俊明も『類聚名物考』第四冊の二〇九頁 に「三齒交の義と

し、「歌に水をくむと云ひかけられたれば、ミヅハの者はてにはにして輪とはかよはず。三輪組なれば、輪はたしかなるワの意なれば、てにはのハとはかよふべからず。よてその意とけがたし。是は老て上下の齒のまばらに落て入組交りて有るをいふ。『史記』『漢書』などに見えし、地界の互に入合たる所を犬牙相交とするせしも、犬の齒の上下入交りたるが如なるにたとふるなり。古詩に「口含三兩齒」など見えしは、またく此さまをいふなり」と説けり。

清水濱臣は『答問雜稿』二の四丁に「賀茂真淵の説に三齒組なりといはれしものとしひたる説也。假字のいひかけはかなへれども齒の組あふに三とかぎれることあらむや」といひ、

萩原廣道も『源氏物語語釋』一の二に九丁に「みづはぐむ」といふ語の意は詳ならず。『新釋』に『今昔物語』を引



れたるにて、ミヅハサスといへるも同じ意とは聞えたり。然れども三齒くむといはれたる説はかなへりとも聞えず。齒の落たればとて、必三さしあひくみあふ物にもあらざればいかゞなるに、クムといひ、サスといへる意も、かの説のごとくにては聞えがたし」といへり。

三 谷川士清

みづはぐむ 老人の體をいへり。按ずるに、『詩』の注に、「兒齒老人齒落更生」と見えたり。瑞齒別天皇の御名によれば、兒齒は長壽の相なれば瑞齒といふべし。クムはメグムといふが如し。

或は三齒組にて僅かに残れるをいふとし、或はミヅワクムにて三輪組の意とす。よて『莊子』の支離をよめり。されど『後撰集』の詞書に「水たべんとて打よりてこひければ」と見えれば、三輪にはあらず。

(倭訓栞)

村田春海も『假字拾要』に「稚齒にて老たる人の又小兒の如きはの生るを云ならむか」といひ、

清水濱臣の『答問雜稿』<sup>四丁</sup>にも、「近來季吟などにいたるまで皆三輪組の説を信用せれども、もしまこと三輪組の意ならば、いかで水者汲とはいひかくべき。天曆の頃までは、後世の歌のやうに、みだりに假字のたがひたるいひかけはなかりし也。『古本今昔』に美豆波とあるにてもしるべし……ミヅハは『毛詩』『爾雅』等に見えたる齟齬にして毛詩魯頌閟宮篇云、黃髮兒齒。鄭箋云、兒亦壽徵。爾雅釋詁云、黃髮齟齬、齟音者老壽也。郭璞註云、齟齬、々墮更生。細考。說文云、齟、老人齒。五穀切。今もまゝ六七十ばかりの老人などの、上下の齒皆落たるあとにさらちひさき齒のほそくはゆることある也。そは壽祥なれば、瑞穂國瑞籬瑞殿瑞柏などの例にて、ほめていふにて、瑞齒とはいふなるべし。常に異なる齒を瑞齒といへる事は、反正天皇の御諱を、瑞齒別と申奉りしも、常の齒と

はことにしてめづらしき御齒なりしより名づけ奉りし也。日本書紀云、瑞齒別天皇(中略)生而齒如一骨。古事記云、水齒別命(中略)御齒長一寸廣二分上下等齊既如貫珠。(水齒は借字なり)みづはぐむともみづはさすともいふは、クムは含にて、草木の芽含を、たゞクムとのみもいひて、ツノグムアシなど歌にも常によむ。此心にちなじ。サスは萌にて、ミヅ枝サス・若葉サスなど、歌にも常によむ。此心にちなじ。さればクムもサスも、みづはのはえかゝるさまをいふ也。みづはぐむ・みづはさすともにならず齟齬齒のはえたるをいふのみにはあらず。齟齬も生ぬべきまで老たりといふ心にて惣て老人の事にいへるなり」といへり。また、

也」とありて、註云、「齟齬齒墮更生細考」といひ、又『劉熙釋名』に「齟大齒落盡更生細考」如「小兒一齒也」と見ゆ。されば若枝・瑞玉などの若にて、若くみづくしき意。クムは葦の角ぐむ芽ぐむなどの組にて侍るなり」と説けり。  
小山田與清(松屋筆記國書刊行會本第一の四の四七六頁)も、谷川士清の説を千古の確論也と稱揚し。『みづ齒さすも兒齒の指出るにて、指は、枝の指・氣色の指などいふにおなじ』といひ、「かいわぐむ」といふ語は、編者いふ、宇都保物語藏開に、「頭中將の朝臣は、したのかまをきて、みなかいわぐみてはしらるめりし」宇治拾遺(二二の一四丁)に、「うすいるの衣の、いみじうかうはしきをとりせたりければ、二ながらとりて、かいわぐみて、わきにはさみてたちさりぬ」などあり。又空穂物語藏開に、「此女前なる硯に手習をして……おしわぐみておいたる」同書あて宮に、「文」をちひさくおしわぐみて」などいふ語もあり。カイは打也。ワグムは輪組也。後に三輪組は老人の貌といへる説によりて出來たる詞也」といへり。  
また井上文雄の『冠注大和物語』<sup>中六</sup>の五丁にも「齒の



一たびおちてまたはゆるをいへりといふ説やよろしからん。……わが父の友市川氏、六十にあまりて、こまかき齒さらに生じたるをまさしくみつれば也」といへり。  
 中島廣足(檀園隨筆<sub>下</sub>の<sub>三</sub>) 村上忠順(雅語譯解拾遺)  
 佐藤誠實(語學指南<sub>三</sub>の<sub>一</sub>) 近藤真琴(ことばのその)  
 大槻文彦(言海) 物集高見(日本大辭林) 落合直文(詞の泉)等また齟齬の義とせり。

四 黒川眞頼

『後撰集』雜三に「年ふればわが黒髪もしら川のみづはくむまで老いにけるかな」とある歌にて、ミヅワクムにはあらざることを瞭然たり。然るは水は汲むといひかけたるを見るべし。此は詠歎にて、水汲むといふに同じ。かゝるところの詠歎にははを用ゐるが定例なればなり。さてみづはくむとは身軀<sup>ミツハクム</sup>にて、年老いて身のつばくむなり。ツバクムはツヅマリカガム状をいふ。顯昭いふ、「みづはくむとは老いぬるをいふなり。支離とかけり」と

いへり。亦徴とすべし。支離はマガルことなり。

(黒川眞頼全集第六の一五六頁)

此の他、石川雅望も『雅言集覽』にハの假名を書せり。なほ『源注餘滴』<sup>國書刊行會</sup>本一〇三頁には山岡俊明・清水濱臣等の説と同じく『後撰集』をひきて、「水をくむといふにかけていひたる詞なればワと書べきことわりなし」といへり。

● 参考

一 『俚言集覽』愚案の説にはく、「無明抄」九十ばかりになりて、耳なども臚なりけるにや。會の時は殊更講師の座の際に分よりて、脇許につとそひ居て、三はせる姿に耳傾けつ、他事なく聞けるけしきなど云々」三はせる姿とあれば、三齒とも瑞齒とも思はれず。されば三輪には猶なるべからず」

二 有住

齊の説『如蘭社話』<sup>卷の</sup>一四に見えたり。諸説區々なる中に齟齬の説を採り、「されど『源氏』夕顔の巻に「みづはくみて侍るなり」とあるは、玄旨法印の説に、「年よりぬれば、腰かゞまり脊くゞまり、二の膝とがり出たる中に、頭まじりて、三の輪を組たる如くなり」と説れたる如く、紫式部も心得て書たるならん。さればみづわぐみと書たるなり。尤『湖月抄』は假字の調なくみだらなれば信じがたけれど、「みづはめぐみて侍るなり」と云語勢ならず。只年よりて三輪をくみたる如く老屈せしものなりといへる意なれば、檜垣姫の本歌をとりし文にはあらで、當時俚諺にかゝることをいひしまゝの文にして、此本歌を引出て評するは、あまりあなぐり過たりとやいはん」といへり。

むころう向

すもう(相撲)やも  
う(病)の條参照

大槻文彦の『言海』に「むかふ向。むかひの誤。むかふの山・むかふの家・むかふ河岸」と注し、  
 物集高見は『日本大辭林』に「むかう向。むかひ。おもてのかた」落合直文は『ことばの泉』に「むかう向。むかひの音便」といへり。

『古事記傳』<sup>本居宣長全集第</sup>一の六八二頁 白日神の注に、「白字は向の誤にて牟加比なるべし。其故は『式』に山城國乙訓郡向神社、大歳神社と並載れり。此向神社は大年神御子向日神を祀ると云。何の説も同じければなり。……今向日明神と申し、其處を向日町といふ。今は牟加布と唱牟加比なりしこと、日字を添て書くにても知るべし。中務内侍が日記に「むかひの明神近きほどにて、常に參ると云しが、思ひ出るよりあれになつかしくて、「なつかしむ心をしらばゆくさきにむかひの神のいかが見らむ」とあり。其頃までも牟加比と唱へしなり。其内侍は弘安・正應のころ」といへり。参考の爲に抄録せり。



めんどう(面倒)

一 メンダウ

一 谷川士清

めんどう 面當なるべし。『盛衰記』に「上ろなりともちぎりは人によるべからず。たとへ下ろなりともむすめが見するめんどうなり」と見えたり。又メンドヒともいふれば目厭メドヒの義なるにや。

(倭訓栞)

二 『俚言集覽』愚按

目たるの條に、『倭訓栞』「メタル『平家物語』にメタルガホといへり。今も「メダルを見る」といふ目垂の義なるべし」愚按、俗に面倒といふは、目タルの轉語歟。「面倒を見る」といふ語もあり。タルはタルイ也。タユイと同じ言なるべし。ルとユと通ず。太部のタルイの條に詳にせり。編者いふ、たるしの條に、「たるし カイタルルイの條に詳にせり。シなど云。タユシと同じ音歟。ルとユと通ず。

イハル、をイハユル、射ルを射ユと云類。マダリイといふも同じかる也。タユは垂の義なるべし」とあり。マダリイといふも同じかるべし。面當目厭の義いかゞあるべき。

三 大槻文彦

めんどう 面倒。面倒の當字の音讀か。或云、メンドイと形容詞にもいふ目厭メドヒの訛か。又は目遠メドホクメドホの音便訛ともいふ。

(言海)

物集高見の『日本大辭林』落合直文の『詞の泉』また面倒の字を記しダウの假名遣とせり。

二 メンドウ

平直方

めんどうなることと云諺は著といふことなや。田舎にて著をメンドウと云。筮をとるに、三反して一交をなし、十八反して卦をなすなり。其仕様の因循なればメンドウなることといふ俗言の出たるなるべし。

(夏山雜談三の二四丁)

参考

新井白石の『白石先生紳書』全集第五の六四三頁に「メンドウナ

と云は『平家物語』の天とうなの義と同じく日を費すの

義歟。編者いふ、天とうなといふ語平家物語に見當らぬやうなり。矢たふなといふ語は、他の戦記にも見えたり。但し「日を費す」といふ意義の語にはあらず。ムダト云もダフナの轉語なるべし」といへり。

り。

もじえる(捫)

一 モヂフ

谷川士清

『倭訓栞』に「もぢふ、『神代紀』に捫字をよめり。俗にモヂ〜として居などいふ是なり」

『俚言集覽』は士清の説を引き、物集高見(日本大辭

もじえる(捫)

林)またハ行下二段活用の語となし、モヂフの假名遣とせり。

二 モヂユ

石川雅望

『雅言集覽』に「もぢゆ 捫。『書紀』一書、永爲汝俳優者云々初潮漬、足時則爲足占云々至腰時則捫腰」

三 モヂフ・モヂユ

大槻文彦の『言海』もぢふの條に、「もぢふ 捫ゆの條を見よ」もぢゆの條に、「もぢゆ 捫。又モヂフ・モヂル・ヨチル。『神代紀』學其溺苦之狀、初潮漬、足則云々。至

股則走廻。至腰則捫腰」

落合直文は『ことばの泉』に「もぢゆ 捫。モヂフにあなじ」もぢふ 捫。ヨチル・モヂル・チヂル」と注せ



り。

もだえる(悶)

一 モダユ

一 大石千引

悶モダユ 身モダユ

(言元梯)

二 小山田與清

もだえ

『俊頼散木集』八の卷下に、

片戀の心を「はななくとやさだつ妹はこひもせでつたなきせなど泣もだえける」

按に此「なきもだえける」を諸本「なきも絶ける」と書けり。一本に「なきもへける」又一本に「なくもたへなる」なども書たれど、泣ナキモダユ 悶モダユ 事と聞ゆ。

モダユといふ詞は、於此由などの語勢におなじく、於此

由は喉音の於聲を出し、於良夫さま也。由は由流とも活て動搖さま也。されば喉音の奥まりたる聲を發出さんとすれば、體もゆるうごくより於此由とも於比由流とも於比江ともいへる也。毛太由は聲を出さず黙止して動震苦さまなれば、毛太由流・毛太江などいへり。

『頼政集』に、逐夜増戀の心を「目をへつゝそふるつらさを重荷にてもだへはつべき心ちこそすれ」此歌のモダへは悶モダユ を持堪モダヘ によせたり。かくては假名も毛多閉モダヘ と書べくおもはるれど、後の歌なれば假名の證に用がたく、又椎を四位、老を生オシ など通音もてよみかゝること常なれば、それになづむべからず。

さて此詞の所見は『空穂物語』ただこそ廿四 に、「あとどろさまもだえ給ひておもほすことかぎりなし。云云」『落窪物語』二の卷下の九に「いかで是にむくいせんともだえ給へば云々」『撰集抄』五の卷宇佐宮の條に「涙をこぼして

もだえしかば云々」『發心集』四の卷上に「あとどろさま

どひ、おびただしく手をたゝきて、まなこをいからして、もだえまどひてたえいりぬ云々」『砂石集』四の上卷三に

「或入道餅ヲ好ム醫師ナル故ニ、請ジテ主、餅ヲセサスルニ、

カノ音ヲ聞テ始ハ小音ニオオト云ホドニ、次第ニ高クオ、オ、ト、鞠ナド乞ヤウニオメキテ、ハテハ疊ノヘリニ抓ミツキテ、入道ガキカヌ處ニテコソシ候ベケレ。カノツク音ヲ聞候ヘバタヘガタク候トテモダエヨゴレケリ。此事ハカ

ノ主ノ物語也云々」『地藏靈驗記』六の卷下に「イカッ

セントモダエツ、云々」『参考保元物語』三の卷下に

「聲ヲ惜マズフシマロビ悶ケリ云々」又廿三 「空シキ骸ヲ

抱キ悶ケルガ云々」『參考平治物語』二の卷下に「起ヌ

伏ヌ歎テモダエ焦レ給ヘバ云々」また『源平盛衰記』四

十五廿四 五廿六 九廿八 十八丁 十九七 卅一 四十六廿五 四

十七十二 『平家物語』二十八丁 『長門本平家物語』二十三丁、同

六十丁 五十四丁 十六百 十七五 十八丁 『曾我物語』一丁 十九丁 『参考太平記』十六百 廿一七 廿五丁 など此外いとあほかれど、くだくだしければ引出す。

(松屋筆記國書刊行會本第二の七四頁)

三 『俚言集覽』

もだえ 假字未詳。悶・煩悶を訓り。タ

エ悶絶の絶の義ならば多曳の假字。耶行の活用也。満をモチと訓めば満絶の義歟。

四 寺田長興

もだえ 悶を訓り。採絶の義か。常に悶

絶と云もしるべし。

(太津可豆衛)

五 甫喜山景雄

もだえ 満悶をよめり。『空穂』忠こ

そ卷に「あとどろさまもだえ給ひて云々」詞には出さで底には絶も入んばかりにいさどほるをいひて、黙絶モダユの義なるべし。悶絶といふもやがて此心なるべく覺ゆ。

(落窪物語證解國文注釋全書本七五〇頁)



六 大槻文彦

もだゆ、悶。黙して艱む意か。  
(一言 海)

この他、村田春海の『假字拾要』に、『もだえ』『うつ保物語』にみゆ。證詳ならねど、モダユといひてモダフといはざれば、かならずエの假字なり』といへり。

橘 成員の『倭字古今通例全書』に『もだへ今按に』と注し、本居宣長の『御國詞活用抄』第一 石川雅望の『雅言集覽』萩原廣道の『心の種』笹村良昌の『假字の栞』等、ヤ行下二段活用の語とせり。

二 モダフ

谷川士清 もだへる 満悶をいふ。みち湛へるといふにや。身もだへなども見えたり。○俗に手重き事を、モダック・モダ〜スルなどいふも、満悶の意にや。一説に、

梵語の母陀羅を結印手也といへる、是なるべしといへり。  
近藤真琴の『ことばのその』物集高見の『日本大辭林』落合直文の『ことばの泉』ともにハ行下二段活用の語とせり。

もちいる(用)

一 モチフ(ハ行上二段活)

一 本居宣長 用の假字は『源仲正家集』に、元日戀、「千代までも影をならべて逢見むと祝ふ鏡の用ひざらめや」  
夫木集卅二に載れり。又後なれど、藤原經衛家集にも、此同シ人宇治殿にて、餅をおこすとて「肴には何もあれども此中に心につかは是を用ひよ」かへし「君が代を心用ひのうれしき」と餅に云かへたるに依りて定めつ。  
仲正は、『後撰集』の作者なればいまだ、假字の亂れざりしほどなり。もちひ・もちふ・もちふるハ行上と活用く言にて、戀・強

などと同格の活ハ行上なり。

(古事記傳全集第一ノ九五七頁)

二 岡本保孝

假字みだれたる世に、木居コキに戀コヒをよせ、莞オホキに覆オホヒをかね、また藍アキに逢アヒを秀句にするみな誤也。これはいづれも、古書に正しき證ある詞どもなれば論もなし。

用を餅飯にいひなしたるなどは、古書に餅飯の方のみみて、用の假字はあらねど、餅飯にいひかけたるをみれば、そのころ用の假字、波行の活にこそとおもはるれば、本居氏の説春海大人の論わか、うごくまじきを、或人は、そのころ假字みだれたる世にて、飯をイキといひけむ、されば飯によせたる也といふ、うらうへの見識なり。その證として引たる、真字書のなきはもとよりにて、秀句のいひかけもなし。た

ゞモチキル・モチキレバなどとかきてある書ども也。その中キレバとある方はうたがはし。○編者いふ、散木奇歌集に「ほろしごの稻と見しまにもちぬればみそうづまでもなりにけるかな」とある俊頼の歌をさせ

もちいる(用)

るなり。下なる「もちあると物にみえたる例」とある條下を参照すべし。是は證にならず。物よく心得ざる人のかけるものは、かゝる詞、書きひがむる常也。……  
飯の假字、後世イキと一定せざるあかしをいひむ。

『二人丸秘抄』第六 こはいひ 強飯 もちひて 用・庸

『同』第七 いひかしぐ 飯炊

『同』第八 あさかれる 朝炊 もちる 餅

かれぬひ 餉 もちある 用・庸

いひつづ 飯粒 いひかしぐ 飯炊

『二人丸秘』

『同』 もちひて もちいる共 用・庸 『二人丸秘』

もちい 餅 『二人丸秘』

これみるべし。その法則とすべき書、かくのごとくしどけなく、前後打合はざることのみなり。たとへ後世一定して、イキとありても證にはならねど、まして後世二方なるをや。假字みだれたる世は、又そのみだれたる所によりて、お



のづからさだめもあるものにて、俊頼など、そのよのさだめによりて、餅をモチキとさだめてよめるなりといふ人もあれど、みな識見の紙背に透らぬよりの説にておのれはしたかひがたし。

試にある人にむかひて、わぬしは用を主に、餅飯を客にして、假字みだれたる世なれば、飯をイキに呼けんといはるれど、おのれは、餅飯を主にして、用を客にして、たとへモチキと、用の假字を、その世に書く人ありぬとも、餅飯にいひかけたるがあれば、此假字はモチキならんといはむに、かちまけなきやうにおもはる。或人、假字はみだれても、詞のはたらきはみだれざるものなれば、モチキルとありて、又モチキレバと云活もあれば、一段の活らたがひなしといふめれど、上にのせたる二人丸秘抄、類字假字通など、ふたかたにいひて更に定見なし。又モチキレバといふ詞も、僅に一處にて、それに刊刻のものにあらず、いかでうけ取りて證となすべき。蜻蛉の、モチキルベシ・モチキルマジといふによりて、一段の活といふは、一理なきにあらず。されど、光廣卿のかゝれたるつれづれ、も草にモチフル・モチキルとふたかたにかければこれら確證になしがたし。しかちまけなからむには、こゝにいふ事あり。わがかたには正しき餅飯の假字を主にして、是までは證を見てざる用

の假字をさだむるに、わぬしは、證なき用の假字を主として、證のある餅飯を、その比はモチキならんといふはいかゞ也。いづくに、後世は飯をイキといひしに一定したる證あるといはゞ、その人猶いふべきふしありやなしや。

『和名抄』官職部「大炊於保爲乃豆加佐」とあるなどを證にすべきか。されどこれは誤字也。飲食部「強飯古波伊比餅比」とあるこれよろし。十卷本には官職部なし。

そも、世の中、假字みだれたる世なればとて、假字をみださぬ人なしとはいかていひざるべきや。……假字みだれたる世にいひ出る詞は、皆古言の證にならずとはいふべからず。それもその人、一より十まで、あやまりなしにはあらず。こゝにあやまりて、かしこにあやまらぬも有べし。かしこによくてこゝにあしきもあるべし。……俊頼・仲正など、外の歌にたとへ假字たがへるがありとて、それを咎めて、こゝの證にせぬは古書をよむの法にあらずかし。

ハヅル、と云詞、古書に假字の證なきを、本居氏の、姑く世にかさならへるにより、豆の假字とさだめられたる事、『古事記傳』卅一十四にみえたり。本居氏の識見うべなること也。是によりても、此用字の假字よ、假字みだれたる世なればとて、たしかなる詞にいひかけたるを證とせぬことやあるべき。今このハヅスは、別證・いひかけもなく、たゞよにかさならへるをだに證とする、是後學の法にこそ。

こちよりては、古假字・今假字と云名目もありて、きはやかに分別あれど、中むかし、物のみだれゆくそのかみ、いかでぞ法則のあるべき。さればこゝにみだれずして、かしてにたがふふしもあるべく、左にふみそこなへるも、右にはたじろく事のなきもなごかなからむ。すべて物ごとみだれそむるはじめに、いかで約束のあるべき。

さらば俊頼・仲正のころ、飯をイキとたれさだめ、用をモチキとたれさはむべき。此こと味よく解したらむには、俊

頼など飯イヒとよみたらんもうたがひなるべし。今よりみれば、鴻溝の有やうにおもはるゝは、今人の情をもて、古人をおしはかるにてあたらぬ事のみ多かるべし。

○もちゐると物にみえたる例

『源氏』夕霧。湖月本廿五ウ

そこの心さようおぼすとも、しかもちゐる人はすくなくこそあらめ。

『蜻蛉日記』卷中之中、刊本十七ウ

夢をも佛をももちいるべしやもちゐるまじや解環本にあり。

『散木奇歌集』九、雜

田上に侍ける比、こもりが、いねといふものをみそうづにして侍りけるをみてよめる、

ほうしごのいねとみしまにもちぬればみそうづま



でもなりにけるかな 孝、所藏本如レ此、羣書類従本もおなじ。岩崎美隆は、いかなる本をみられたる

にか。モチキレバとありといへる。その本可尋。○編者いふ、岩崎美隆は河内の人、村田春門の門人、かつて「もちふ」といふ詞の用格」といふ説を草せり。下に擧げたり。

『空穂』 藤原君。板本卅一オ

たかき位 ナシ一本 をもちゐるべからず 一本によるに、うけはりてこゝに引出べき眼

『身形見』 第廿七、羣書類従、四七八

三十一字の歌のさよよきをぶつたいともちゐる也 佛體

○もちゐる・もちひ・もちい・もちゆ一定せざる文ども

『發心集』 一、慶安四刊本七葉

いともちいる事なし。 これは、ヤ行か、ア行か、ミ

『同』 七、十一葉

もちひられず。 これはハ行也。

『同』 八、四葉

もちゆるがごとし。 これはヤ行也。

『徒然草』 鳥丸光廣卿自筆 上、第六十

又こと用にもちふるることなくて、これはハ行也。

『同』 下、第八十一

したがへもちゐることなかれ。 これはワ行也。

○もちうるといへるは

『倭玉篇』

「用モチウル」とあり。撰者しらねど慶長の刊本なり。

○もちひると一定したるは

『袖中抄』 一、もずのくまぐき。印本

此義申侍しかど、人もちひず侍さ。

(用の假字)

三 井上文雄

義門法師、『かげろふ日記』『源氏物語』などにより、一段の活用ぞといへるより、今の人々、大かた用申のかたとせれど、いかゞあらん。もと此詞の意を考るに持といふ詞の活用たるものと思はるれば、編者いふ、頭書に、「うつるをうつるふ、

すむをすまふなどいふ例にて、もつ をもちふといへり」と記せり。 猶本居翁の、は行の活用とせられたるによるべし。

『かげろふ日記』『源氏物語』などに、たゞ一所づゝある

を證とせんことおぼつかなし。假字がきの書は假字の證に

ひきがたし。又『類聚名義抄』なども、寫本にて傳はりた

るうへに、「任モチイテ 以モチキル 俚モチキル 雖モチキル

行モチイル」など、様々にかきたれば、證とはしがたし。

おもふに、此詞中頃より、俗言に、もちひるといひなれし

を、かなのさだなき世なれば、かくモチキルともモチイルと

もかきしなるべし。定家卿の歌合の判辭に此詞あるも、專

ら當時の俗言なれば也。歌の判辭はもはら俗言をもまじふ

ればなり。今俗のことばにも、戀ふるをコヒル、強ふるをシ

ヒル、佗ふるをワビルなどといへり。又一段の活用は、イキ

ニヒミキの外あることなし。またヒキキルといふ詞は、も

と引集るの二言の一語になれるものにて、此用ひの語の證

とはなりがたし。

(いせの家づと一の二五丁)

四 渡邊眞禱

用の字の假名、『六國史』『萬葉集』にも

見えぬをもて定むべきやうなく、波行といひ、和行といふ。

其あげつらひ、かたぐゝにわかれたり。

波行といふ者は、俊賴の歌に、「今よりは吾をもちひの

鏡にてうれしき影を寫しそむべき」といへるを引て、徴と

し、

和行といふ者は、『蜻蛉日記』を引てあげつらへり。今『蜻

蛉日記』を見るに、山寺にこまれる條に、「二十日ばかりお

こなひたる夢に、吾かしらを取おろして、額をわくと見る。

あしよしもえしらず、七八日ばかりありて、吾腹のうちな

るくちなは、ありきて膽をはむ。是を治せんやうは、おもて

に見つなんいるべきと見る。是もあしよしもしらねど、か

くするしちくやうは、かゝる身のはてを見聞ん人。夢をも佛



をもちいるべしやもちゐるまじやと定めよとなり云々と、もちいる・もちゐる二様に書たり。おもふに、もちいるは持入にて、夢よ佛よ、吉凶のうへにもちいれて、たのむべきやいなやといへる言とおぼゆれば、和行のかたは、取りがたきものにこそ。

『萬葉集』卷四、中臣朝臣東人贈阿倍女郎歌に、「獨寢て絶にし紐緒ゆししみとせんすべしらに音をのみぞなく」といへる答歌に、「吾以在三相二槎流絲用而附手益物今會悔寸」と、以用同じ意に用ひたり。また卷八に「黒木用」と二所あり。祝詞にも、「何を持且」「何を以且」と書り。されば持以用三字みな同言にて、別に、用ふるといふ言あるにはあらず。持以を延ていふのみなり。たとへば、丹を延て、にほひにほふにほはすといひ、秀を延て、ほぎほぐ、ほびこるほこるほころふほとびると、さまたまにいへる類なり。もちもちひもてるもちふるもたんもちひんも

たましもちひましもてよもちひよもためもちひめ等みな延ていふのみなり。神代に、大穴牟遲神・大己貴神・大汝神など、様々にかけども、其名義は大名持神なり。また佐比持神・保食神あり。『仁徳紀』に、口持臣『履仲紀』に車持部あり。太宰府を於保美古止毛知乃司といふ。然して、用ふるといふ言の見えざるは、持以用同じ言なればなり。是をもて見るに用字の假名は波行と定むべきものなり。

(如蘭社話卷一五)

五 物集高見

もちふ用 この語は、もちといふ語の、上二段にはたらきたるものにて、將と率との連合の語にはあらず。

すべて、波比不閉の音は、名詞を動詞とするときの語尾となる例なり。荒といふ名詞を動詞とするときに、荒び荒ぶ、荒ぶる荒ぶれといひ、萎といふ名詞を動詞とするときに、萎び萎ぶ、萎ぶる萎ぶれといふと同じ例なり。

さるに、將率なりとて爲爲留爲禮の上一段とさだむるものしりびとあり。その人の主とするあかしは、ひきゐるといふ語にて、そのひきゐるといふ語は、引率の連合なるによるなれど、引率の方は、意、率にありて引になく、將率の方は、將に意ありて、率になし。あはれ語の眞をしれらんもの、いかでかはまどとはされん。

(日本大辭林 〇『かなのしをり』にも)

六 田崎五百頌が、ハ行上二段活の説、およびこれに對する、木村正辭の辨駁あり。煩冗なれば、今その要點を摘出すべし。

田崎五百頌

(一) 一段の活語は、一言やがて一語なり。然るに用ふは、三言連りて一語をなせる詞なれば、いかで一段の活語といふことをえん。かの率わといふ語の如きも、和行中二段の活にして、一段の活用にあらず。そは、

試みといふ語、もとは、心見の合名詞なれど、一段に活くことなく、麻行二段に活用せるが如し。

(二) 和行上一段活とすれば、見著など、同じく、斷止段に結ぶときは、もちゐるといはざるべからず。

皇朝の詞、いかでかくのごとく、いやしげに頼れとののはざる結びあらむ。これを波行中二段活に、もちふといへるに比ぶれば、そのおとりまさり、すこしく活語をしりたらんものは、おのづから辨へぬべし。

(三) 『土佐日記』二月八日の條に、「けふはせちみすればいをもちひず」とあり。この本は、文暦二年定家、貫之の自筆本を寫し、又明應壬子仲秋妙壽院の寫しをば、北村季吟の物せし本なれば、いと動なき證とはすべし。されどなほ誤もあらんとて、二三本を見るに、皆いづれも、もちひすとあり。

木村正辭



(一) 率ゐの活用の、一段なることはいふまでもなし。試みの活用を、『詞の八衢』に、中二段の活詞とせるは、誤にして、一段活なること、古書に其の證數へ盡しがたし。

(二) もちゐると斷止するを、いやしと論者は思へど、其の實いやしからざるも知るべからず。又、見る着るはいやしからずして、もちゐるはいやしといへるもいかゞなり。古書に例證あるにも拘らず、詞の優劣を以つて、活用を定めんことは、いと強ひたる事なり。

(三) 『土佐日記』云々は、思ふに、北村季吟の『土佐日記抄』の事をいへるならん。その奥書によるに、文曆二年、定家が貫之の自筆本によりて寫したるを、明應壬子に妙壽院の傳寫したる本を以つて季吟の注せしなり。然れども定家の頃は、假字遣みだれたるのみか、一種の假字用法行はれたれば、よしや其の原本は、貫

之の自筆にもせよ、假字遣は、その世の用法に書き改めたること疑なし。そは、今日に傳れる『二十一代集』をはじめ、諸の物語・日記などの假字の、正しからざるにて知るべし。又北村季吟も、定家假字を用ゐたる人にて、同人が注釋せる古書を見るに、假字の法則の正しきもの一もあることなし。かゝる假字違ひの多かる本を證として、用の字の假字を定めんとするはいとかたはらいたし。

(大八洲雜誌卷九〇・九二)

此の他、橋 成員(倭字古今通例全書) 市岡猛彦(雅言假字格) 春登(假字音便撮要) 本居春庭(詞の八衢) 等またハ行上二段活の語とせり。

村田春海が「もちひは俊頼の歌に、「我をもちひのます鏡」編者いふ、永久百首春の部に「けふよりは我をもちひの増かじみ嬉しき影をうつしてぞみる」とあり。夫木集春の部にもと。餅にいひかけたるに、しばらくよりてあ

るべし。ゐの假字とせんは、據なき説也」と『増補古言梯標註』若桂(三一丁)に同意の説あり。にいへるは二段活か一段活か明ならず。されど『若桂』の文に此の語を上二段に活かして用ゐたるを見れば二段説なりしこと明なり。

### 二 モチヒル(ハ行上二段活)

敷田年治 年治按に、是はもちひもちひるにて、波行一段の活用なりけり。先、モチキならざる徴をいはゞ『散木集』に、田上に侍りける頃、かみの里といひける處に、湯あみして云々。いかなる神のおはしますといふを聞て、俊しげがたはぶれて申ける。「あれこそは、もちひの宮と聞かんに、つくくと思ふ事をこそ祈れ」といふを聞て、和し侍りける。「あれと見ばさしても誰もまゐらまじよそにもちひの宮づかへして」「もちひの宮」は『歌枕名寄』に近江餅宮モチヒとあり。あれは『和名抄』に、餅粉、阿禮、つくく

は搗々。さしては、串に刺して人にまゐらする状。いづれも餅に由ある語を、可笑チカシクとりなして、さてはじめの歌には、餅粉モチコこそ用ひと言掛、次なるは、他處ヨソに用ひむやと云意を、「もちひの宮」に言よせたり。又『同集』に、齒がための鏡の折敷のしき物に書付侍りける。「我をのみ世にももちひのかゞみ草咲さかえたる影ぞうかへる」『永久四年次郎百首』俊頼朝臣「けふよりは我をもちひの鏡草うれしさ影をうつしてぞ見る」夫木集一にも載たり。

以上餅に言掛て、用の假名のモチヒなるを知る徴に足れり。……餅モチヒは、例の假名遣編者いふ、釋行阿の假名遣文字遣をさせり。にい部に「もちい餅モチヒ」又る部に「もちる餅」とあれど、皆後世の偽書なれば、據としがたし。但普通に書ならへる後の假名は、モチキなり。其に云掛たる用も、ともに亂れてモチキなめれば、慥モチヒに用なりし證には爲がたしといはむか。

されど餅モチヒをモチキに誤りたるは、甚後のことに社あれ。



『和名抄』『新撰字鏡』等に、餅を毛知比と註せるは更にも  
 いはず。近は『權中納言定頼卿集』に、こめだい。もちひ  
 こめだいとは、言籠る題と云  
 事にて、即物名の一名なり。「かづさけむあまのしわざもちひる  
 なるみるめしなくばかひあらじやは」此程まで、餅を正し  
 くモチヒと云りし、これ彌明かにて、用の假名も更に類れざ  
 りし也。……又『續紀』三十の宣命に、「過乎知天必改與  
 能乎得方莫忘伊布然物乎口爾我方淨之云天心仁穢乎天乃不覆  
 地乃不載奴所止成奴此乎持伊稱乎致之捨伊誘乎招都」とある持  
 伊は、用ひばなり。此を伊に誤れる例は、『同紀』十七に、  
 「是以主多知乃子等治賜伊自天皇朝爾仕奉利」又「是以子波  
 祖乃心成伊可在」など見べし。  
 倍、此持伊を『詔詞解』に、「持伊 伊波とつゞける助辭  
 めづらし」と云て、助辭と解けるは、ひがことなり。この  
 持伊に對へて、捨をキラヒと訓べし。其は、『神武紀』に、手端  
 吉葉の古注に、「多那須衛能余之岐羅毗」とあればなり。

この捨ひは、常には四段の活語なるを、爰に捨  
 伊方とあるを思へば、中二段にも活用く語なり。右の徵等を併て、毛知  
 比の假名を知るには飽足れり。  
 是は『八千侯』に、中二段とあれど、波行一段の活用なり。  
 さるは『空穂物語』藤原君に「つたなきにて、高きくらぬ  
 もちひるべからず」本には、もちいる。『蜻蛉日記』中ノに「ゆ  
 めをも佛をももちひるべしやもちひるまじや」本には、「宇  
 治拾遺』十五冊に「すみやかにはしりかへりぬ。一も用る  
 べからず」猶多かれど、悉くもらしぬ。これをモチキと誤  
 れるは、強水鶏遂椎新初魂櫛・槓涯・住のヒをキにあや  
 まりたると同例なり。……『類聚名義抄』に「用モチウル」『字  
 鏡集』に「以モチウル」とあるは、老をオヒと誤りてやがて、  
 老とも活くが如し。  
 (假名沿革下の六丁○古事記標註にも)  
 小山田與清が、『松屋筆記』國書刊行會本に、『相如家  
 集』に、「あつまりて物なおもひそをのこどもあけん

みかどのもちひなりけり」此歌も、餅と用とをかけし  
 歌也』といひ、又『同書』第三のに、「俊頼の『散木奇  
 歌集』十卷、雜下羣書類從二百五十  
四下卷廿九丁右 田上に侍りける比、こ  
 もりが(木守が)いねといふ物を、もちひにして、とり  
 出て侍りけるを、またのひ、みそうづにして侍るを見て  
 よめる「ほうしごの稻と見し間にもちぬればみそう  
 づまでもなりにけるかな」もちぬればを、古本にはも  
 ちひればに作れり。餅をたちいれたれば、古本の方然  
 るべし』と記せり。これによりて想ふに、與清も、ハ行  
 一段活の説なりしにはあらざるか。  
 又石川雅望も、『雅言集覽』もちひの條に『源氏物  
 語』夕霧の卷湖月抄本  
二五丁の文を「そこにこゝろぎようち  
 ぼすとも、しかもちひる人はすくなくこそあらめ」と  
 書し、其の他の例もすべてハ行の活用として引けるよ  
 り察すれば同じくハ行一段の説なりしやうなり。

### 三 モチウル(ワ行上二段活)

一 谷川士清 もちる 用をよめり。庸も用也と注せ  
 り。以將の義なるべし。もちうともいへり。……  
 一説に、『藤原經衡家集』に 宇治殿にてもちひをおこ  
 すとて「さかなには何もあれども此中に心につかば是をも  
 ちひよ」返しにも、心もちひとよみ入たり。されば、もち  
 ひ・もちふのかななるべしともいへり。  
 (倭訓栞)

### 二 黒澤翁滿

用の字のかな、縣居の翁は、もちる・もち  
 うと定められ、本居氏は、もちひ・もちふなりと云れど、『源  
 氏物語』『蜻蛉日記』などにもちあると云る事所々に見え  
 たり。其心を考るに、持て居る事にて、後には軽く云馴たる  
 物とおぼし。さては一段の活詞なりといふべけれど、『日



本紀』に、「急居此曰菟岐子」とある編者いふ、日本へタ。活らさ、  
則此詞にあたれば今は縣居の翁に従へり。

(言靈のしるべ上の二二丁)

三 太田 方

モチキは持と以との二語にて、一言には  
あらず。其證は、『日本書紀』一書「于時權用他姫婦以乳  
養皇子焉此世取乳母養兒之縁也」とあり。用某以の  
二字は、モチキと讀る也。本書には、「豊玉姫將其女弟玉  
依姫來到」とあり。又、一書には、「遣女弟玉依姫以  
來養者也」又、一書には、「留其女弟玉依姫持養兒」  
とあり。又別ところに、一書、「即遣一尋鰐以奉送焉」  
とあり。

「將云々來」とあるは、キテキタリと讀み、「遣云々  
以來」は、マタシテキテキタリと讀み、「留云々持」は、  
トツメテモテと讀めり。此持の字は、用をモチと讀る意に  
て、何れも同じ事を、文を異にしてあれども、用將持の三字

は、モチと讀み、將以の二字は、キと讀みて、將來と以來と  
同語勢なるをもて、「用他姫婦以養」は、モチキテと讀る  
を知るべし。然るを舊點に用をト  
リとよめる非なり。是等皆、用を毛知爲と古くよ  
り遣たる意なり。

是の如く毛知爲は一語にあらず。持と以と二言の連なり  
たるにて、本は佛書より出しなり。二言の一語となれるは、率をヒ  
キキといふも、引と以との連り  
在と不との連れるがごとし。『佛說觀無量壽經』に「瓔珞盛漿持  
用上王」 『法苑珠林』十三、に「言一切難捨無過己  
身我等今日不能捨心持用相與」 『同上』十六、に「時  
諸獸中有牛王向於桴虎而說偈言世人皆取我之糞  
持用塗地爲清淨是故端正賢桴虎應當取我以爲夫」  
『同上』十四、に「如因果經云菩薩處胎垂滿十月身諸支  
節及以相好皆悉具足夫人憶入園遊觀王勅後宮端正采  
女凡有八萬四千以用持摩耶夫人」 『同上』十六、に  
「食糧罄盡王子遊獵殺捕諸蟲以用活命」 『同上』十七、に

「偈言太子以下右羅網指萬字千輻輪相現金色柔輭清淨手  
用摩馬王捷陟頭」 『同上』三十三、に「迦葉經爾時世尊而  
說偈頌曰三千大世界珍寶滿其中以此用布施所得功德  
少」 『同上』廿九、に「佛說華聚陀羅尼經云佛言若復有人  
持以七寶如須彌山等於一却中布施聲聞辟支佛不  
如有一出家在家人能持一錢以用布施初發菩提心得  
福德多」とあり。古へは佛法盛りに行れし故に、持用以  
用の連語を『書紀』にも遣ひ給ひしなり。其がいつとなく、  
皇國の一言のやうに、人々思ふことになりし也。『韓非子』  
説林に「老馬之智可用也」 『佩文韻府』道字に「引老  
馬之智可師也」 『周禮』旅師注に「師帥也」とあり。  
帥は率と同音義にて、キともヒキキとも訓り然れば、師帥  
率用の四字皆同じく、キと訓ずべし先達ち自在に  
引廻す意なり。  
又「左右曰以」の以字も古來キの假字也。此は萬葉集(四)  
雖率有(キタレ  
ドモ)とあ  
る率の義也。『論語』に「佛勝以中牟畔」とあるを、『説苑』

立節に「佛勝用中牟之縣畔」とあり。『國語』魯語に  
「魯人以吾人先濟」注、「以用也」とあれば、用字をキと  
訓ずべき證なり。  
又將率の將をヒキキともモチとも訓めば、用以持の三字  
同じくキともモチキとも訓むべし。假名遣ひの徴に、唐山  
の書を引も、いかなれど、訓義は互通のものなれば、此方  
の言にも徴すべし。  
『つれつれ草』五ノ七 「ある有職の人、白きものを衣たる  
日は、火筋をモチキルくるしからずと申されたり」又『同  
上』八十 「錢を奴のごとくして、つかひ用るものとしらば、  
ながく貧苦をまぬがるべからず。君の如く神の如く、おそ  
れたふとみて、したがへモチキルことなかれ」とあり。契  
沖氏の説に、「用、モチキ。常にかやうにかけり」といは  
れたる所の常は、『つれつれ草』などを指ていはれしなら  
ん。



扱又、餅を毛知比の假字は、『字鏡』『倭名鈔』に見えて正しきは申すまでもなし。然るに、今の世に、『定家假名遣』『倭字通例書』など云物には、「餅をモチキ、飯をイキ」とあり定家假字遣には、比の部に、「用モチヒテ」キの部に、「用モチキル」と兩出したり。是等を觀れば、『夫木集』も『經衡集』も、俱に餅は毛知爲に訛りて、用の方は訛ることなく毛知爲なるも知るべからず。然れば、餅にかけたりとて、波行の活用とも一定しがたし。因て姑く契沖氏に從て、毛知爲の假字とせり。……扱又、活用は和行にて、モチキ・モチウといふべし。急居の訓ツキキをツキウと訓る例なり。

(毛知爲考)

『毛知爲考』は、山崎美成の『海錄』八の一に載せたるを、前略して引けり。さて『俚言集覽』もちゐるのなる説と對照するに、語句さへ全く同一にして、唯『俚言集覽』なるは、佛經の例證少きが、その異なるのみ。

世に『俚言集覽』を村田了阿の著とせるより、此のもちゐるの説をも、了阿の説として引用せる人あり。今は『海錄』によりて、太田氏の説とせり。

そも『俚言集覽』の全體が、了阿の著述にあらざることは、先哲の論ずる處にして、本書中には、「愚案」「移山案」「方案」の三案あり。そのうち「愚案」最多く、此もちゐるの説、また「愚案」と記せり。されば、本書中「愚案」とある中には、「方案」と同じく、太田方の考案も交れること明なり(或は「愚案」とある全部が、方案なるべきも知るべからず)。中根肅治が「方案」を太田方の案なりと推定し、かつ書中に、福山地方のことを多く記せるによりて、本書の著者を太田全齋なりと斷定せしは、やゝ早計に失したれど、全齋の説の多數を占めたることは愈疑ふべからざるなり。なほ、のうれん(暖簾)の條なる参考をも參照すべし。

四 權田直助

用は、『山口栞』の説によりて、一たびは上一段の活とせしかども、猶よく思ふに、これもゐると云ふは、率の意編者いふ、本文の前に、「率。この詞上一段とせる説あり。それは、中二段となること、ぞ思ゆる、居は一段活なれども、つきと云語そはるときは、上二段の活詞となること下の説の如し」とて、中島廣足が詞の八箇補遺あるの條に急居を宛岐子と日本紀に訓せるにより、「ふるくは、居をうとも活かしいひしことしられたり。されば、萬葉なる雖立雖座といふ訓も當れりとおぼゆれば、ゐるは中二段にも活きしなるべし。さらば、にて、そ率のゐも同様の活とこそいふべけれ」といへる説を引きたり。に、これに持ちと云ふ語のそはりたるなるべければ是も上二段に、もちゐる・もちうる・もちうれと活く詞とすべし。

(詞のやちまた權田翁書入國語研究室藏)

此の他、契沖(和字正濫鈔二の二)は「もちゐ」此假名いまだ慥なる證を勤かへず。常にかやうにかけり。是正字ならば、はたらく時、もちうといふべし。ゐとう五音の故なり。もちゆといふべからず」といひ、楫取魚彦(古言梯)も「もちゐもちう。此假字見えず。しばらく是による」といへり。

四 モチキル(ワ行上一段活)

一 善 もちふ 『古事記傳』十七卷に、源仲正の歌を引證しての明辨出てより、誰もさぞと知れるなるべし。俊賴朝臣の歌にも「けふよりはわれをもちひのます鏡うれしきかげをうつしてぞみる」とあれば、記傳の考いよく信從すべし。

たゞし、『閑居友』に「ふつにもちゐることなかれとはいましめ給はず」とある如く、かの吉水僧正の比は、これを和行一段の活の格につかひしならんと、かつはおもひよりて、猶考ふれば、尙ふるくよりも、しか活かせるためしありき。

『蜻蛉日記』に「夢をも佛をももちゐるべしや、もちゐるまじや」とあるをみるに、べしといふ辭、まじといふテニラハへる文じよりかゝれるは、必一段の活き言なる例なり。かくてももへば、『夕霧卷』に「人の御名を、よさまにいひなほす人は、かたきもの也。そこに心清うおぼすと



も、しかもちゐる人はすくなくこそあらめ。こゝろうつくしきやうに、聞えかよひ給ひて、尙ありしましならんことをよからめ」とあるも、文字、本より誤りにはあらで、かの「夢をも佛をもちゐるべしや、もちゐるまじや」と同例なりけり。されば、此物語は、數本を見あはせて、人々のとかく校合するにも、こゝのかはれるはなしと聞えたる。そも、此『夕霧卷』、あるは『閑居友』などは、ふを<sup>〓</sup>とあやまれるならんともいへば、いはれぬべけれど、『かげろふ日記』なるは、いかてさはいはん。『和語燈』<sup>一七〇</sup>「病ちもければ薬を用ゐるが如し」と見えたるなども、これらに考へ明むべし。

編者いふ、此の説は、『山口栞』<sup>中四</sup>にあり。<sup>指出廻</sup> <sup>磯七</sup>

<sup>丁</sup>にも同意の説を記せり。「記傳の考いよく信從すべし」とあるを見れば、初は、行上二段活ヲ行上一段活の兩用説なりしが如し。然れども後には、ワ行上一段活に斷定せし

こと、下なる(八木村正辭の説の終なる編者の附記を見  
て知るべし。又『指出廻磯』に、「用ゐるのことは『活  
語雜話』四編に論定す」と冠註せり。四編は、世に公  
にせられざれど、その決定せし所以また(八)の附記の文  
を見て、ほど察知することをうべし。

二 萩原廣道

もちふるとある詞は、『古事記傳』<sup>モチイヒ</sup>に餅

にいひかけたる歌をひきていはれたる事ありて、定まれるが如くなれども、もちゐるもちゐれと活きたる例あれば、猶いかゞあらん。そのうへ、いひかけの句は、洗<sup>アラ</sup>ふを荒<sup>アラウ</sup>鶉にかけたる歌などもありて、下の活きのもじまでをば、思はぬさまなれば、かたくこゝの活とは定めがたし。案に、これは<sup>モチイヒ</sup>以と<sup>キ</sup>二合<sup>ツ</sup>せたる詞にて活きは一段の格なるべし。

(心の種下の二九丁)

廣道が、いひかけの説につきて、参考すべき説、近藤芳樹の『寄居歌談』<sup>四一</sup>にあり。其は、千種有功が歌

に、「くれなるにほへる鶴のいたゞきは八千代ふりにし霜やそめけん」とあるを、小林歌城が、四句ふりにしは、へふふるのさだめに違へりと、難じたるにつき、芳樹が意見を述べし條に、

へふふるは經のかた、ふりふるは舊のかたなればかよはしがたき、論なけれど、雨・雪霜などにそふるときは、かうやうの例かずおほくて、『續後拾遺集』に「今いくか日かずもふりぬつのくにのながらの橋のさみだれのころ」『延文百首』に「かひなしや月の夜ごろもいたづらにふり過ぬべきさみだれの比」『四十番歌合』に「冬がれのよもの木のめもはるさめにわがみつれなき年やふりなん」『夫木集』「雫そふ水まで石をうちわびてうきさみだれにほどふりにけり」また「まがねふくおとたえにけりさみだれの日數ふりゆくさびの中山」これら其證也。

鈴木高輅云、こはおもふに、經はふの一言にとゞまりて、りはた降<sup>ア</sup>のかたのみにかゝれる詞なるべし。『拾遺集』旋頭歌に「あづさ弓ちもはずにしていりにしをさもねたく引とどめてぞふすべかりける」これは、入に射をかねたるなるを、射のかたは、いの一言にて、りは入にのみかゝれり。そはもとより、射はいりとはたらかぬ詞なれば、かく經・射は、ふの一言にて、語をなせば、さもいひつべきことなるを、この外に、いひかけの詞の、語をなさて、外へうつるがおほし。

そは、不知を「しら雪」「しら波」など、しらのみにてやみ、不言を「いはし水」「いはでの森」など、いはのみにてやみ、不止を「やまぶき」「やましる」などやまにてやみて、外へうつせるたぐひ也。「ゆふ月よをぐら」「あふことのかた糸」なども、をぐらの



かたは聞クラき、かた糸のかたは難カマさと、さしをそへねばとのはぬことばなることおなじ例なり。

『夫木集』に「我をもちひのますかゞみ」とあるより、用の假字を、もちひとかき來れるを、或人、用ゐるといふ例を、あまた引出て、もちゐると定たり。用はまことにもちゐなれど、「われをもちひのますかゞみ」は、鏡もち飯をよみこめたれば、此うたにては、ひならてはかなはず。そは、これも用のかたは、たゞもちにてされ、ひは餅にかゝることとすれば、かなたがひのさまたげなし。されば經と降とのいひかけも、誤にはあらずといへる、いとつばらかなる論なり。

三 岩崎美隆

もちふといふ詞、岡部翁などは、つねにもちゆといはれけるを此は、心得るといふ事を二百年前の書にこゝろゆると書る類にて、後世の解説なること論なし。

されば『蜻蛉日記』をはじめ、五六百年にての假名の書に、もちゐるといへる例はおほく、もちひといへる例は見當らねば、今にしてもちひと定めむ事心ゆかず覺ゆ。されどもちひといふ方につきてあらがはゞ、彼仲正の餅をかねてよまれたるを慥なる據ともいふべけれど、加様の秀句は、假字違ひにかかはらぬ事もありて、戀に木居をかね、逢初に藍染を兼てよめる類なるべければ、これをもて慥なる證とはうけばりがたくや。

既に仲正同時代なる俊賴朝臣の『散木集』にも、田上にはべりける比、こもりがいねといふものをもちひにして、取出て侍けるを、またの日、みそうづにして侍るを見てよめる「法師子のいねとみしまにもちゐればみそうづまでもなりにけるかな」とみえたる。此三の句も、用に餅をかねてよまれたれど、此詞うちまかせては、もちゐるもちゐると活けばこそ、もちゐればとよまれたれ。もしもちふと活く詞な

『古事記傳』に、源仲正の餅を兼てよまれたる歌をひきて、もちふといふべきよし定められたるより、諸先生皆此説にしたがはれて、今はたれもくこの活きはもちふといふ事となれり。已レもこれにしたがひて、常にもちふといひ來れり。かゝれば、今更とかく論ふべきにあらねど、猶うたがはしくおもはるゝよしあり。

さるはこの詞ふるさものにみえたる例を考ふるに、いとちほくはみえねど、『蜻蛉日記』にもちゐると書る所あり。又『源氏物語』にもちゐるとかけり此源氏はつねにみる書なれど、心づかざりしを、近き頃、義門師の山口葉にひかれたるをみておどろかれぬ。かくふるさものに、もちゐるといへる證はあれど、もちひもちふなどいへる例は、一所も見當らず。

猶いはゞ、仲正時代より少しくだりてのものながら、『雅亮装束抄』にも、もちゐると見え、又少し下りては、『萬葉仙覺抄』『玉葉』などにもさやうにみえたり。松浦宮物語といふものは、貞觀年中にかけるといふ書あれど、其はいとかけがたき事なれど、無下に近世の偽書とはみえず、やゝふるさものは見ゆるを、それにもちゐるとあり。

らむには、いかに秀句なりとて、もちゐればとはいかてかよまるべき。編者いふ、前に出せる敷田年治の説の終なる編者の附記参照すべし。さればこの『散木集』の歌にても、仲正の歌なども、餅にかねてよまれたれど、此詞をうちまかせて、もちふと活く證にはとりがたき事をしてるべくや。

(もちふといふ詞の用格)

四 黒川春村

近來、用の字の活用ハタラキさま、諸説區々にして一定ならず。…抑此四種 編者いふ、ヤ行中二段・ウ行中二段・ハ行中二段・ワ行一段をいふ。のうちに、決なくよろしと思はるゝは、ワ行一段のはたらきさまなり。これは、若狭人義門上人のこゝろづきにて、『山口栞』中卷四一に見えたり。…されど、その徴アカンどもの、あまたしもあらぬによりてか、さのみうけはりてもいはぬからに、世の人、普くも信用せぬげに見えたる。故いまこゝにひろく明文をのせて、治定すべきやうを示しつべし。

『空穂物語』藤原君 三一右「つたなさ身にて、たかさ位をもちゐ



るべからず云々

『類聚名義鈔』

人部 佞モチル

雖モチル

彘部 遵モチル

目部 自モチル

田部 由モチル

月部 用モチル

影部 肆モチル

手部 控モチル

乙

部 已モチル

貝部 費モチル

水部 漬モチル

言部 試モチル

虎部 庸

寸部 尋モチル

食部 食モチル

舛部 施モチル

『原本以呂波字類鈔』

下 毛部、辭部 用モチル

余頌反 庸モチル

登部 仁御

舉・漬モチル

是也 行・注・食・以・控・肆・自・由・試モチル

已上

『平他字類鈔』

中モチル

庸モチル

以 同 用 同 試 同

『字鏡集』

糸部 繇モチル

○集中、なほ數字あれど、今は并

略さぬ。

『古鈔本奥義抄』

上 三種 蘇條

「シカリトイフトモ、ヲホ

クハモチキルベカラ爪。云々」

『薰集類抄』

左モチル

黒方 「くろぼうをもちゐるべきなり。云々」

々々

『籙中鈔』

卷四 日次條

「これをもちゐるべし。云々」

『雅亮裝束抄』

中九左

「正月以後いごならば、こう紅ばいは

もちゐるべからずと申す。云々」

『松浦宮物語』

上藏本

「人をもちゐることは、たゞ

そのかたちこゝろにしたがふべしと、云々」

『同』

中二左

「はかり事あるかに、つはものをもちゐ

る事かろくし。」

又、十右

「燕王のもちゐるところは、云々」

『梁塵秘抄口傳抄』

九左

「四三が説に、此古柳、この説

にたがひてうたはんは、もちゐるべからずとこそ

申つたへたるにと云へば、云々」

『新古今集隱岐本』

御序文

「もとの序ハシマを、かよはしもち

ゐるべきにあらず。云々」

『後鳥羽院島よりの御文』

扶桑拾葉集卷

「關白已下のさ

はりをば、ゆめく、なすまじき也。わがするとい

ふ事ありとも、もちゐるべからず。云々」

『千五百番歌合』

戀三顯照判詞

「古き人は、歌合の歌に

は、物語の歌をば、本歌にもいだし、證歌にも用る

まじと申ければ、云々」

『觀智院本古文尚書』

八左

由モチル 聖

『愚管鈔』

卷三藏本

「國王御子なくば、孫子を用ゐる

べしといふ道理は、いさぬ。云々」

一本、もちゐる

べしに作れり。

『無住雜談集』

卷十 十四右

「モチキルエノアタエムナ

ト云テ、云々」

『假名貞觀政要』

卷九 二左

「カルガユヘニ、ツネニコ

レヲモチキルベカラズ。云々」

『法然上人行狀畫詞』

卷廿一 十六右

「加様の僻事、ゆ

めくもちゐるべからず。云々」

『萬葉集注釋』

卷二 廿七左

「發句葦邊波の字は、てに

をはの字にもちゐる事常の習也。」

『同』

卷一 廿四左

「梵語よりはじめて、和語にいたる

もちいる(用)

まで、むねとは、男聲をもちゐるを口傳とす。中略

しかれば、さかともさきとも、さくともさきともい

はむ、みなおなじことばにとりて、男聲をもちゐる

をむねとする故に、さかといふべき也。云々」

『神皇正統記』

卷六 十六右

「人もえらび用られし日は、

まづ德行をつくれ。德行おなじければ、才用ある

をもちゐる。才用ひとしければ、勞効あるをとる」

『爲兼卿眞蹟本僻案集』

古今集、「心ざし深く

「折ければに

て、下旬のこゝろたがふべからず。居も歌によむ

詞なれどもさよからず。折をもちゐるべしと申さ

れし。云々」

羣書類従本には、「折を用待べし

とぞ申されし云々」に作れり。

かくあまた見えたれば、ワ行一段の活用山口葉にも見えたるとに治定して、いさ

かまどとふべきふしもあらざるべし。

山口葉にも見えたると

く、もちゐるべしとる文字

より、べしをうけたるが、さてまた、

『紫式部日記』

上類従本

「をりくの有さまにしたが



ひて、もちひんことのかたきなるべし。云々」

又、廿三右「すべて人をもどくかたはやすく、我

こゝろをもちひんことは、かたかべいわざを云々」

『長明發心集』卷一 六右「わそらのやうなるものを、

おきては何にかはせん。いともちひる事なしとい

ふ。云々」

『同』卷八 四左「又益なからむ天魔は、よくけうまんを

たよりとす。たとへば盜賊の中人をもちひるが如

し。云々」

『長明無名鈔』下 諸浪名條「ことばの廣略なれば、時に

したがひてもちひるべしとぞ申侍しを、云々」

これらによるときは、ハ行一段の活きとも、又いふべき

に似たれど、さる例は多からねば、しかりともさだめがた

し。さればこれらは、ハ文字の寫誤といふべき也。また、

『類聚名義鈔』 人部任イモチ イ部行イモチ 頁部頃イモチ 水部

「頃、モチキ  
ル」とあり。

『古本今昔物語集』卷十二 五段「二會ノ講師ヲ用イル

云々」

『世諺問答』流布本、「齒がためは、よはひをかたむるこ

ゝろ也。もちゐは近江國の火切のもちゐをもちい

るべき事なり」類從本には、「もちふべ  
き事なり」と見えたり。

これらは、ヤ行一段の活きといふべく見ゆれども、これも

又、等類すくなし。されば、とにかくにワ行一段をもて、正

しといふべきなり。

但し、『類聚名義鈔』人部に、「以モチフル  
モチフ」とあるをみる

に、同書中にあまたあるとは別にて、ハ行中二段の活きとあ

ぼしければ、いとゞあやしきまゝに、彼伴僧信友が、東寺

の觀智院なる原本もて、手づからさうつしたる本を借も

て見しに、さればこそ、其本には、モチキル・モチツとありけ

るを、白墨もて塗かくして、モチフル・モチフと改めたるな

りけれ。これに、彼をぢのさかしらしつとはしられたれど、

さても猶不審なるは、モチキルはワ行一段、モチツはワ行中

二段にて、其活きさま混合したり。かく二方に活く例も、ふ

つになき事にはあらねどこゝろみるは、こゝろ  
むる二方に活く例あり 上のくだりに載

るごとく、一段のかたは證どもおほく、中二段とおぼしき

は、たしかなる徴も見えねば、とてもかくても従ひがたかる

べし。

次に、ヤ行中二段もちい・もちゆ・もちゆれの活用は、世間俗用のみに

して、たゞしくは、もちゐるまじき事、論ふにあよばず。但

し、此ヤ行一段には、もしはたらかすまじきにもあらねど、

それはた慥かには、推決めがたきよしは、上件にことわれる

が如し。

次に、ワ行中二段もちゐ・もちう・もちうれは、『大同類聚方』の藥方

のところゝに、あまたところ見えたると、上に引る『類聚

名義鈔』此書、榊尾高山寺にも、古鈔本一部ありて、標題は三  
寶類字抄とあれど、まったく同本にして、異同すくなし。

一ところみえたるほかは、古書どもにも、をさゞ見およば

ず大同類聚方、流布の本は、偽書にしていふにもたらねど、べちに延長三年興  
書の本、寛仁三年興書の本など、いづれも全部百卷(九本)の秘本どもあ  
り。されどいと異やうなる文字づかひど  
もおほくて、ひたふるには信用しがたし。 然れば、此一書を證とし

て多書の徴を棄べきやうなし。故この中二段にも従ひがた

しと知べし。

次に、ハ行中二段もちひ・もちふ・もちふれの活きは、據どころなきに

しもあらねば、近來この活用をもちゐる人おほかり。さる

は、『經衡集』云按に、經衡は中宮大進藤公業男、延久四年  
六月廿一日卒。後拾遺集已下の作者なり。 このち

なじ人宮内卿經  
仲なり。 宇治殿よりもちひをおこすとて、「さかなに

はなにもあれどもこの中に心につかばこれをもちひよ」

かへし、「君がなを心もちひのうれしきにかなる人のな

さけなるらむ」『永久百首』元日 俊頼按に、俊頼朝臣の卒去は、  
大治三四年のほどなれ

ど、いまだつま

びらかならず。「けふよりはわれをもちひのますかゞみ嬉しき

かけをうつしてぞみる」夫木鈔卷一  
亦おなじ。 『夫木集』雜十四 鏡部



源仲正 按に、兵庫頭從五位上源仲正は、從三位賴政卿の父にて、大治頃の人なり。 元日戀「ちよまでも  
かげをならべてあひみんといはふかゞみのもちゐざらめ  
や」かう餅モチにいひかけたる歌どものあるによりてなる事、  
既に『山口栞』にも見えたるが如し。然れども、假字づかひ  
みだれたる世の歌どもを證として、うけぱりてしか定めむ  
事はいと／＼おぼつかなし。……

抑假字づかひを證とすべきは、天曆以往にかざる事にて、  
それより以來は信タみがたし。されば『古今集』の作者の歌  
には、さるあやまりふつにみえねど、『後撰集』時代の人に  
は、そのたがへるふしすくならず。編者いふ、已下、粟津に不逢  
をいひかけ(兼盛集、十二  
右) 粟に泡をかね(重之集、五右) 河伯に乾をかけ(蜻蛉日記、下之廿  
六右) 淡に泡をかね(空穂物語藤原君、廿五右) 直衣に名をしをかねた  
る例(源氏物語未摘花、卅一左) また尙の假字をなとかける例(風俗歌  
の彼乃行・公任卿眞蹟本近江御息所歌合) 梅をむめ沫雪をあはゆきとかき(浪  
華帖所載の行成卿眞蹟和歌) 遠をとを、不乾をかはかずとかける例(浪華  
帖所載の公任卿眞蹟萬葉集和歌) 等を列擧して、後世假字づかひの本とすな  
る、順朝臣の倭名鈔にすら、無万(馬)無女(梅)のたがひあれば、ましてそ  
の天曆頃より、百年ばかりくだりたる世の歌詞をもて、徴とすべしや。とかく  
上件に論らへる如く、ワ行一段の活きを必定といふべき  
なりけりと論定せり。事長ければ、これを省略したり。

『濱松物語』に「人にもちゐらるまじき御契に」『蓬生』に  
「世にもちゐらるまじき老人さへ」『夕霧』に「もちゐるべ  
き事ならず」『蜻蛉日記』に「夢をも佛をももちゐるべし  
やもちゐるまじや」『年中行事装束抄』に「七日の中にも  
もちゐるべからず」

かくもちゐるの辭はキが主にて國字は『私記』の毛知爲を  
證とし、受辭は『藤原君』を始て、諸書にべしまじとあるを  
據として考ふる時は波行といふ説は始より論らふにも足ら  
ぬ非なり。今其證とすべき限を擧て、和行に定れるよしを  
明すこと左の如し。

モチキの國字の證

『神代紀上私記』應永廿九年本に「知岐里志古斗乎毛知爲須志  
天」文祿本も亦同じ。但爲を草の爲に作る。 ○『紫式  
部日記』心もちゐ ○『類聚名義抄』毛千井 ○『字  
鏡集』以裝。モチキ ○『年中行事装束抄』用キル

五 堀 秀成 用の言の意は、持居にて、是を持て彼に  
居スエカシ彼を持て是に居る意也。試コトの心見ココロミ、率ヒキキの引居ヒキキなどの例  
也。ぬの音の下につく言は、大方他の言の下に居言の合へ  
るがおほければ、もちゐるも持居モチキなることをおもひ定むべし。  
(假字本義考 ○詞の八衢補正にも)

六 田中頼庸

もちゐるのモチは持さすらひ持かゝのみ。  
持いつくなどの持に同じくキの縁におくつよめの辭なり。  
キは引率・墜居オリキと同例にて、此辭の主はキが一語に係れり。  
『神代紀』の歌に「かもどく島に我ぬねし」『用明紀』に  
「側助大連」イハキの『齊明紀』に「引構唐人」キイアハセ『靈異  
記』に率注に「率爲天」などあるキと同じく、親しく身に  
引従ふを云なり。

國字の證に至ては、『神代紀私記』に用を毛知爲とある  
是なり。『藤原君に』「高きくらゐをもちゐるべからず」

受辭の證

『夕霧』五ともかくもちゐるべき事ならず。『蜻  
蛉日記』佛をもちゐるべしやもちゐるまじや。 ○  
『建曆三年下藁新制』もちゐるべし。 ○『八雲傳』廿九  
古歌に有む程の言をもちゐるべし。 ○『装束抄』上袴  
浮文をもちゐるべし。以公物コトもちゐるべし。例の定の  
浮文をもちゐるべし。有文をもちゐるべし。無文のかぶ  
りをもちゐるべし。象眼をもちゐるべし。青裏をもちゐ  
るべし。以上

『藤原君』廿一拙き身は高さ位をもちゐるべからず。  
○『建曆新制』よき下緒を付もちゐるべからざる事。金  
銀の緒もちゐるべからざる事。 ○『装束抄』袴は七日  
の中にももちゐるべからず。青色を近日はもちゐるべか  
らず。以上

『装束抄』上達部もおとなしき人はもちゐるべけれど以上



右用ゐるをべし<sup>レ</sup>まじと受たる辭にて、波行ならぬ證なり。若し中二段ならば、用ひ用ふると活くめれば、べし<sup>レ</sup>まじなど受べき謂なし。

羅行下二段に轉り活ける證

『濱松』<sup>三、四</sup>か<sup>ク</sup>もち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>られ思はれ給へるか。 ○『榊』<sup>二</sup>

四七世にもち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>られて、 ○『少女』<sup>一、二</sup>才の程よりはもち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>られず。 ○『歌庭訓』<sup>一、六</sup>痛くもち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>られぬ類の歌を、

○『唐物語』<sup>三、八</sup>もち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>られざりければ<sup>ハ</sup>、<sup>印本キをヒに作は古本による。</sup>『同』<sup>四、一</sup>世にもち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>られ、<sup>四、六</sup>時にもち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>られたり。以上

『濱松』<sup>二、二</sup>人にもち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>らるまじき御契に、 ○『蓬生』<sup>一、六</sup>世にもち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>らるまじき老人さへ、 ○『裝束抄』

劍をもち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>らる。 ○『行阿假字遣』もち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>らる。 ○『類字假字遣』もち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>らる。以上

『少女』<sup>六</sup>世にもち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>らるゝ方も、<sup>ウ、一</sup>世にもち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>らる

爲大解除<sup>モチキム</sup>用物。 ○『唯信抄』<sup>モチキム</sup>

ずと結ぶ例

『神代紀』<sup>上</sup>不<sup>レ</sup>用。 ○『裝束抄』近衛司などはもち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>ず。くゑんしやう彫たるはもち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>ず。劍笏をもち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>ず。

○『唯信抄』<sup>モチキム</sup>以上

右に掲る證例を考へ亘して、もち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>るの和行に定れる理をこそ悟るべけれ。…大概和行と波行の争ひは只<sup>レ</sup>モチのみを捕へて説を立る故に、己が心のひくかたにキルともフルとも活くやうに思ふめれど、キの一語を主に立て見むには、寧言<sup>ムシゴト</sup>を費さずとも、語學に明かならん人は、心から和行と悟るより外に道あらじと思ふ。

(大八洲學會雜誌卷の八)

七 榊原芳野

『古事記傳』に、源仲正の集を引て、用字の活用をば、は行中二段の者とす。元亨建武前よりは、は行中二段の活も雜じれりと見えて、『伏見院天皇薰物合』の

人は、<sup>ウ、一七</sup>世にもち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>らるゝ物に侍れ。 ○『裝束抄』一重をもち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>らるゝ時もあり。子孫をもち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>らるゝ。以上

『裝束抄』下重は色あるをもち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>れども、

右羅行に活ける證なり。但もち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>らるれとも活く例なれど未見當らず。

ると結ぶ例

『孝徳紀』<sup>一、三</sup>カ<sup>ラ</sup>ラズ<sup>モチキル</sup>須<sup>ニ</sup>臣<sup>ヲ</sup>翼<sup>タスケテ</sup> ○『裝束抄』七日ま

ではこれをもち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>る。若き時も皆もち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>る。厚き唐さぬをもち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>る。表袴も平絹をもち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>る。有文をもち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>る。綾の絹を交へてもち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>る。 ○『色葉字類抄』用、<sup>モチキル</sup>

○『文選』任、<sup>モチキル</sup> ○『續古事談』賢王はこれをもち<sup>ニ</sup>ゐ<sup>レ</sup>る。

むと結ぶ例

『類史』<sup>三、四</sup>帝<sup>ヲ</sup>、御願寺の塔木<sup>モチキム</sup>用<sup>ニ</sup>、<sup>牟我爲爾斗之天、</sup> ○『欽

明紀』<sup>二、七</sup>軍<sup>ヲ</sup>者<sup>ニ</sup>隨<sup>ニ</sup>王<sup>ヲ</sup>所<sup>ニ</sup>須<sup>ニ</sup>、<sup>印本キを</sup> ○『天武紀』<sup>下、一</sup>四方

文中、用<sup>ム</sup>の語あり。されど、用<sup>ム</sup>を餅<sup>ヒ</sup>にいひかけたるは、所謂雙關にして、假借の音なること、即「あしひきの山居」を病といひなし、「今や今や」を「うまやうまや」と通ぜしと同じ。且假字の違なしともいひがたき時代の歌なれば、かた<sup>ク</sup>たしかなる證とは爲難し。然れば中島萩原二氏の和行一段の語とは定められしなり。

ざるを『蜻蛉日記』の「用ゐるべしや、用ゐるまじや」の一語にては、信難<sup>ウケガタ</sup>しとて、後世の中二段に據れる書ども、此頃はかつ<sup>ク</sup>見ゆれど、彼用ゐるの例は、諸書に多し。『蜻蛉日記』の文章の、やすらかならぬと誤多きは人の知る所なれば、疑あらんは理なれど、我が一わたり見し書の中にも一段なる例證猶多し。……

古き書には『宇治拾遺物語』<sup>十四</sup>「唐綾一をば唐には美濃五匹がほどにぞ用ゐるなる」<sup>俗本をひに作る。古寫本はるに作れり。</sup>又寂蓮自筆の『薰集類抄』には「少しなりとも黒方を用ゐるべ



きなり」又『公事根源』中「孝經禮記毛詩尙書論語周易左傳年々めぐりてもちゐる」又『神皇正統記』一「文字をもちゐる事は之より始めり」又『古本遍照發揮性靈集』四の傍訓に「能書必用好筆」とあり。されば中古まては、漢文を讀むにも、用ひ用う用ゆなどの訛はなかりしと見えたり。

(洋々社談五五號、用の字の活)

八 木村正辭

用の字の活用は、若狹の義門師の『山口栞』に、和行一段のはたらきにて、もちゐるとかくべき由の説出たるより、近世大かたは、其説に従へるを、猶かの『古事記傳』の説によりて、波行中二段とし、もちひもちふるともとする人のこれかれみゆるは、あかず口をしきことなり。…今『記傳』の文を出して、其説の全く非なるよしを辨へんとす。編者いふ、古事記傳の文は前に出したれば、これを略せり。此に、「仲正は、『後撰集』の作者なれば、いまだ假字の

亂れざりしほどなり」とあるは誤りなり。此仲正は、頼政卿の父にて、『後撰』の作者の中正とは別人にて、後撰なるは中正にて、中の字に人偏はなきなり。かへりて經衡・俊頼などよりも、少しおくれたる人なれば、假字の證にはしがたきなり。

『夫木集』廿七、鷹部に、此仲正の歌をのせたるにも、木居を戀にいひかけたるがあり。編者いふ、「いとせめてこひをすだかはしたはれと人の心はとりもかはれず」とあり。其誤り、用を餅にいひかけたると全く同じ。しかるを、本居翁は『後撰』の中正と思ひ誤りたるから、此歌を證には引たるなり。頼政卿の父なることを知りたらんには、いかに此に引出て證とはなすべき。其故は、此人より先輩なる、經衡の歌をば、分注に出し、傍例とし、且「仲正は『後撰集』の作者なれば、假字の亂れざりしほどなり」とことわれる、本居翁の意おもひやるべし。ざるを、これらの辨別をもなさずして、ひたぶるに翁の説を尊信するは、かへりて翁の意に背くものなり。心を平らかにしてよくおもふべきなり。

かくてまた、こゝに一説あり。其は經衡・仲正などの時代には、餅の字の假字を誤りて、もちゐるとかさならへるによりて、用の假字のもちゐるにいひかけたる歌の、これかれあるならんとおぼゆ。其は先、『行阿の假字づかひ』と云ものに、

「朝餉あさが餅もち」と見え、此おなじつらに、「用庸もち」とあり。但此書は、うけばりてとりがたきものなれど猶例あり。『和名抄』官職部に「大炊寮於保爲乃」とあり。天智紀の旁訓、又類聚名義抄にも、オホキノツカサとあり。於保爲は大飯の義なれば、正しくは於保比とあるべきなり。これによれば、飯の假字をイキと誤りし

から、餅を用にいひかけたるものにて、かの歌どもは、かへりて用の字の假字は、キなりといふかたの證とこそすべし。ざるをこれによりて、用の字の假字を、波行と定めしは顛倒の説とをいふべき。假字は時代によりて異りあるものなれば、よく時代を正して、證にはすべきことにこそ。

(好古雜誌明治十五年十二月號)

岩崎美隆の『もちふといふ詞の用格』の奥に加納諸平書して、

諸平云、義門がもとより、こぞの夏の頃のさうそくに、『古事記傳』に『後撰』の作者として引れたる仲正は頼政の父の仲正をおもひたがひられたるなれば、もちひの假字わるしと、清水光房よりいひおこせつとて、もちゐにさだめたるよし書したりき。げにとうべなひをりしを、かくくさくさの明證あれば、もちゐにさだむべくなん。此頃義門がとひ來れるに、この説をみせしかば、いとよろこびはべりき。云々といへり。されば、仲正に關する辨駁は、はやく清水光房の説なりしなり。猶頭書に光房の按をも書したれば、左に記すべし

源兵庫頭仲正は、三河守頼綱の男、頼政の父にて、白河院の北面、『金葉集』以下の作者也。『後撰集』秋



上に、源中正、「雨ふりて水増りけり天の川こよひはよそにこひんとやみし」と出たるは別人にて、近院右大臣能有公の子にて、延喜の頃の人なり。『西宮記』にも源中正と見えたる人なり。『夫木抄』に引る『仲正家集』と云は、兵庫頭仲正にて、藤經衡よりも、同時ながら少し後れたるべし。經衡は『後拾遺集』より見えたる作者也。俊頼の「けふよりはわれをもちひのますかじみ」とよめるも同時にて、みな假名づかひ亂れたる時なれば、たしかなる據とは定めがたし。此傳、中正と仲正とを混じたるより誤れり。

九 大槻文彦

(編者いふ。初に契沖・谷川士清楫取魚彦本居宣長・義門・中島廣足『俚言集覽』・榊原芳野の説を擧げたれど、これを略せり)

右の説どもを参考するに、もちふるもちゐるとする説、着々考證ありて、動かすべからざるが如し。もちゆは固より

本職キラル、コヤチとあるを引用せり。

また佐藤誠實は、『語學指南』三の三に、「モチキル書冊中多く此の活としたり。モチフルと波行中二段に活きたるは極めて少し。」と記せるを見れば、何れとも決定せざるが如くなれど、『國家教育』第一

文字と聲音との關係に『夫木集』に「千代までも影を雙べてあひ見んと祝ふ鏡のもちひざらめや」とあるは、この比はもちひ餅をもちゐといひしからにもちゐる用にかけたるにて、今の板本の『夫木集』にももちゐるとあり。これによりて、用の字の假名をもちひとするは誤なり」といへば、ワ行上一段説なりしなり。

落合直文もワ行一段説にして、其の説『新編假名遣』に見えたれど、先輩の説を踏襲せるのみなれば、これを省略せり。

また『黒川真頼全集』第六の三に「用ひは古き格に従ひて用ゐとあるべし。用ひといふは、キのヒに往來

論ずるに足らず。もちひ・もちふるの考據も甚だ弱きが如し。何となれば、もちふる・もちふるると用ゐたる證一つも出てざるのみならず、其のもちひも、榊原氏・村田氏の考に據れば、いひかけとも訛とも言ふべければなり。

又もちゐ・もちうの説も承けられず。もちう・もちうると用ゐたる證もさらに無ければなり。『崇神紀』に、「急居此曰「菟岐宇」とあればとて、異なる語を取りて證とするは、確ならざるのみならず、急居をつさうといふこと、唯本書に一處見えたる異例にて、此他さらに見えずして、後の諸書には、すべて音便に、つゐるとのみ用ゐたり。されば、もちゐる・つゐる・ひきゐる等の語は、共に其語尾は、ゐる・われゐるの變化なりと斷定すべし。

(言 海 凡例の九頁〇復軒雜業、ハス、メゴ、ロチツク、アゲモチ)

此の他、文部省編輯寮の『語彙』七丁またワ行一段説にして、『持統天皇紀』に「不オモ惟ハス竭メゴ忠ロチツク宣アゲモチ揚

せるものにて後の格なり。中古に至りキをヒといひ、ヒをキといふことあり。かかる類は改めて古き方に従ふべきものぞ」といへるも、ワ行上一段説なるべし。

五 モチキル・モチウル

落合直澄

(上一段)『蜻蛉日記』もちゐるべしや。『源氏夕霧』もちゐる人々は、『伊呂波字類抄』用モチキル(上二段)『寛永板倭玉篇』庸モチウ 用モチウル以上正格なり。以下轉訛を擧ぐ。

『遊仙窟』モチユ 『伊呂波雜韻』モチイ・モチユ・モチユル 『源仲正家集』祝ふ鏡のもちひざらめや。『著聞』一用ひざりければ、『慶長板節用』モチフ 『定家かなづかひ』もちひ又もちゐる

以上轉訛語を擧げたるは、末を探て源を知るべき法を示



せるにて、譬へば、ぬはいひと轉訛し、うはゆふと轉訛すべ  
き理なれば、用いるの源語は用ゐるにして、用ゆ用ふの源  
語は、用うなりといふ理が知らるゝなり。

(皇典講究所講演一六、詞考筆録)

用は和行動詞なりと定めたる、義門師の説は動くまじき  
なり。突居以將引將は同種の詞にて、突居は異論なければ  
姑く置き、引將は、『新撰字鏡』に、「攜 兒比支井天由久」  
ともあれば、是れも論なかるべし。されどもちゐるひさゐは  
古くより判然せざりしにや、『類聚名義抄』『定家假名遣』  
などに、モチキル・モチフルと二様に記せり。『井蛙抄』など  
にはもちゆとも書けり。引將も、ひさゐるひさゆるひさふ  
るなども書けるもの多くして、以將引將は、轉訛語に至る  
まで、全く同じ動詞なりと知るべし。されば、もちゐるもひさ  
ゐると同じく、和行動詞なりといふことは混はしき事なかる  
べし。

又續動詞より他へ轉じ、動く例は、せめぐ(閱) ためす  
(試) ふける(耽) とぢむる(結) うけふ(誓) むせぶ(咽)  
しきる(頻) まるる(參) ねぢる(捻) こひしさびしむび  
しなど、聊見えたれど、四段の續動詞より、上下一段上下二  
段形状言の五種に轉じ動くことは、動詞三千言中、一つだ  
にあることなし。然れば四段のもちより、上二段にもちひ  
もちふると轉じ動けりとする説は、無據の説なるをや。但  
し以將とする説は、以と將と二言にて、轉言に非ず。混ふべ  
からず。  
又もちふと動けりとする説は、意味に於ても叶ふまじき  
なり。如何となれば、もちふのふには意味なければ、唯もち  
といふに異ならざればなり。もちゐるとすれば、以將の義  
にて、意味に於て、いとよく叶へり。  
又もちゐるもちゐると書ける例は『源氏』『濱松』『唐物語』  
『紫式部日記』『装束抄』などにいと多し。そが中に『應永

本日本紀私記』「知岐里志古斗乎毛知爲須志天」などあ  
るは確なり。

(皇典講究所講演二五、詞考筆録)



もとゐ(基)

上一段活併用の説なるか。あるひは未定説なるか明ならず。

一 モトヒ

行阿の『假名文字遣』二六に「もとひ 基」とあり。

二 モトキ

契沖 基 もとゐ。未考得。本居の義なるべし。

(和字正濫鈔二の二四丁)

中島廣足は『詞のやちまた補遺』上の二に「もちふるも  
ちゐる 此假字、『記傳』に定められたるが如くにては、活  
もこの二段活をさせり。なるを、近ごろ『山口栞』にいへる  
説ありて、其證例どもによる時は、和行一段の活なり。……  
しかるを『稜威道別』卷一の「云々取用ゆ」とかさたる  
は、いづれにもつかで非也」といへり。ハ行上二段活ヲ行

り。  
鹿持雅澄『萬葉集古義』活版本卷九の一〇丁は、「田井・雲井など  
と同じ例にて、キはそへていふ辭なるべし」といへ



もよおす(催)

モヨホス

一 契沖 催 もよほす。『萬葉』にモヤハシとも。編者  
傍訓なるべけれど未だ見當らず。

(和字正濫鈔三の四一丁)

谷川士清の『倭訓栞』にも、「もよほす 催をよめ  
り。『萬葉集』にモヤハシともいへり。もよふ義なる  
べし。ハス反フ也」といひ、

加茂季鷹の『正誤かな遣』寺田長興の『太津可豆衛』  
またモヤハシを引きてホの假名遣とせり。

二 楫取魚彦 もよほす 春虫の漸もこよひ出るよりい  
ふべし。催。

(古言梯)

三 大石千引

モヨホス 催 招呼す。

(言元梯)

やおら(徐々)

一 ヤヲヲ

一 楫取魚彦 やをら 或書に和字當たるは、意は似て  
假字違へり。和は也波、弱は與倭也。耶は與、乎は倭に通  
ふ。弱。

(古言梯)

谷川士清も『倭訓栞』に、「やをら 『源氏物語』  
に見えたり。弱さ意也。ヤヲとヨワと通ぜり。ソロン  
ロといふにひとしく、ソツトといふ意也」といひ、鈴木  
順(雅語譯解) 市岡猛彦(雅言假字格) 春登(假字音便

撮要)等また弱の義とし、

『俚言集覽』愚按および物集高見(かなづかひ教科  
書)また『古言梯』の説に従ひてヲの假名遣とせり。

物集高世は魚彦がやをらは和の義にあらずといへる  
を駁して、『支言考』<sup>丁七</sup>に、「ヤハはヨワ弱と通へり。

やはき物はよわく、よわき物はやはき意あるゆゑなり。  
『古言梯』にヤヲヲといふ言を註して、「……」とい

へるはさる事なれど、それはヤハとヨワとを別の言と  
してつかひわくる時の事にこそあれ。言の本をおしき

はむる時はヨワもヤハも同言なる事疑なきなり。され  
ばヤヲヲもまたヤハラともいひて源氏に「やはらづ、引い

あり。即ヤヲヲなり。假字も通はしてかけるをや。ハとヲとは通はねど

言なる故に、ヨワといふ時「といへり。ヤヲヲの假名遣を  
否定したるにはあらざれど、ヤホラなりといふ一説ま  
た和の意にて弱の意にあらずといへる説につきて、參

やちら(徐々)

考すべき説なればこゝに抄録せり。

二 村田春海

やをら 『古本今昔物語』に和の字を書  
り。ヤハラと同じ詞にて『狭衣』に「戸のやはらあくおとし  
て」と有と、一本にはやをらと有。こはヤハラを音便にヤ  
ヲヲといへる也。

ヲはウと通へばヤウヲといふべきをヤヲヲといへる也。  
編者いふ、物類稱呼(五の一〇丁)に、「やをら 西國および常  
陸にてヤウヲと云。そろくといふ事に用ひていふ」とあり。ハヒフ  
へをウと云は音便の常也。

『古言梯』に與和良と同じ詞にて弱字の意なりと有は違  
へり。

(假字拾要)

大槻文彦が『言海』に「やをら 弱の轉と云。さ  
れどヤハラといふも同語なるべければ柔なるべし」と  
いへるも同説なるべきか。

なほヤヲヲの語義を和の意に解せるは、はやく契沖



の『源註拾遺』國文注釋全書本二二頁に「やをらはヤハラカにて柔

らかなり。他の物語にはすなはちヤハラといへる所も

あり。俗にツロリといふにかなへり」といへり。和字正監

鈔(三の一二丁) 本居宣長『玉の小櫛』全集第五のこれ

を賛し、其の他、石川雅望は『源注餘滴』國書刊行會本七〇頁に、萩

原廣道は『源氏物語々釋』二丁に、『源註拾遺』の説

を引用し、清水濱臣(語林類葉) 大野廣城(掌中假字便

覽) 藤の舍千尋(玉の小琴)等また和の意に解し、ヲの

假名遣とせり。

また『増補語林倭訓栞』に、伴 信友も和ヲの意と解

していはく、『大和物語』「やをらすべり入て」『源

氏物語』薄「やはらづ、引いり給ひぬるけしきなれば」

『玉海』「治承四年二月四日丙戌祈年祭也云々上卿拍手法

手ノサキヲアハセテ、ヤヲラ 打合也」『一條禪閣江次

第抄』「今按、上卿拍手ノ作法不令有。手のささをあは

せてやをら〜と打合也」これら考合すべし」とい

へり。

三 賀茂真淵

『西要抄言釋』全集第四の三九五頁に「やをら 此

言ヤ、ウラクてふ言を後に略しいへるにて古言にはあら

ず。『今昔物語』に和の字を用ひしは、意はさる事にて假字

かなはず」といひ、

『源氏物語新釋』全集第五の四九三〇頁に、薄雲の卷なるやはらづ、と

いふ語を解して、「ヤハラヅ、といへる語なし。今は和と

いふに同じく聞ゆ。さてやをら少しづつ引入給ふをいふな

り」といへり。

四 高橋殘夢 やをら 彌折アと云義なるをリアをラと

約めてヤヲラと云。よてヲ也。身を彌折顯はると云義な

り。

(國字定 源上の一五丁)

此の他、近藤真琴の『ことはのその』小田清雄の『國

語かなつかひ早學』笹村良昌の『假字の栞』落合直文  
の『詞の泉』等またヲの假名遣とせり。

二 ヤホラ

小山田與清

『松屋筆記』國書刊行會本第一の二六〇頁に、「やはら

井やはらづい。ヤホラといふ詞は物語文にいとちほし。

『舊本今昔物語』に和ヲと數所書たれば、也保良の假名なる

ことうつなきを、人みなヤヲラと書くはあやまり也。『宇治

拾遺』にはヤハラとも有。也波良にて和ヲと有もおなじ。

語意は和かなるより起りて、俗にいふソツト又はシヅカ

ニなどと通ふめり。『源氏』薄雲湖月抄卅に、「やはらづ、引

いり給ふ」と見ゆ。『孟津抄』に「ちとづ、引入給ふ也」

とさへり」とさへり。

三 未定

やつかい(厄介)

加茂季鷹の『正誤かな遣』やをらの條に「やをら やはら  
和」とあげ、細注に「やをらのかな未詳」と記せり。

やつかい(厄介)

一 ヤククワイ

貝原好古

『和爾雅』卷八の六丁に「罹厄會」 出ニ于

『文選』王命論或作厄會見ニ于後漢書二十三卷」とい

へり。『諺草』卷五の三丁にも出でたり。

榎島昭武も『合類大節用集』九上の一丁に「厄介 今

按宜用厄會字乎。『文選』王命論遭罹厄會竊其

權柄」といひ、

小中村清矩も『洋々社談』五七號、俗に「厄會 『本

朝續文粹』七 仙院御報書に「非啻厄會之可惶兼傷」



凋殘之難<sup>レ</sup>救<sup>レ</sup> 又『朝野群載』三、江帥祭文に「然ラバ則厄會不祥<sup>ハ</sup> 他方ニ拂却天<sup>ニ</sup>」とみえて災厄の意より出たる詞也」といへり。

### 二 ヤクカイ

谷川士清 やくかい 王命論に「罹厄會」と見えたるは轉訛せるなるべし。或は役介とかけり。

(倭訓栞)

『俚言集覽』に「厄介 俗用又役害とも書」といひ、大槻文彦(言海)は役介・厄介の字を、物集高見(日本大辭林) 落合直文(ことばの泉)は厄介の字を書し、共にヤクカイの假名遣とせり。

### 三 ヤクカヒ

小山田與清

『文選』<sup>六臣注本五十</sup> 二卷四丁右 班彪が王命論に

「故雖遭<sup>レ</sup>罹厄會<sup>ニ</sup> 竊<sup>ニ</sup>其權柄<sup>ニ</sup> 勇如<sup>ニ</sup>信布<sup>ニ</sup> 彊如<sup>ニ</sup>梁籍<sup>ニ</sup> 成如<sup>ニ</sup>王莽<sup>ニ</sup> 云々」と見えて、罹厄會とは、厄難の會集せる時に罹<sup>スル</sup>よし也。されば今俗に「ヤツカイニ預ル」「ヤツカイニ成ル」「ヤツカイ者」などいふとは義別也。

按にヤツカイは家抱<sup>ニ</sup>にてヤカカへと云を訛れる辭ときこゆ。さてはヤツカヒと書べし。其家<sup>ニ</sup>にかゝづらひて介抱せらるゝよし也。

(松屋筆記國書刊行會本第二の五三四頁)

### やもう(病)

<sup>すもう(相撲)むこ</sup>  
<sup>う(向)の條參照</sup>

### 一 ヤマフ

一 清水濱臣 やまふ 病。『水鏡』中「佛像をやさしつみによりて、此<sup>ニ</sup>やまふ<sup>ニ</sup>おこれりし也」『續後拾遺集』<sup>雜下</sup>

「やまふにわづらひけるがすこしおこたりて」

(語林類葉)

### 二 中島廣足

後世の俗書にやまひの床など書べき所を、やまふの床とかけるあり。そは俗書のみにはあらず。『續後拾遺集』の歌のはし詞に「やまふにわづらひけるが、すこしおこたり侍ければ、云々」とあり。此ころよりの訛なるべし。

さてこは「やまひにわづらひ」といふべき所をかくいへれば、やまふは躰語にてやまひの音便なるべくおもはるれば、ヤマフと書はあたらす。ヤマウとかくべしとはやくおもひしに、『散木集』に「とがりするさつをのゆづるうちたえてあたらぬ君にやまふころかな」といふ歌あり。此やまふは正しく用語にて、「あたらぬ君にやむ」といふ心なれば、やむといふ詞のムを延てマンといひしものなるべし。然るを後に訛りて、躰語に用ふるやうになりしより、や

まひもやまふもちなじ語とつひにこゝろ得誤り來りしなるべし。

さらば音便にはあらねば、やまふとフをかきてよろしけれど、其もと訛りし言なれば、躰語の時は正しくヤマヒといふべきことにこそ。

(櫃のしづえ下の三〇丁)

此の他、橋 成員の『倭字古今通例全書』に「やまひ。やまふとも。『土左日記』に病者と書てヤマフビトと訓す」といへり。

### 二 ヤマウ

物集高見 やまう 病。やまひのおんべんとなへ。『續後拾遺集』「やまうに煩ひけるがすこしをこたり侍りければ」

(日本大辭林)



落合直文が『ことばの泉』の説またおなじ。

ゆい

ユヒ

一 谷川士清

ゆひ 田うゝるに、互に人を傭て植るをいふといへり。編者いふ、和歌童蒙抄(第七。早苗條)和歌色葉集(下巻の五八丁)等に見えたり。和よて「ゆひの手間入」ともよめり。越前に田結神社あり。此義なるにや。又ユヒは傭の音轉なるべしともいへり。今俗田ゆひといひ、信濃にてよひといふは、ユヨ通ず。『堀川百首』に「残る田はそしるに過じ明日はたゞゆひもやとはで早苗取てん」

(倭訓栞)

二 『成形圖説』

『本書』二卷八のに「由比 凡契約の事

をユヒといふ。心を同し力を合する謂也。猶與方同心などといふがごとし。……伊比。盖五家結の畧なり。又延

比とも云は、イヘユヒのイを省けるなり』と説き、組合郷保五人組・保社・鄰伍・五保・同保・保甲等を同一名稱なりとして、『農夫の保は第一貧富を入交て親疎なく、方限の中に組合ありて隣次にはかかはらず、親兄弟といへども貧なるは富ると組み富るは貧なると配り合て、平等の交を結び、縦ひ他組なりとも、事に支られ或は力の足ざる時は、互に助合救賑て、一村睦じく、公法を背ず、義讓を守ることにて誠に王代の遺風なり。『唐律』にも「同伍單弱比伍爲告」と見えたり。……』といひ、

なほ『ゆひは耕作の爲斗にあらず。村中惣百姓相續の法なり。しかるにゆひといへば小百姓以下の者のするわざにて、大百姓はゆひするなしとおもへるは大なる僻事なり。……ゆひとは久しき世より傳はりし詞也。古歌に「ゆひ

する人やかなるらん三ふし立まで早苗とらぬは」是延喜

帝の御製なりとて武田信玄此大御歌を引て、奉行頭人に示されたり甲陽軍鑑……又冷泉爲尹の歌に「そしるにもたらぬ庭田の早苗草ゆひの手まはる程だにもなし」千首……又隆源法師が歌に「のこる田はそしるに過じ明日はたゞゆひもやはで早苗とりてん」堀河百首……』といへる續 貫行の説を擧げたり。

大槻文彦の『言海』に「ゆひ 結の義。相連るゝ意かと云」といへり。

三 村田春海 ゆひ 此詞『堀川百首』の歌にも有て、中頃より後の歌にも是かれあり。……考にヤトの反ヨなるをユに通はして、ヤトヒをつとめてユヒといへるなるべし。

(假字拾要)

契沖(和字正濫鈔二の三)『俚言集覽』物集高見(日本大辭林) 落合直文(ことばの泉)等またユヒの假名遣

ゆうまどい

とせり。

『増補雅言集覽』に「ゆひ ……○弘訓云、陸奥出羽にては、たがひにする事をユヒといふ。互に按摩をするをユヒアンマといふ類なり」といへり。

参考

松永貞徳の『堀川百首肝要抄』二の二に「ゆひは賃を取て人の用をさく者也。たとへば筆耕をとりてかくをば、詩にも庸書といへり。庸の字をユキとよむなり。當世の日庸とてやとはれありくも此類也」といへり。小幡正信も詞林拾葉集(三の一丁)に「ゆひとは則雇といふ字をかく也。やとひ人の事也」といへり。庸は吳の原音イユウ次音ユウなれば其の轉音とせばユイの假名遣説とすべきが如し。

ゆうまどい



一 ユフマドヒ

一 賀茂眞淵 夕まどひ 夕まどろみを略して。今もよひまどひといふ。

(源氏物語新釋全集第五の四六三七頁)

萩原廣道の『源氏物語評釋』六の一に、『夕まどひよひよりねぶりたるをいふなるべし。』『新釋』に、「ゆふまどろみの略」とあるはいかゞあらん。されど意はたがはず」といへり。

二 『俚言集覽』愚按

夕まどひ 『倭字通例書』「ユフマドヒ、夕轉。注附 ユフトマロキ、夕轟。戀の詞」 愚案、轉をマドヒと訓るを見ればマドヒは圓にて圓轉の義。その圓をはたらかしてマトヒといふなり。俗、賠償をマドフといふも、亦圓轉にて、またかへすの義也。惑の義にはあらず。然れども惑をマドフと訓る本の義は亦圓轉の義なるべし。

べし。惑といふものは、右か左かとくらゝする故に圓轉の義あり。夕轟といふも車の圓轉する義なり。

三 清水光房

ゆうまどひ 光房云初夜惑寢也。ヒイの約ヒ也。老人のねぶたさに急てぬるをいふ。『新撰六帖』ひとりね 「待ち侘てさわぐ心の夕まどひぬるとはなくてねられもやせん」 此歌も戀人を待ち侘てさわぎまどふ心をやがて夕まどひにいひよせて、心のさわぎまどふまゝになすわざもえせずして、とくいねてぬるとしもなくねられもやせんとはかなささまによめり。『源氏』末摘花に 「老人などは、さうしに入ふして夕まどひしたる程也云々」とあり。

(落窪物語證解國文注釋全書本七〇九頁)

清水濱臣の『語林類葉』に『源氏物語』未「老人などはさうしに入ふして夕まどひしたるほど也」是はより早くねたるを云也。此かた本義なるべし。 『新撰六帖』信實「ひとりね、」待侘てさわぐ

一 ヨウテウ

一 山岡俊明

『類聚名物考』第六冊の「ようてう 笛の異名歟。『義經記』一舍那王殿鞍馬出の所。「承安二年二月二日の曙に鞍馬をぞ出給ふ。云々。我ならぬ人のおとづれて、返らしたびにさる者此に有りしぞと思ひ出て、あとをもとぶらひ給へかしと思はれければ、かんちくのようてうを取出し、半時ばかりふきて、音をだにあとのかたみとて、なくく鞍馬を出給ひ云々」 かんちくのようてうとは漢竹の笛なり。ようてうは異名歟。笛の音はほそくながうつゞきて有れば羊腸などにやたとへけん。未考或人云朝鮮の方言なりと」

『同書』同、六に「ようてう 笛の事。『義經記』一、鞍馬出の處。「かんちくのようてうを取出し、半時ばかり吹て云々」 笛、唐音テウなり。瑤、ヨウなれば、玉の笛といふ

心の夕まどひぬるとはなくてねられもやせん」是はねそ方にいへるなり。轉誤ならん。』といへり。光房は此の説を踏襲したるものゝ如し。

物集高見の『日本大辭林』落合直文の『詞の泉』と

もに、夕惑の義とし、夕方より早くまどろむ意とせり。

橘 成員(和字古今通例全書) 谷川士清(倭訓栞) 石

川雅望(雅言集覽)等またヒの假名遣とせり。

二 ユフマドイ

村田春海

ゆうまどい

夕まどろみの略なり。『源

氏』末摘花に「ゆうまどいしたる程也」といへり。

(假字拾要)

ようじよう(横笛)

ようじよう(横笛)